

子供の生活実態調査【小中高校生等調査】

結果の概要<中間のまとめ>

東京都では、今後の子供・子育て支援施策の参考とするため、子供と子育て家庭の生活状況などに関する「子供の生活実態調査」を実施しました。小学5年生、中学2年生、16-17歳を対象とした調査結果の概要(中間のまとめ)は、以下のとおりです。

調査の概要

- (1) 調査対象 都内の4自治体(墨田区・豊島区・調布市・日野市)に在住の小学5年生、中学2年生、16-17歳(高校2年生及び高校に在籍していない同年齢の子供を含む)の子供本人とその保護者
- (2) 調査対象数 19,929世帯
- (3) 抽出方法 住民基本台帳により、対象年齢層の者すべてを抽出
- (4) 調査方法 郵送法(一部ウェブ回答)
- (5) 有効回答数 子供 8,367票(有効回答率42.0%)
保護者 8,429票(有効回答率42.3%)
- (6) 調査期間 平成28年8月5日から9月7日まで

【本調査における「生活困難」の取り扱いについて】

本調査では、子供の「生活困難」を以下の3つの要素に基づいて分類した。

①低所得

等価世帯所得^{※1}が厚生労働省「平成27年国民生活基礎調査」から算出される基準^{※2}未満の世帯^{※3}

※1 世帯所得(公的年金など社会保障給付を含めた世帯所得)を世帯人数の平方根で割って調整した所得

※2 厚生労働省「平成27年国民生活基礎調査」(所得は平成26年値)の世帯所得の中央値(427万円)を平均世帯人数(2.49人)の平方根で除した値の50%である135.3万円

※3 低所得世帯の割合は、世帯所得の把握の方法や、可処分所得ではなく当初所得を用いている点などの違いがあるため、厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」にて公表されている「子供の貧困率」(16.3%)と比較できるものではない

②家計の逼迫

公共料金や家賃の滞納、食料・衣類を買えなかった経験など7項目のうち、1つ以上該当

③子供の体験や所有物の欠如

子供の体験や所有物などの15項目のうち、経済的な理由で欠如している項目が3つ以上該当

生活困難層	困窮層+周辺層
困窮層	2つ以上の要素に該当
周辺層	いずれか1つの要素に該当
一般層	いずれの要素にも該当しない

(※詳細は付属資料P47参照)

主な調査結果

1 生活困窮の状況

(1) 家計の状況

金銭的な理由から、食料や衣類の購入、公共料金の支払いができなかった割合は、困窮層に多い

[食料や衣類の購入、公共料金の支払い状況(過去1年間)]

- 約1割の世帯において、過去1年間に金銭的な理由で家族が必要とする食料が買えなかった経験があり(図表 1-1-1)、約 15%で衣類が買えなかった経験がある(図表 1-1-2)。また、約 3%の世帯において、公共料金(電話、電気、ガス、水道)の滞納経験がある(図表 1-1-3)。この割合は困窮層で特に多く、食料では困窮層の約 6 割から約 7 割(図表 1-1-4)、衣類では約 8 割(図表 1-1-5)、公共料金では約 2 割から約 3 割である(図表 1-1-6)。

(2) 子供の生活水準(所有物と体験)

子供の所有物や海水浴・スポーツ観戦などの体験の有無は、生活困難度により差がある

[所有物の状況]

- 小学 5 年生、中学 2 年生が「欲しいが、持っていない」とした物品は、「携帯音楽プレーヤー」「携帯電話、スマートフォン」「子供部屋」が上位であった(図表 1-2-1)。「2足以上のサイズのあった靴」などの生活用品や、「スポーツ用品(野球のグローブや、サッカーボール等)」など子供の生活の質にかかわる物品について、生活困難度別の差が大きい(図表 1-2-2)。

[子供への支出]

- 保護者が「経済的にできない」子供のための支出は、「1年に1回くらいの家族旅行」、「学習塾(または家庭教師)」、「習い事」であり、約1割から約2割の世帯がこれに該当する(図表 1-2-3)。特に、年齢の高い子供を持つ保護者ほどこれらが支出できないとする割合が多い(図表 1-2-3)。

[子供の体験]

- 小学 5 年生と中学 2 年生の保護者に、過去1年間において、子供と「海水浴に行く」などの体験をすることがあったかを聞いたところ、「金銭的な理由」で体験が「ない」としたのは、小学 5 年生では 2%から約 5%、中学 2 年生では約 3%から約 6%である(図表 1-2-4)。「時間的な制約」で体験が「ない」としたのは、小学 5 年生では約 5%から 14%であり、中学 2 年生では約 13%から 21%である(図表 1-2-4)。困窮層では、小学 5 年生の保護者の約 26%から約 38%、中学 2 年生の保護者

の約 28%から約 45%が、「金銭的な理由」によってこれらの体験を子供にさせることができないとしている(図表 1-2-5,6)

(3)子供の食と栄養

食事の回数や栄養群の摂取状況は、生活困難度により差がある

[朝食の摂取状況]

- 中学 2 年生の 1.9%が朝食を「いつも食べない」、2.9%が「食べない方が多い(週 1、2 日)」(図表 1-3-1)。困窮層では、「いつも食べない」割合が 7.8%、ひとり親(三世代)世帯では 6.0%である(図表 1-3-1)。

[栄養群の摂取状況]

- 小学 5 年生と中学 2 年生の 7 割以上が給食以外にも毎日野菜を食べるが、「1週間に 2~3 日」以下の子供も約 1 割存在する(図表 1-3-2,3)。小学 5 年生の困窮層では、約 2 割が「1週間に 2~3 日」以下である(図表 1-3-2)。「肉か魚」についても、同様に、「1 週間に 2~3 日」以下の子供が存在する(図表 1-3-4,5)。「果物」については、給食以外にまったく「食べない」子供が小学 5 年生で 3.3%、中学 2 年生では 4.6%である(図表 1-3-6)。
- 16-17 歳では、食事の回数が「ほぼ毎日 2 食」以下である割合が、全体の 13.2%となっている(図表 1-3-7)。困窮層では、22.7%が「ほぼ毎日 2 食」以下である(図表 1-3-7)。動物性たんぱく質では差がないものの、野菜、植物性たんぱく質、乳製品、果物では、困窮層は一般層に比べ摂取頻度が少ない(図表 1-3-8)。

(4)住宅の状況

住居の広さは「4室以上」が多く、居室が少ない住宅では、子供の学習時間が少ない傾向にある

[住宅の広さ]

- 子供の住む住居の広さでは「4室以上」(玄関・風呂等を含まない)が約 7 割であるが、約 5%が「2室以下」である(図表 1-4-1)。「2室以下」の住宅に住む 16-17 歳は 5.1%存在し(図表 1-4-1)、彼らは家に勉強場所がなく、学校の授業以外の学習時間も少ない傾向がある(図表 1-4-2,3)。

2 子供の学び

(1) 学校選択

公立・私立別の高校選択の理由は、生活困難度により異なる

[学校選択の理由]

- 高校選択を学校の設置者別にみると、一般層は公立が 41.3%、私立が 55.8%であり、困窮層は公立が 59.2%、私立が 36.1%となっている(図表 2-1-1)。
- 公立高校を選んだ理由は、「私立高校の授業料等の費用が高かったため」が一般層では 61.3%であるのに対し、周辺層では 78.1%、困窮層では 85.5%である(図表 2-1-2)。私立高校を選んだ理由は、一般層では「教育の質が高い」(43.6%)、「教育方針が気に入った」(37.5%)が多いのに対し、困窮層では「公立高校の入試に合格しなかった」(54.4%)が最も多い(図表 2-1-3)。

(2) 授業の理解度

授業がわからないと感じる子供は、一般層に比べ困窮層に多い

[授業の理解度とわからなくなってきた時期]

- 小学 5 年生の 85.6%が通常の授業を「いつもわかる」「だいたいわかる」と答えているものの、13.0%が「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」と回答している(図表 2-2-1)。中学 2 年生では、この割合が 24.3% である(図表 2-2-2)。困窮層ほど割合は高くなり、小学 5 年生では約 3 割(図表 2-2-1)、中学 2 年生では約半数となっている(図表 2-2-2)。
また、小学 5 年生の授業がわからない子供の 36.6%が、小学 3 年生までにわからなくなったと回答し、中学 2 年生の授業がわからない子供の 34.4%が、小学生段階でわからなくなったと回答している(図表 2-2-3,4)。
- 16-17 歳の約 3 割は、授業が「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」と回答している(図表 2-2-5)。授業が「わからないことが多い」「ほとんどわからない」子供は、一般層で 15.3%であるのに対し、困窮層では 28.6%である(図表 2-2-5)。

(3)学校外での学習状況

学習塾に通っている(または家庭教師に来てもらっている)子供は、一般層に比べ困窮層に少ない

[通塾状況]

- 学習塾に通っている(または家庭教師に来てもらっている)子供は、小学5年生と中学2年生でそれぞれ約5割、16-17歳で約3割いる(図表2-3-1,2,3)。この割合は、困窮層ほど低くなり、困窮層の小学5年生で約3割、中学2年生で約4割、16-17歳で約1割となる(図表2-3-1,2,3)。

(4)学習環境の状況

自宅で勉強場所がない子供は、一般層に比べ困窮層に多い

[学習環境の欠如の状況]

- 「インターネットにつながるパソコン」がない子供は、小学5年生と中学2年生では、それぞれ31.8%と24.0%(図表2-4-1)、「自分だけの本」は14.0%と11.6%である(図表2-4-2)。困窮層では、どの年齢層も「インターネットにつながるパソコン」がない子供は約4割、小学5年生では「自分専用の勉強机」がない子供も約4割いる(図表2-4-1,3)。
- 各年齢層の約3%から約4%が「自宅で宿題(勉強)をすることができる場所」がない(欲しい)としている(図表2-4-4)。困窮層では、この割合は小学5年生で11.2%、中学2年生で13.9%、16-17歳で16.8%である(図表2-4-4)。どの年齢層においても、約4割の子供が「家で勉強できない時、静かに勉強できる場所」を「使ってみたい」としている(図表2-4-5)。

(5)補習教室への参加状況

公立小中学校で行われる補習教室への参加率は、一般層に比べ困窮層が高い

[補習教室への参加状況・参加しない理由]

- 公立の小中学校で行われる補習教室については、小学5年生および中学2年生の約2割から約3割が「いつも」または「時々」参加している(図表2-5-1,2)。困窮層の子供は、一般層に比べて参加率が高い(図表2-5-1,2)。補習教室に参加しない理由は「必要がない」が最も多いが、「学校でやっていないから」も小学5年生で22.2%、中学2年生で15.0%存在する(図表2-5-3)。

3 子供の生活・友人関係

(1)放課後の過ごし方

クラブ活動に参加する子供は、一般層に比べ困窮層に少ない

[放課後の過ごし方]

- 平日の放課後に過ごす場所について、過ごす頻度が「週に3～4日」以上の割合をみると、小学5年生では、「自分の家」が最も多く約6割、次いで「塾や習い事」が約4割、「公園」が約2割である(図表3-1-1)。中学2年生では、「学校(部活など)」が最も多く約7割、次いで「自分の家」が約4割、「塾や習い事」が1割である(図表3-1-2)。
- クラブ活動などについては、中学2年生の約9割、16-17歳の約7割が参加しており、中学2年生では困窮層ほど参加率が低い(図表3-1-3,4)。16-17歳の困窮層と周辺層では、一般層に比べて参加率が10%程度少ない(図表3-1-4)。

(2)友人関係

放課後一人で過ごすことが多い子供は、小学5年生、中学2年生で約1割、16-17歳で約2割いる

[友人関係と孤立]

- 16-17歳の約5人に1人は、平日の放課後に「一人で過ごす」ことが一番多い(図表3-2-1)。小学5年生、中学2年生では、約1割である(図表3-2-1)。

[いじめ]

- いじめられたことが「よくあった」「時々あった」と回答した小学5年生は、困窮層に多く、約4人に1人である(図表3-2-2)。

(3)居場所事業等の利用意向

居場所事業への利用意向は、年齢層が高いほど関心が高く、一般層に比べ困窮層で高い

[居場所事業への利用意向]

- 居場所事業については、特に、16-17歳において潜在的な利用意向が高くなっている。16-17歳の約3人に1人が家以外で「平日の放課後に夜までいることができる場所」や「休日にいることができる場所」を「使ってみたい」としている(図表3-3-1,2)。生活困難度別には、潜在ニーズは

の層においても高くなっているが、困窮層は一般層と比べて「使ってみたい」「興味がある」とする子供の割合がより多く、居場所事業が困窮層のニーズに対応していることが示唆される(図表 3-3-1,3)。

- 夜遅くまで子供だけで過ごした経験がある小学 5 年生は約 6%である(図表 3-3-4)。就労している小学 5 年生の母親の 4.9%が早朝(5~8 時)、5.9%が夜間(20~22 時)、33.4%が土曜、19.9%が日曜・祝日の仕事がある(図表 3-3-5)。この割合は、ひとり親世帯の方が高い(図表 3-3-6)。小学 5 年生の約 4 割、中学 2 年生の約 5 割、16-17 歳の約 6 割が「平日の放課後に夜までいることができる場所」を「使ってみたい」「興味がある」としている(図表 3-3-7)。

【「夕ごはんをみんなで食べることができる場所」への利用意向】

- どの年齢層も 5 割近くの子供が「家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所」について、「使ってみたい」「興味がある」としている(図表 3-3-8)。この割合は、困窮層ほど高い(図表 3-3-9)。

4 子供の健康と自己肯定感

(1)健康・医療

自分の健康状態が良くないと感じている子供や、医療機関の受診抑制を経験したことがある子供は、困窮層ほど多い

【子供の健康状態】

- 子供の主観的健康状態および保護者からみた子供の健康状態は、困窮層ほど良くない傾向にある(図表 4-1-1,2,3、図表 4-1-4,5,6)。むし歯がある子供は困窮層で多くなっており、「4本以上」ある子供も、小学 5 年生で 5.5%、中学 2 年生で 5.0%、16-17 歳で 3.8%となっている(図表 4-1-7,8,9)。

【医療機関の受診抑制】

- すべての年齢層において、1割強の保護者が「過去 1 年間に、子供を医療機関で受診させた方がよいと思ったが、実際には受診させなかったことがある」としている(図表 4-1-10)。この割合は、困窮層ほど高くなっている(図表 4-1-11)。また、小学 5 年生では、ひとり親(二世帯)世帯が多い(図表 4-1-12)。

- 受診抑制の理由は、小学 5 年生の困窮層では「様子改善」が最も多く、次いで「多忙」が多い(図表 4-1-13)。中学 2 年生の困窮層では「多忙」が最も多く、次いで「本人受診希望なし」が多い(図表 4-1-14)。また、16-17 歳の困窮層では、周辺層や一般層に比べ、「自己負担金払えず」が多くなっている(図表 4-1-15)。

[予防接種未接種状況]

- 小学 5 年生と中学 2 年生の定期予防接種の未接種は少ないものの、任意接種であるインフルエンザ(過去 1 年)、おたふくかぜの未接種率は、約 3 割から 5 割弱となっている(図表 4-1-16)。未接種率は困窮層ほど高い(図表 4-1-17,18)。

(2)自己肯定感

一般層に比べ困窮層の子供は、孤独を感じる割合が高く、主観的幸福度が低い傾向にある

[自己肯定感]

- 自己肯定感について 9 項目を聞いたところ、生活困難度別に差が見られる項目は、小学 5 年生と中学 2 年生では少ないが、16-17 歳では、「不安を感じることはない」「自分のことが好きだ」以外の 7 項目で差が見られ、困窮層では一般層より否定的な回答(「(そう)思わない」)をする割合が高くなっている(図表 4-2-1)。
- 小学 5 年生の 12.2%、中学 2 年生の 9.8%、16-17 歳の 11.7%が「孤独を感じることはない」について「(そう)思わない」(=孤独を感じる)と回答しており、この回答は困窮層に多い傾向がある(図表 4-2-2,3,4,5,6,7)。

[子供の主観的幸福度]

- 16-17 歳の子供に、この 1 年間を振り返っての幸福度を 0(とても不幸)から 10(とても幸せ)の 11 段階で聞いたところ、幸福度が低い(幸福度 0-3)割合は、一般層が 4.6%、困窮層が 13.8%、幸福度が高い(幸福度 8-10)割合は、一般層が 50.7%、困窮層が 31.0%となっており、一般層に比べ困窮層の子供の主観的幸福度は低い傾向にある(図表 4-2-8)。

[子供の抑うつ傾向]

- 小学 5 年生の 12.3%、中学 2 年生の 20.1%にて抑うつ傾向が見られる(DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度)(図表 4-2-9)。中学 2 年生では、困窮層ほど抑うつ傾向が見られる(図表 4-2-10)。16-17 歳の 26.3%が「気分・不安障害相当」(K6 スケールにて 9 点以上)と見られる(図表 4-2-11)。抑うつ傾向は、中学 2 年生と 16-17 歳では、一般層と比べて困窮層に多い(図表 4-2-10,12)。

5 保護者の状況

(1) 保護者の就労状況

一般層に比べ困窮層の保護者は、正規社員の割合が少ない

[父親の就労状態]

- 父親の就労状態は正規社員が最も多く、約 8 割となっている(図表 5-1-1,2,3)。この割合は困窮層ほど低くなり、困窮層の小学 5 年生の父親では約 6 割、中学 2 年生と 16-17 歳の父親ではそれぞれ約 5 割となる(図表 5-1-1,2,3)。

[母親の就労状態]

- 母親の就労状態は非正規社員が最も多く、小学 5 年生の母親の約 4 割、中学 2 年生と 16-17 歳の母親のそれぞれ約 5 割が非正規社員である(図表 5-1-4,5,6)。生活困難度別に正規社員の割合をみると、小学 5 年生と中学 2 年生の母親では、困窮層が約 1 割、一般層が約 2 割と差が出ている(図表 5-1-4,5,6)。

[共働きの状況]

- 共働きの状況は、「一人が正規、一人が非正規・自営・自由業」の割合が最も高く、小学 5 年生のふたり親世帯の場合は約 4 割、中学 2 年生と 16-17 歳の場合はそれぞれ約 5 割となっている(図表 5-1-7)。また、ふたり親世帯であっても正規社員の保護者がいない世帯が約 13%から約 16%ある(図表 5-1-7)。この割合は困窮層ほど高くなり、各年齢の困窮層において、それぞれ約 4 割である(図表 5-1-8,9,10)。

(2) 保護者の健康状態と精神的ストレス

一般層に比べ困窮層の保護者は、主観的健康状態が悪く、抑うつ傾向にある割合が高い

[保護者の健康状態]

- 各年齢層でそれぞれ 9 割を超える保護者は、自分の健康状態について、「よい」「まあよい」「ふつう」と答えている(図表 5-2-1)。この割合は困窮層ほど低くなり、小学 5 年生と中学 2 年生では約 8 割、16-17 歳では 7 割強である(図表 5-2-2,3,4)。

[保護者の抑うつ傾向]

- 小学 5 年生、中学 2 年生、16-17 歳のいずれにおいても、困窮層の約 6 割から約 7 割の保護者が、心理的ストレスを抱えている(図表 5-2-5,6,7)。「気分・不安障害相当」(K6 スケールにて

9 点以上)と見られる保護者は、各年齢層において1割を超える(図表 5-2-8)。この割合は困窮層ほど高くなり、困窮層の小学 5 年生の保護者は約 3 割、中学 2 年生と 16-17 歳の保護者は、それぞれ約 4 割となる(図表 5-2-5,6,7)。

(3)相談相手

保護者の約1割は、困ったときに相談する相手がおらず、この割合は困窮層ほど高い

[保護者の相談相手]

- 保護者の約1割は、困った時に相談する相手がいない(図表 5-3-1)。この割合は困窮層ほど高くなり、各年齢層の困窮層において、それぞれ 2 割を超える保護者は相談相手がいない(図表 5-3-2)。世帯タイプ別にみると、ひとり親世帯の相談相手がいない割合がふたり親世帯に比べて高い(図表 5-3-3)。

6 制度・サービスの利用

(1)子供本人の支援サービス利用意向

子供の利用意向が最も高い支援サービスは、「家で勉強できない時、静かに勉強できる場所」

[支援サービスへの子供の利用意向]

- 子供が利用意向のある支援サービスは、「家で勉強できない時、静かに勉強できる場所」について、「使ってみたい」「興味がある」の割合が最も高く、約 6 割から約 7 割となっている(図表 6-1-1,2,3)。また、中学 2 年生と 16-17 歳については、一般層に比べ困窮層の子供の方が、各種支援サービスの利用意向が高い傾向にある(図表 6-1-4,5,6)。
- 学校外の学習支援の潜在ニーズは高く、「大学生が勉強を無料でみてる場所」について、子供の約 5 割から約 6 割が「使ってみたい」または「興味がある」としている(図表 6-1-1,2,3)。また、保護者の約 3 割が「学校以外が実施する学習支援」に対して「興味がある」としている(図表 6-1-7)。

(2)情報の受け取り方法

子供に関する施策の情報の受け取り方法は、「学校からのお便り」が最も多く、困窮層ほど行政機関からの情報取得方法が利用されていない

[施策情報の受け取り方法]

- 子供に関する施策の情報の受け取り方法については、「学校からのお便り」が最も多く、すべての年齢層で8割を超えている(図表 6-2-1)。また、行政経由の情報取得方法である「行政機関の広報誌」「行政機関のホームページ」について、一般層よりも困窮層の利用率が低い(図表 6-2-2,3,4)。

(3)支援サービス利用状況・認知状況・利用意向

保護者の利用関心が最も高い支援サービスは、「学校が実施する補講」

[支援サービスの利用状況・認知状況]

- 「子ども食堂」「フードバンク」といった食事支援に関するサービスについては、知らないため利用されていない割合(非認知による不利用率)が高く、小学5年生と中学2年生でそれぞれ約4割、16-17歳で約3割となっている(図表 6-3-1)。また、困窮層は一般層に比べ、各支援サービスについて非認知による不利用率が高い傾向にある(図表 6-3-2,3,4)。

[支援サービスへの保護者の利用意向]

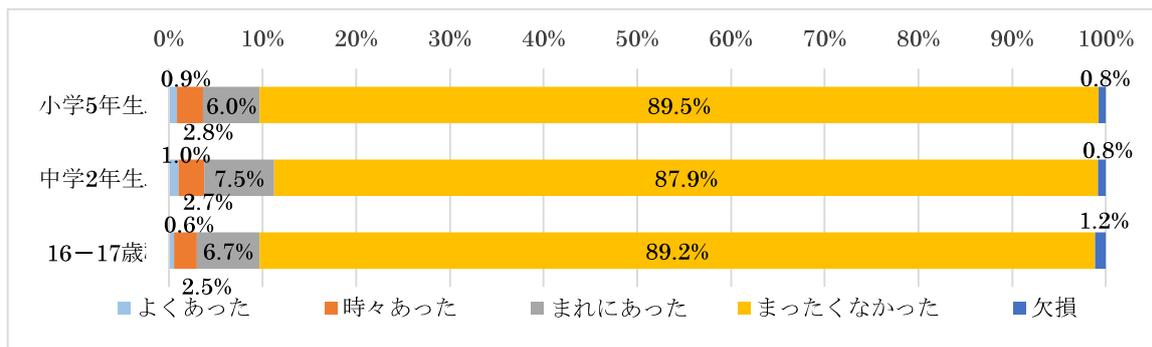
- 保護者が利用意向のある支援サービスは、すべての年齢層で、「学校が実施する補講」への利用意向が最も高く、次いで「学校以外が実施する学習支援」、「居場所事業(小学校高学年も利用できる児童館や学童クラブ、中学生以上の子供が自由に時間を過ごせる場所など)」と続いている(図表 6-3-5)。これらの支援サービスについては、一般層に比べ困窮層の方が各支援サービスの利用意向が高い(図表 6-3-6,7,8)。

図表

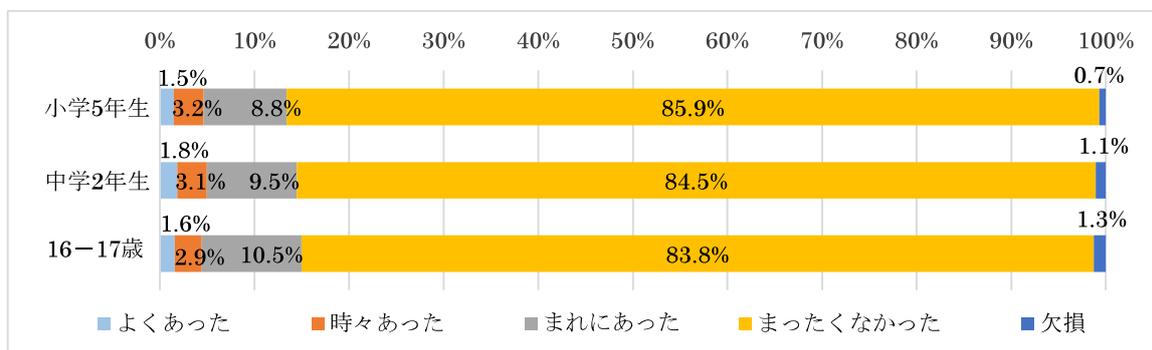
1 生活困窮の状況

(1)家計の状況

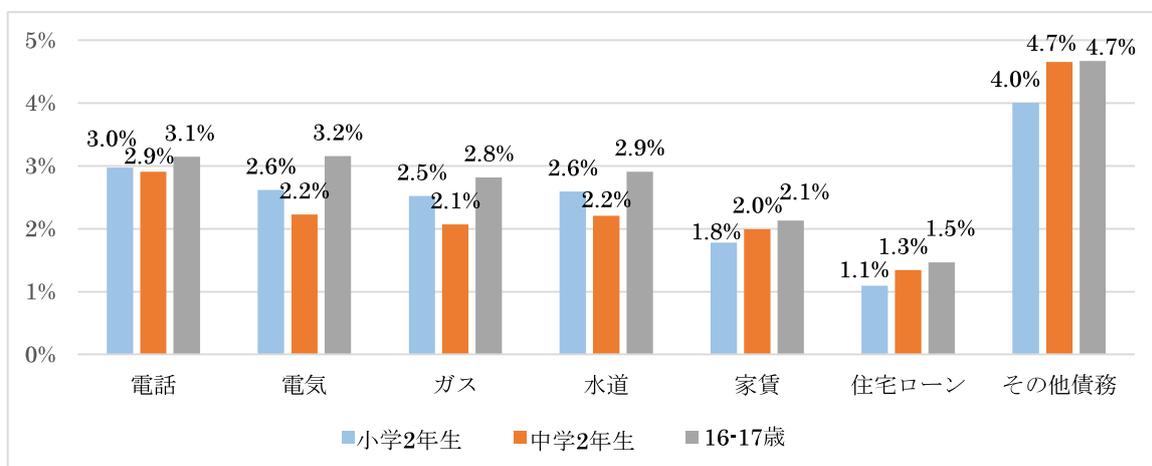
図表 1-1-1 食料の困窮の経験:年齢層別 (X)



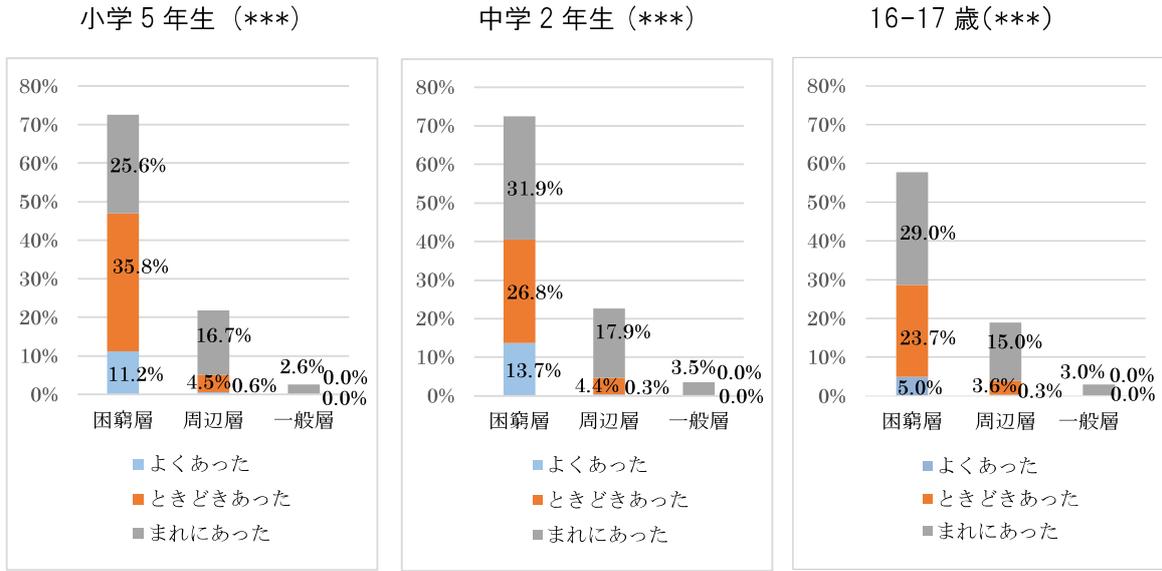
図表 1-1-2 衣類の困窮の経験:年齢層別 (X)



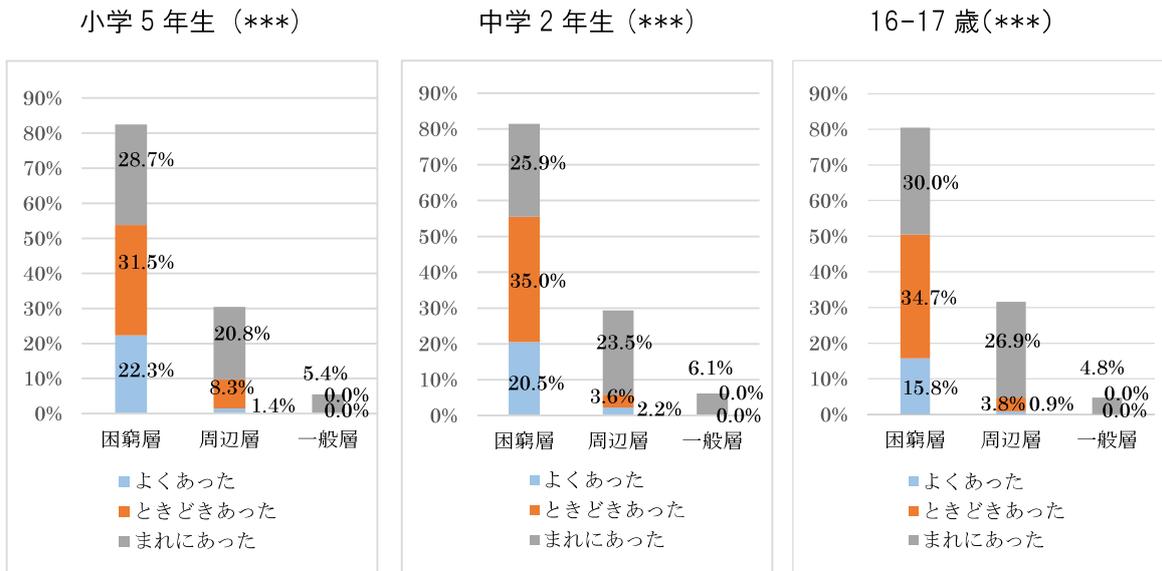
図表 1-1-3 公共料金等の滞納経験:年齢層別



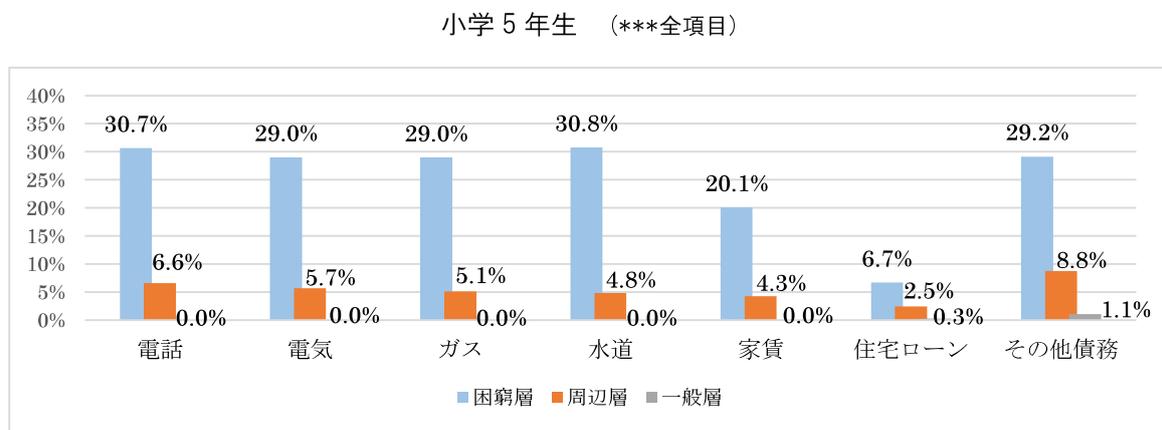
図表 1-1-4 食料の困窮の経験：生活困難度別



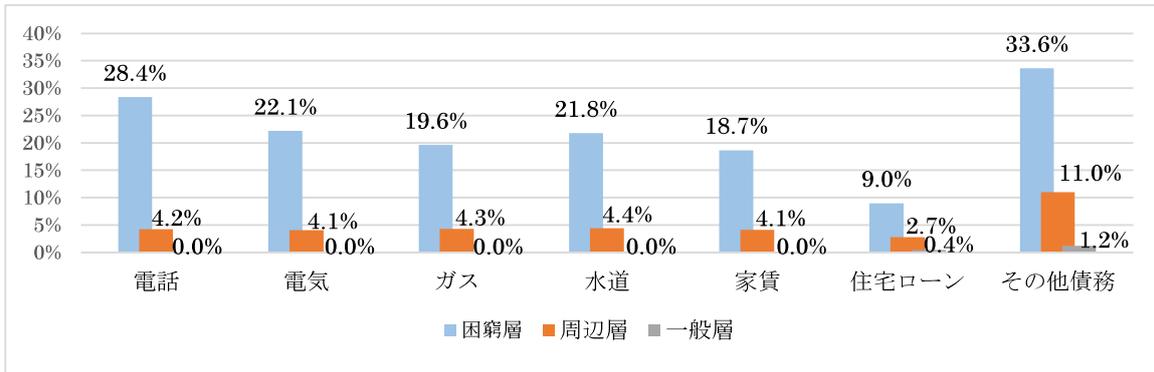
図表 1-1-5 衣類の困窮の経験：生活困難度別



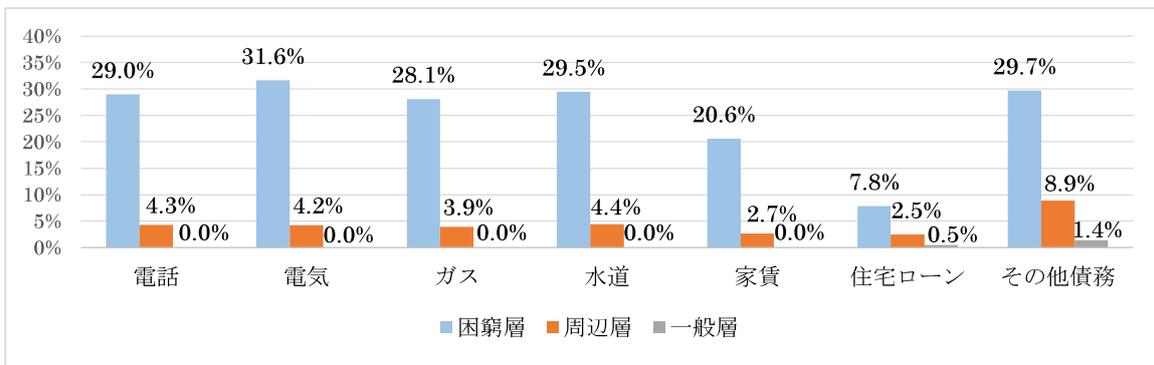
図表 1-1-6 公共料金等の滞納経験：生活困難度別



中学2年生(**全項目)

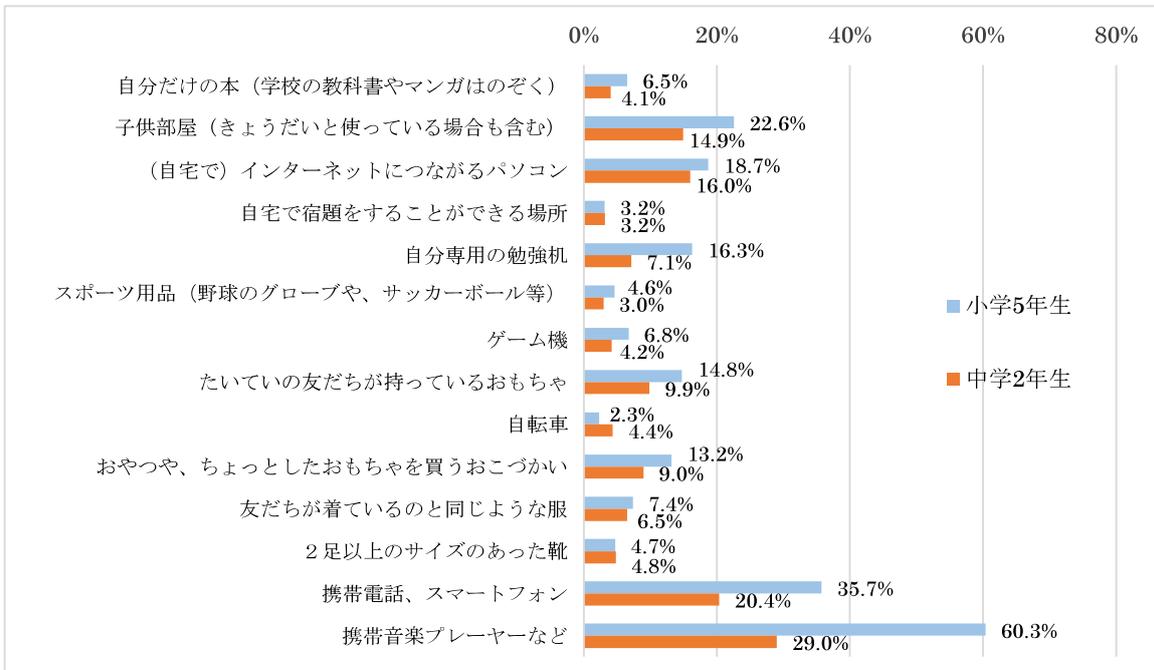


16-17歳(**全項目)



(2)子供の生活水準 (所有物と体験)

図表 1-2-1 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※)(小学5年生・中学2年生)

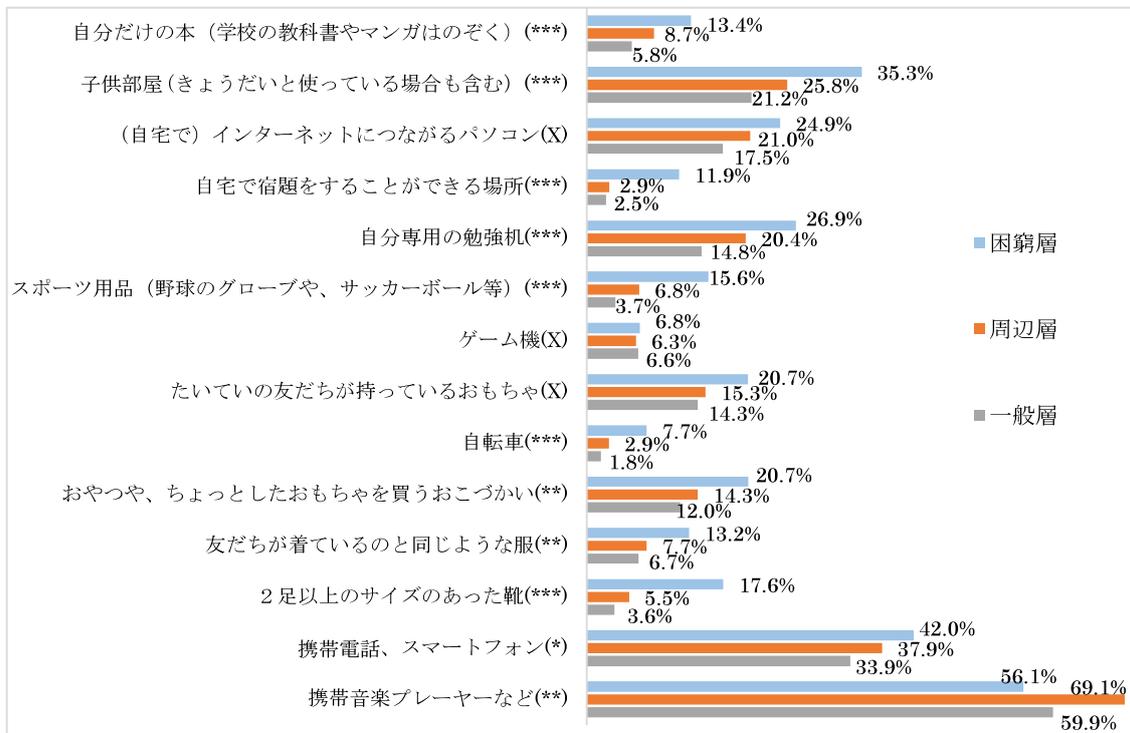


※「ない(欲しくない)」「無回答」を分母から除いた割合

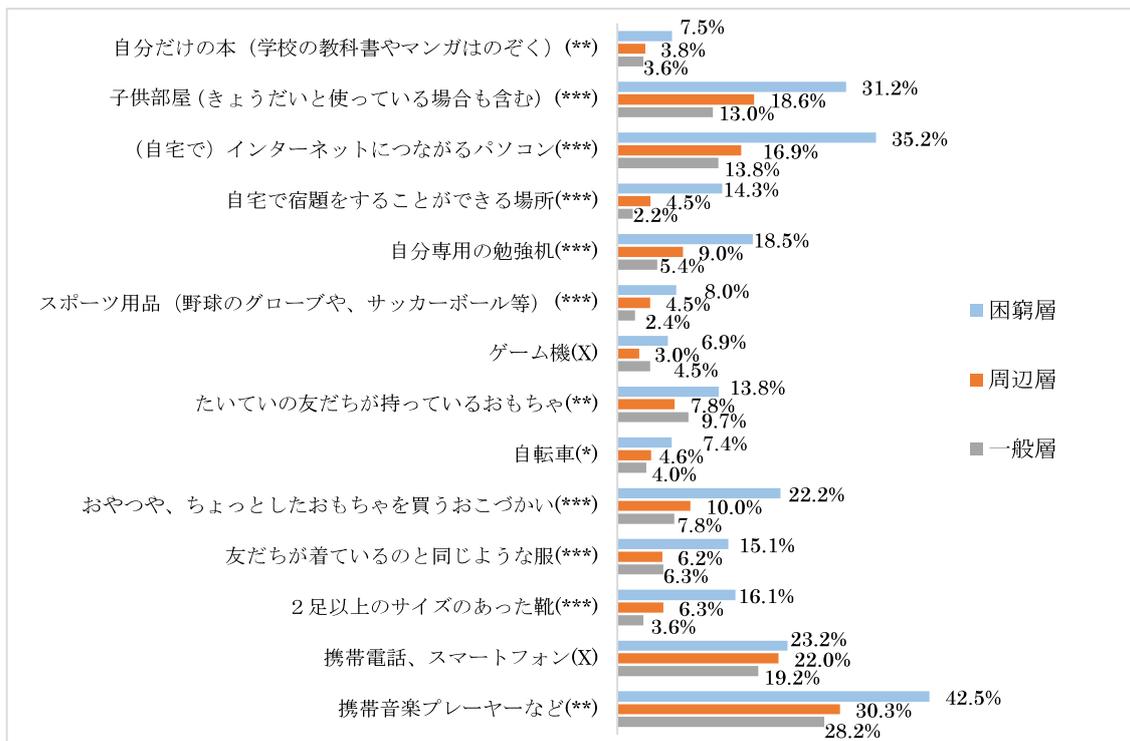
図表 1-2-2 所有物の状況(欲しいが、持っていない割合※):生活困難度別

(統計的に有意差があるもののみ)

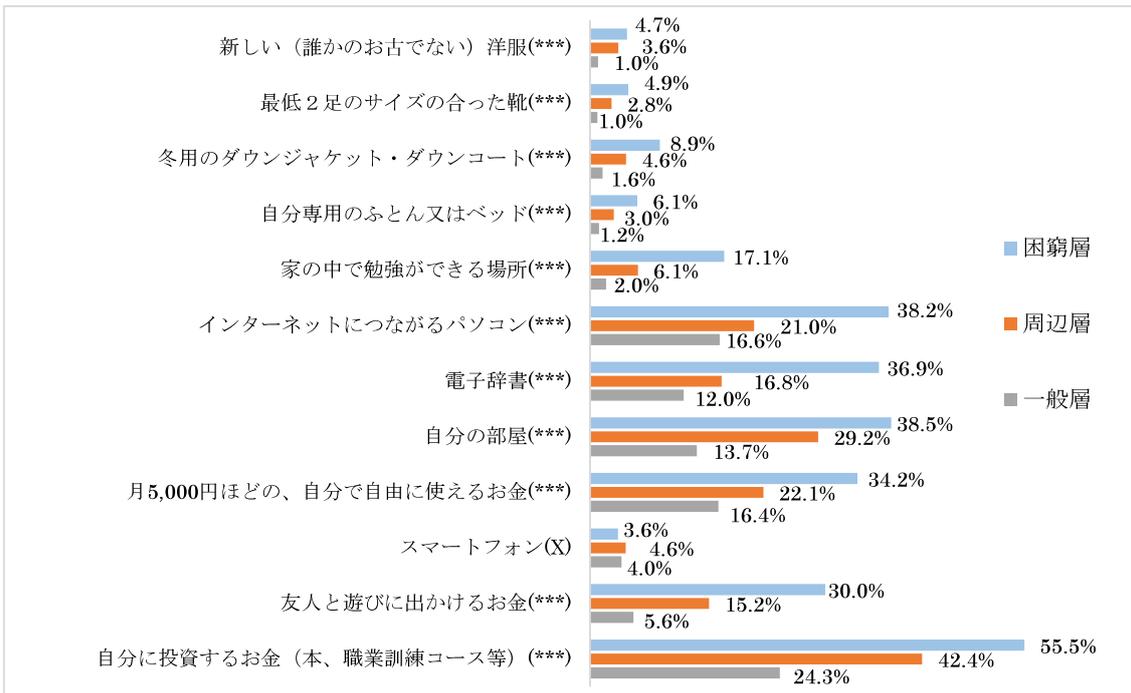
小学5年生



中学2年生

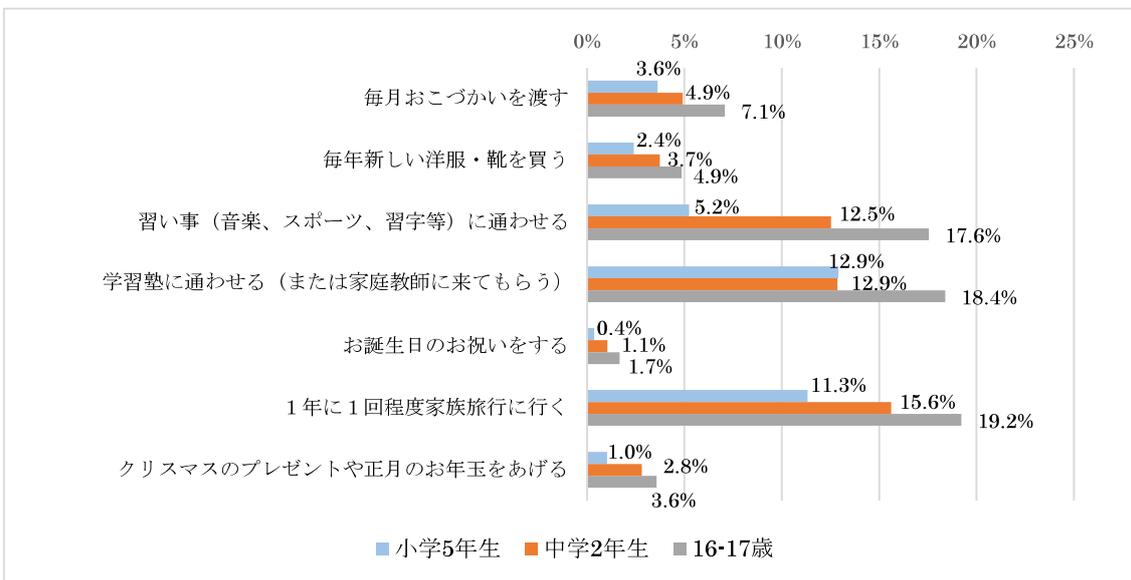


16-17 歳

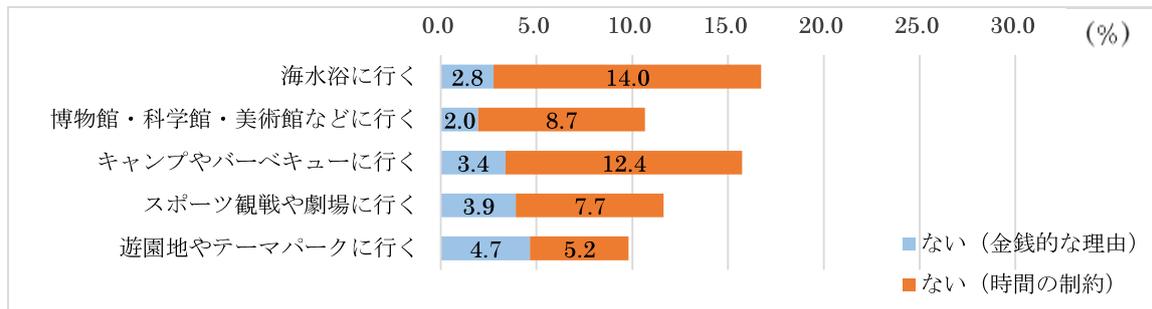


※「ない(欲しくない)」「無回答」を分母から除いた割合

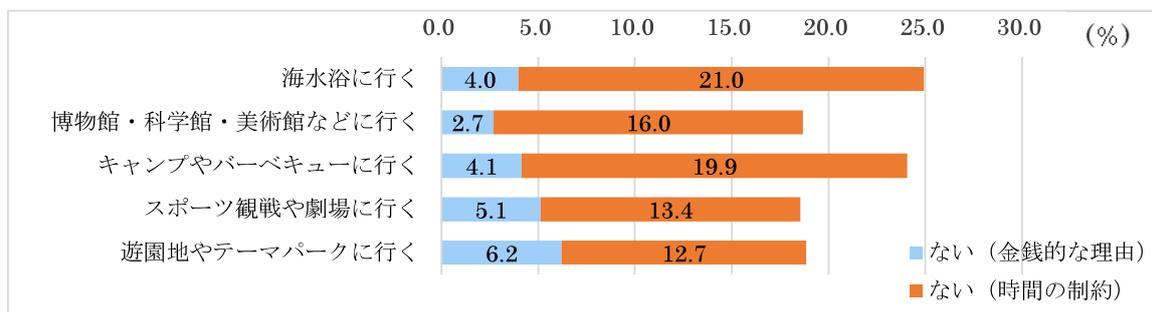
図表 1-2-3 「経済的にできない」子供のための支出



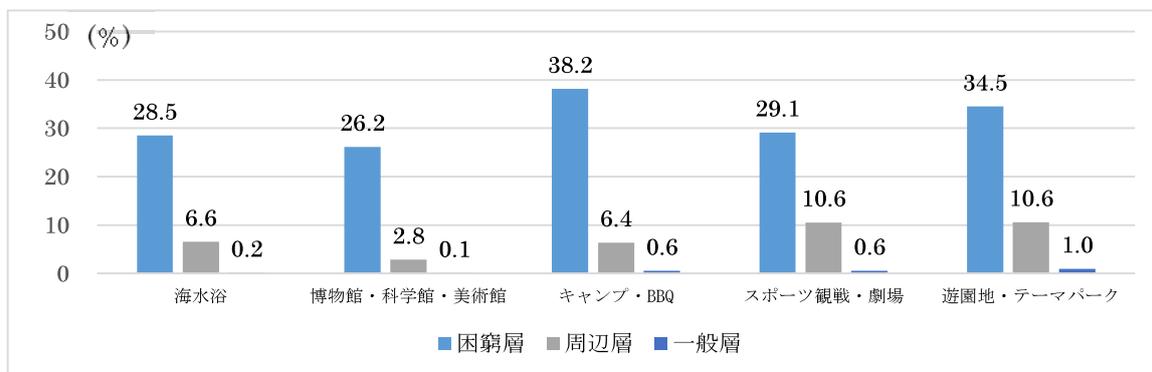
図表 1-2-4 以下の体験を「(金銭的な理由 または 時間の制約で)過去 1 年間にしなかった」割合
小学 5 年生



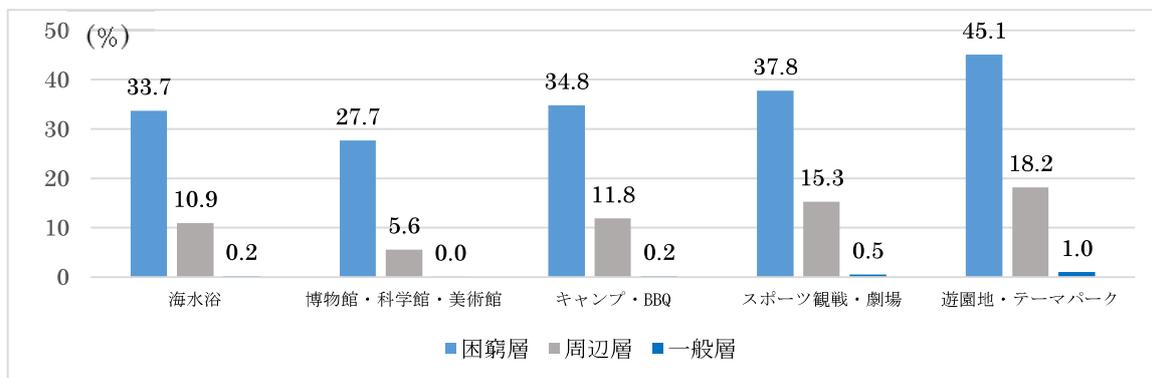
中学 2 年生



図表 1-2-5 体験がない割合(小学 5 年生):生活困難度別 金銭的な理由 (全て***)

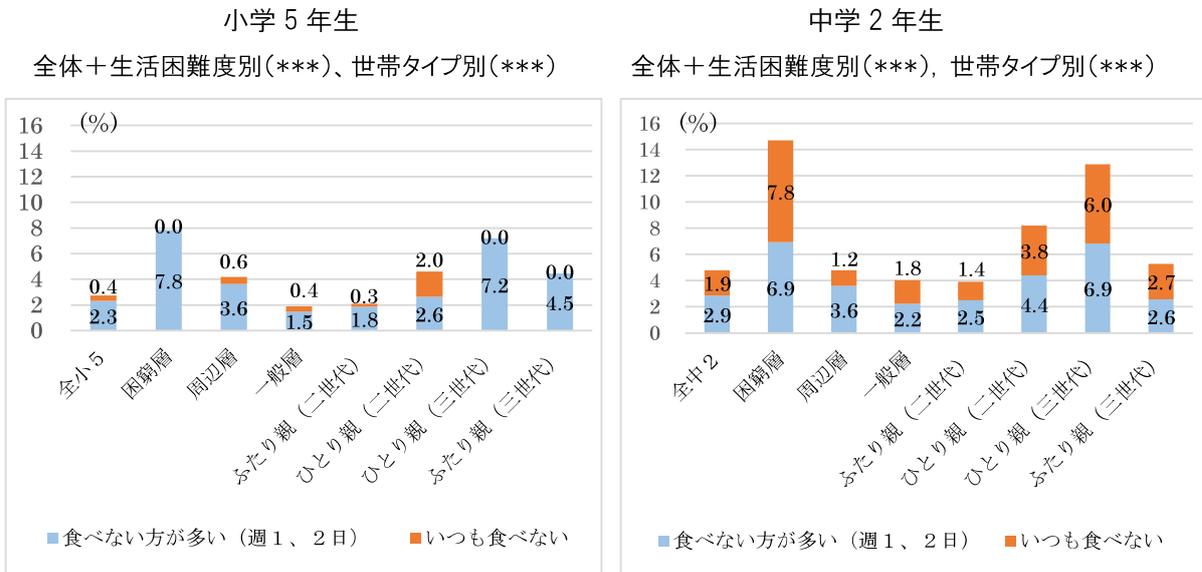


図表 1-2-6 体験がない割合(中学 2 年生):生活困難度別 金銭的な理由 (全て***)

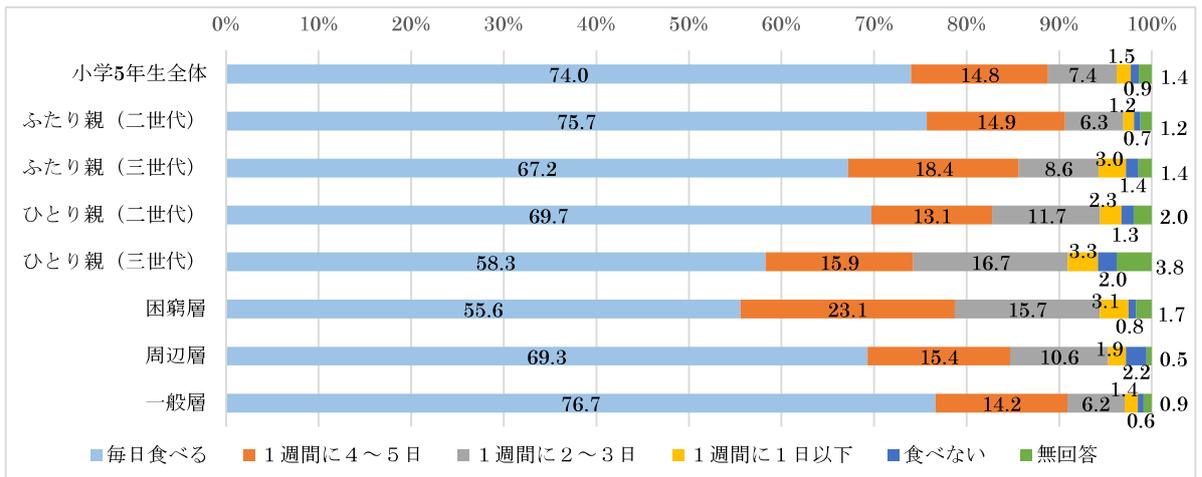


(3)子供の食と栄養

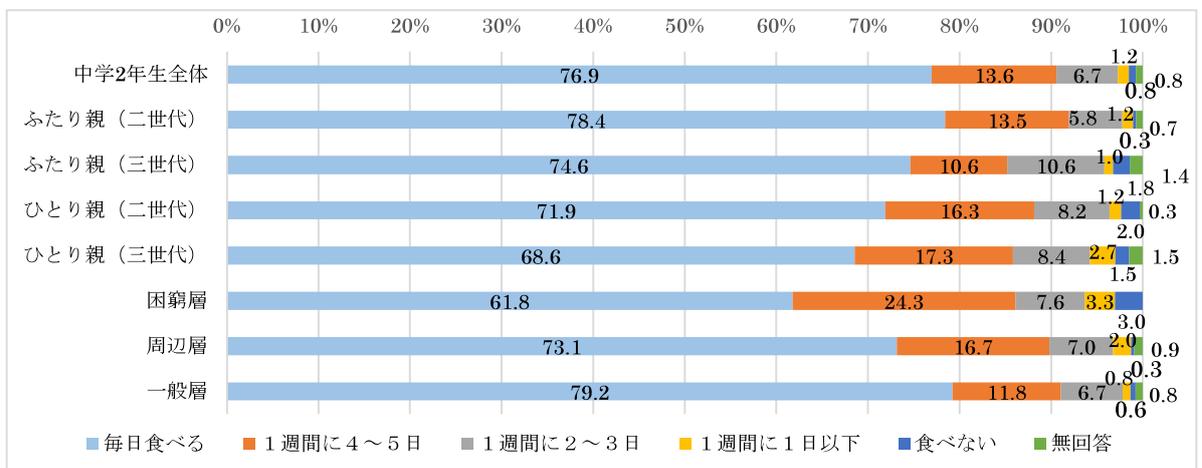
図表 1-3-1 朝ごはんを食べる頻度(小学5年生・中学2年生)



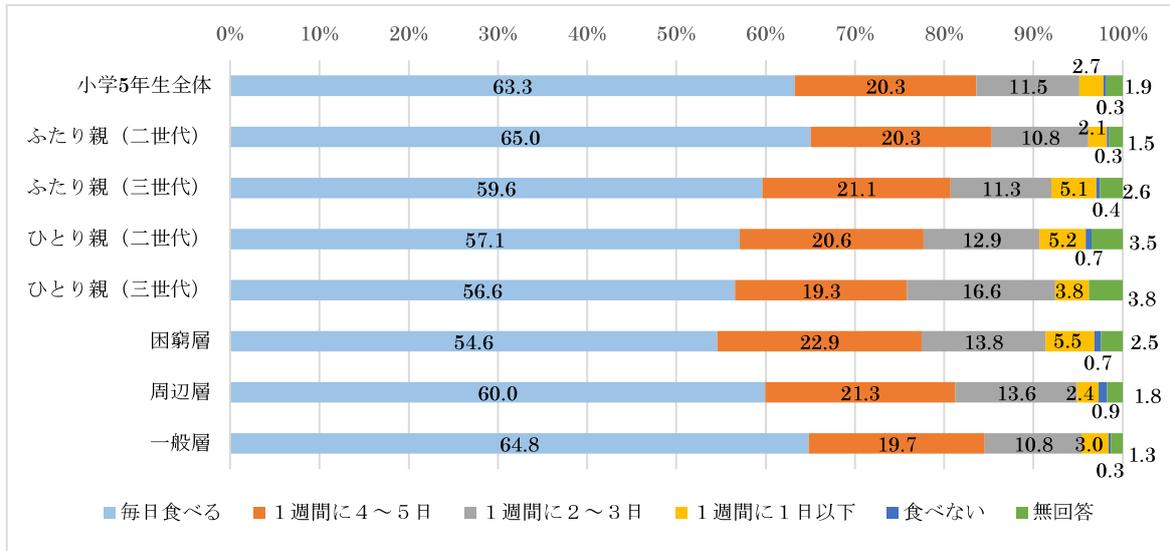
図表 1-3-2 野菜の摂取の頻度(小学5年生):全体+世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



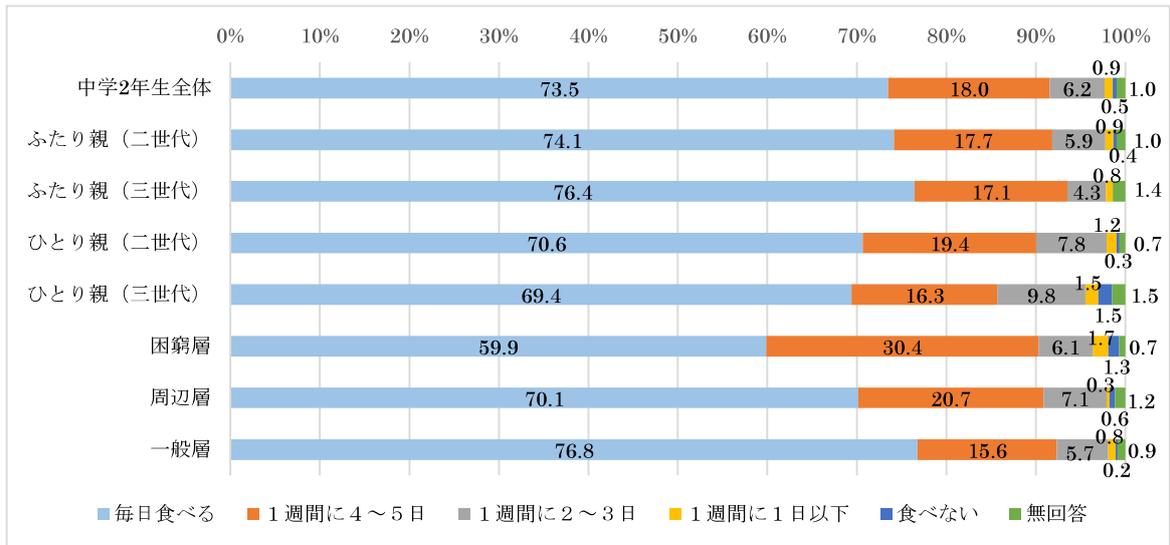
図表 1-3-3 野菜の摂取の頻度(中学2年生):全体+世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



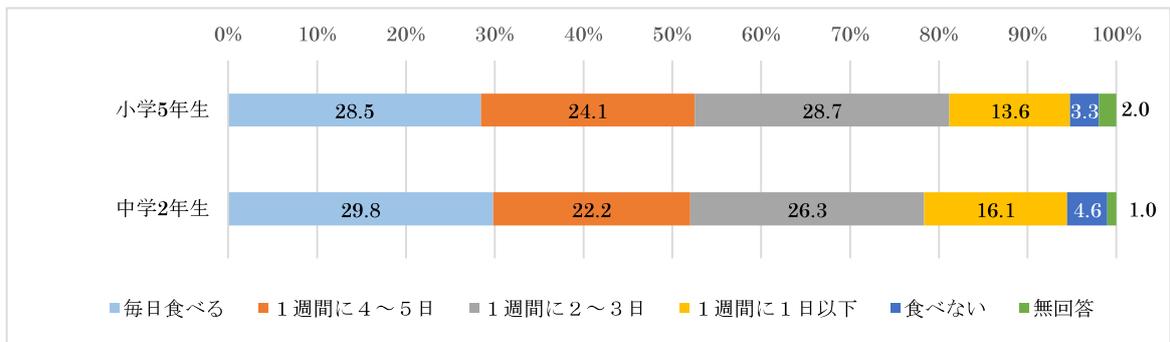
図表 1-3-4 肉か魚の摂取の頻度(小学5年生):全体+世帯タイプ別(**)、生活困難度別(X)



図表 1-3-5 肉か魚の摂取の頻度(中学2年生):全体+世帯タイプ別(X)、生活困難度別(***)

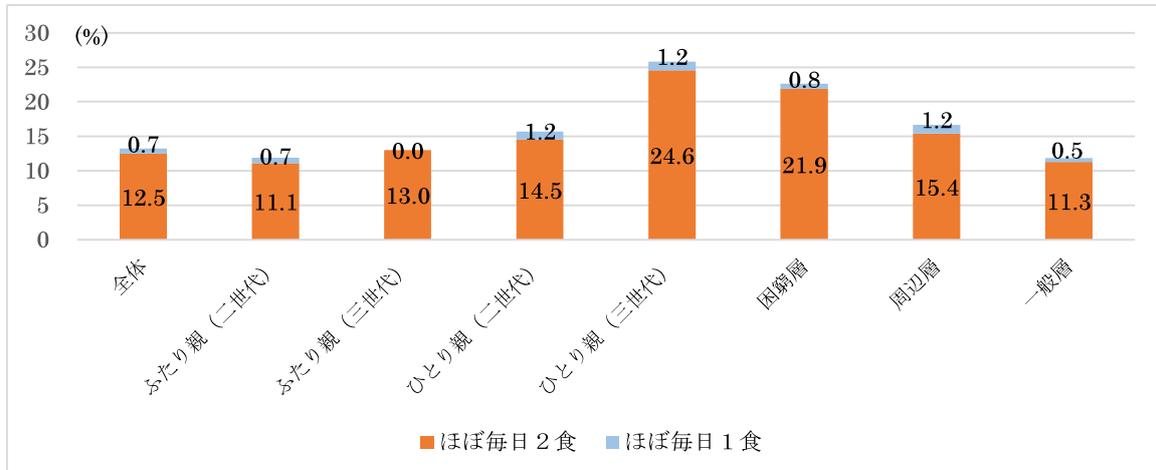


図表 1-3-6 果物の摂取の頻度(小学5年生、中学2年生)

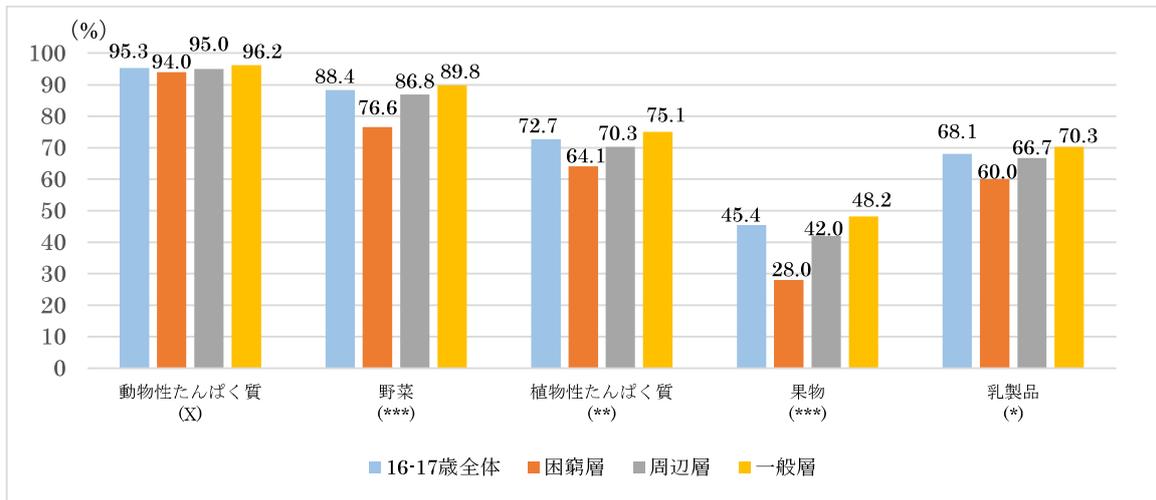


図表 1-3-7 食事の回数が3食(／日)以下の割合(16-17歳)

世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)

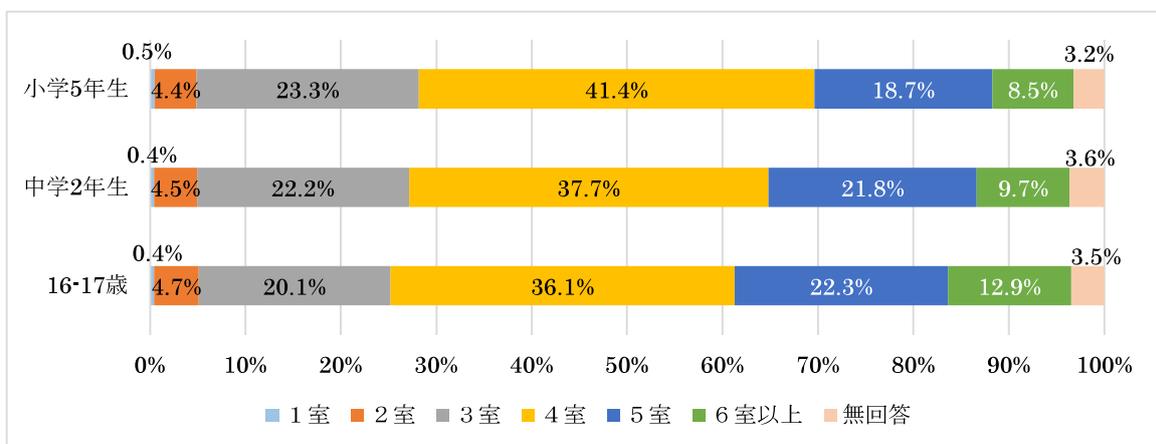


図表 1-3-8 「1日1回以上食べている」割合(16-17歳)

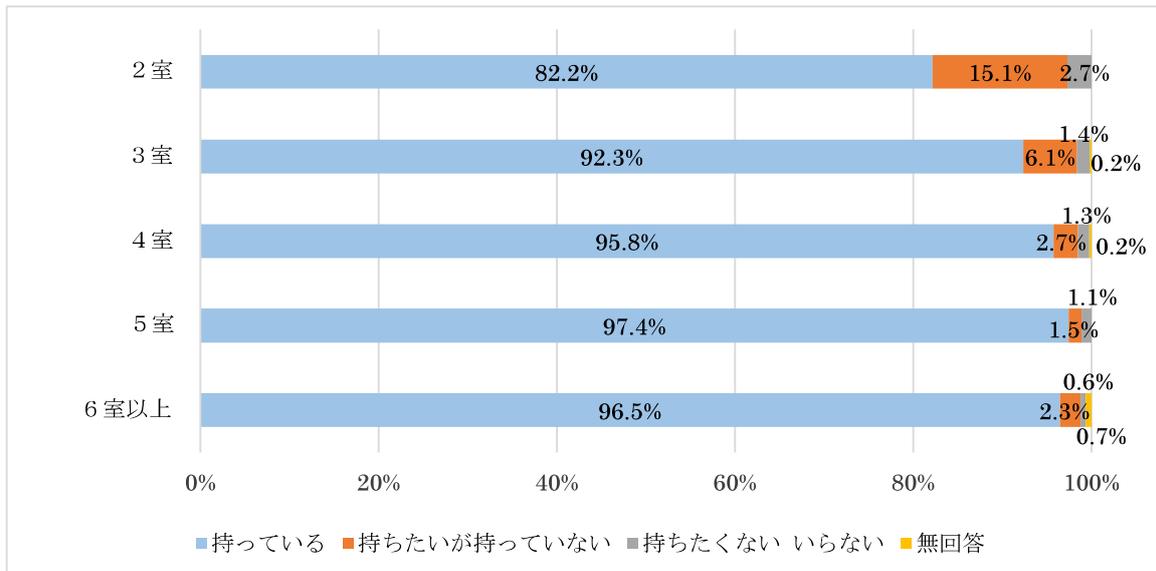


(4)住宅の状況

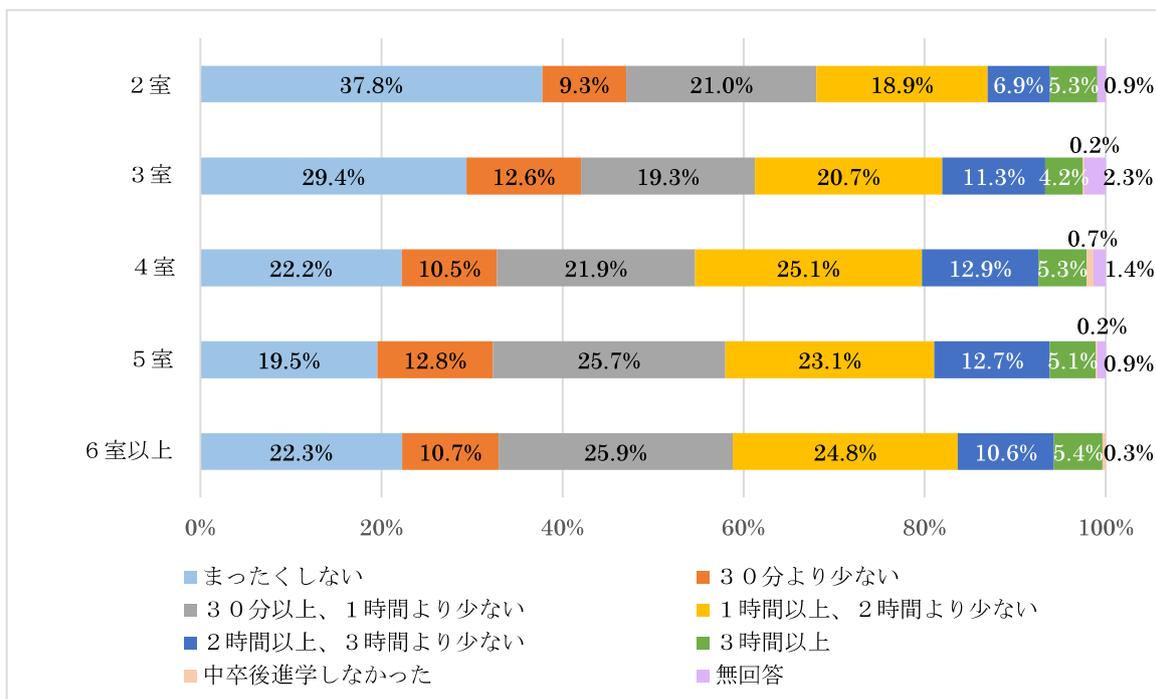
図表 1-4-1 居室の数:年齢層別



図表 1-4-2 家の中で勉強する場所の欠如の状況(16-17 歳):居室の数別(***)



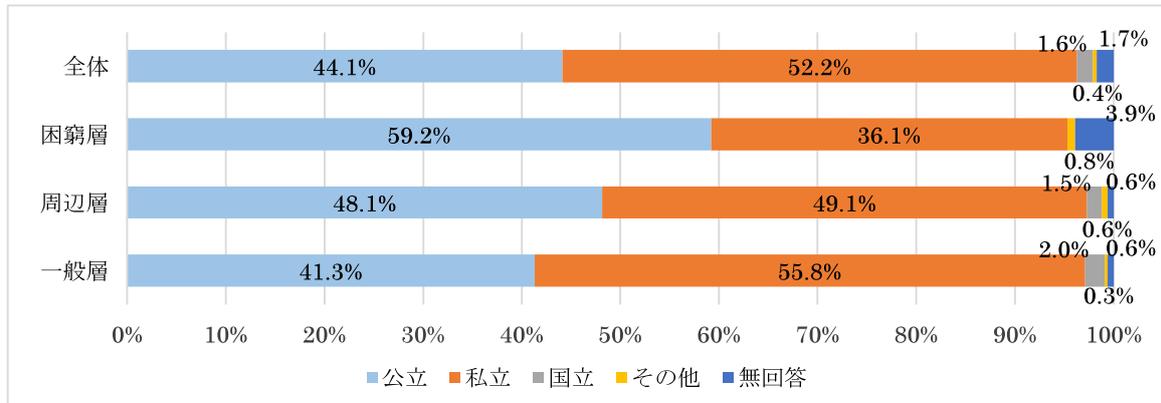
図表 1-4-3 学校の授業以外の学習時間(16-17 歳):居室の数別(***)



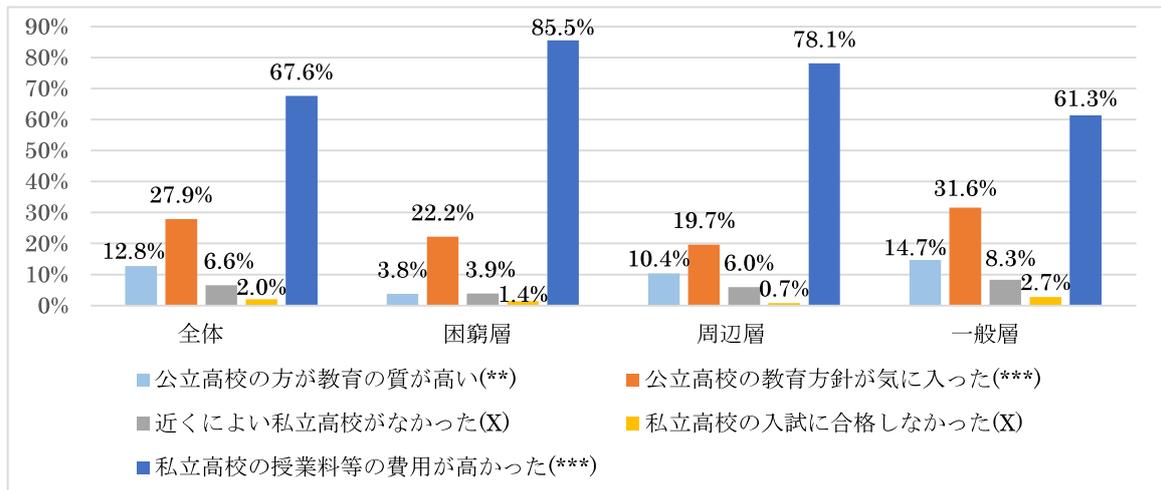
2 子供の学び

(1) 学校選択

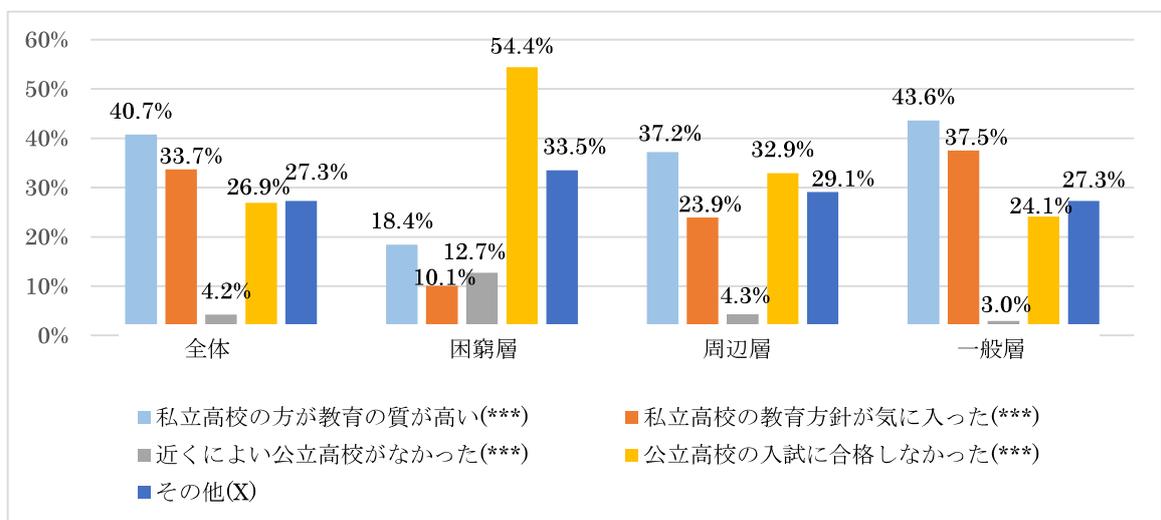
図表 2-1-1 在籍する学校の設置者(16-17 歳):全体+生活困難度別(***)



図表 2-1-2 公立の高等学校に進学した理由:全体+生活困難度別

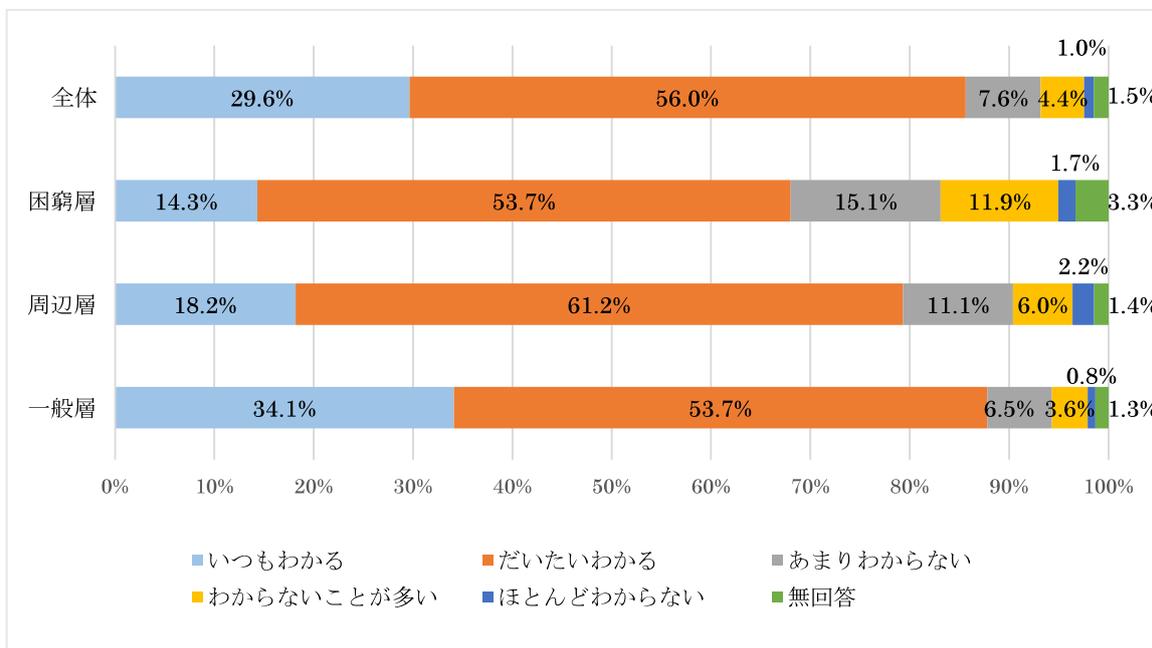


図表 2-1-3 私立の高等学校に進学した理由:全体+生活困難度別

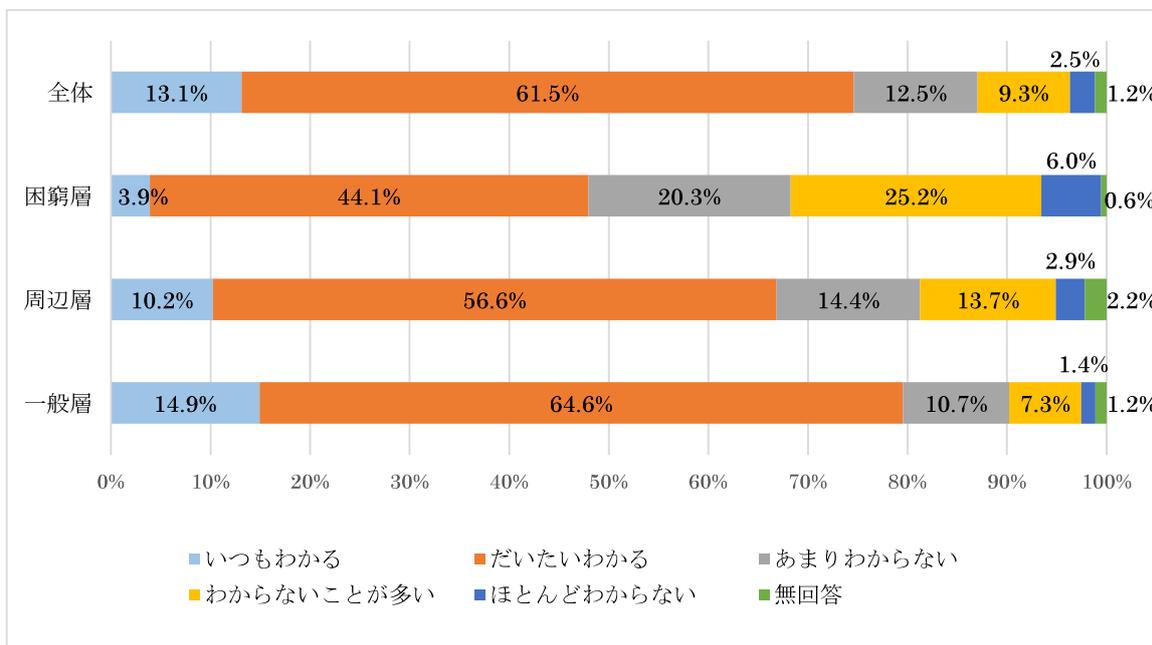


(2)授業の理解度

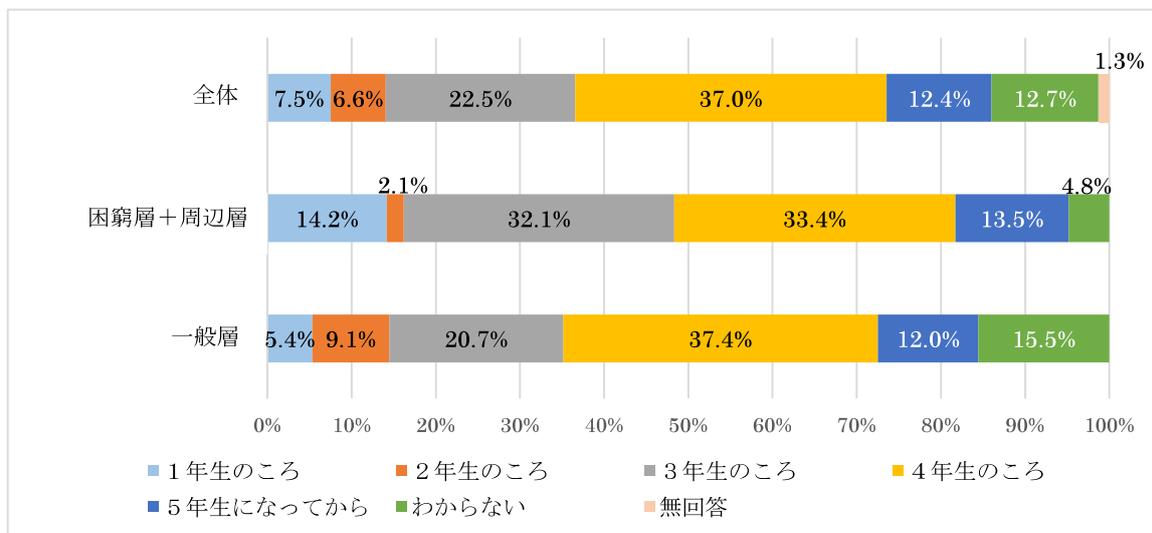
図表 2-2-1 授業の理解度(小学 5 年生):全体+生活困難度別(***)



図表 2-2-2 授業の理解度(中学 2 年生):全体+生活困難度別(***)

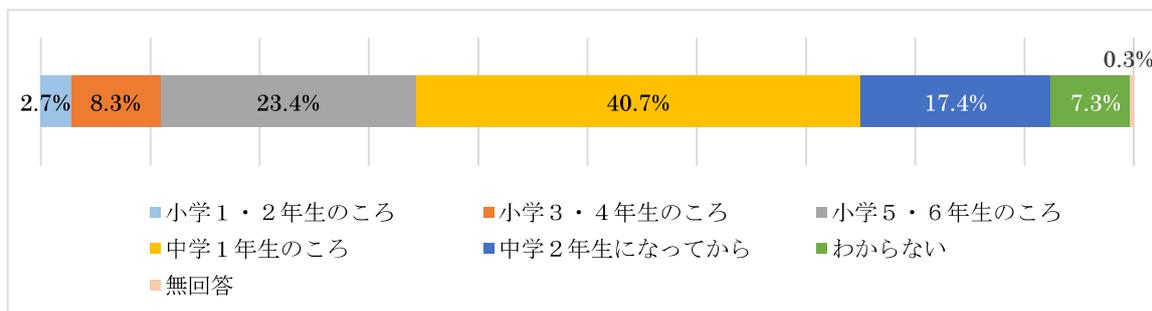


図表 2-2-3 授業がわからなくなった時期(小学 5 年生):全体+生活困難度別(X)

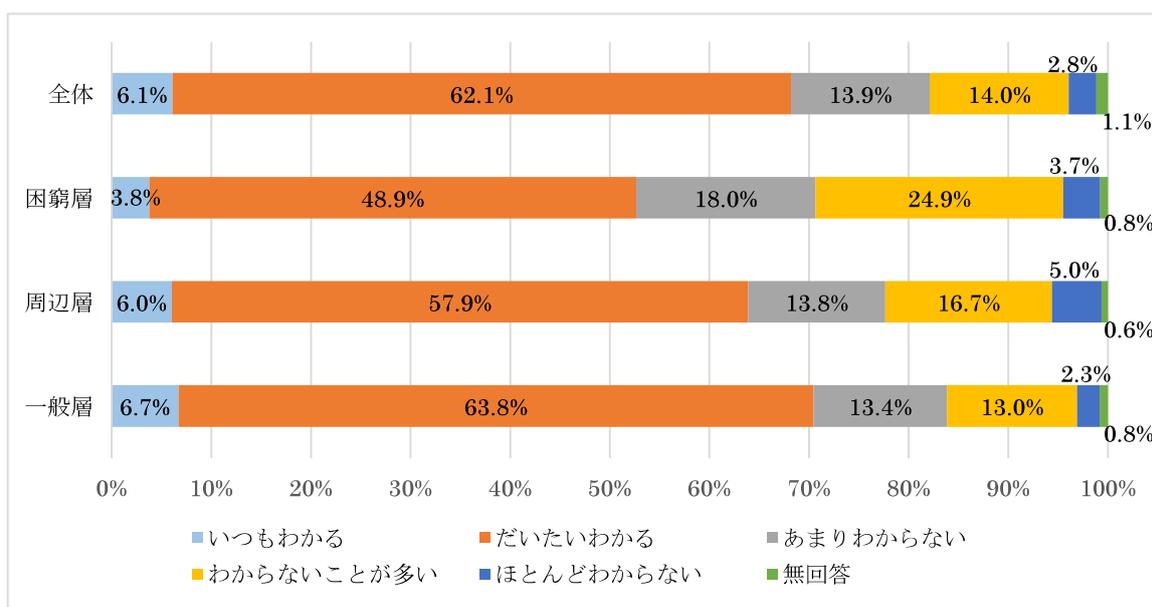


※生活困難度別は無回答を除く

図表 2-2-4 授業がわからなくなった時期(中学 2 年生)

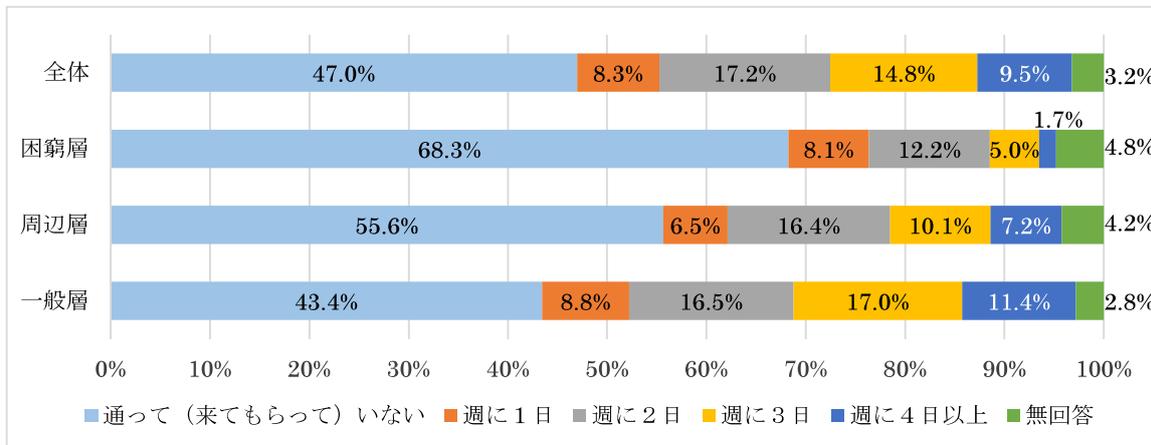


図表 2-2-5 授業の理解度(16-17 歳):全体+生活困難度別(***)

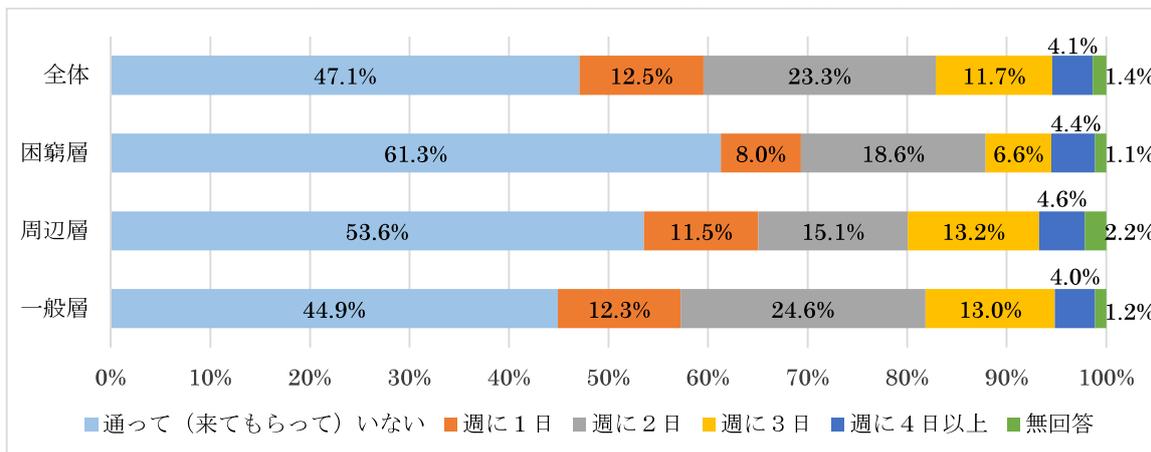


(3)学校外での学習状況

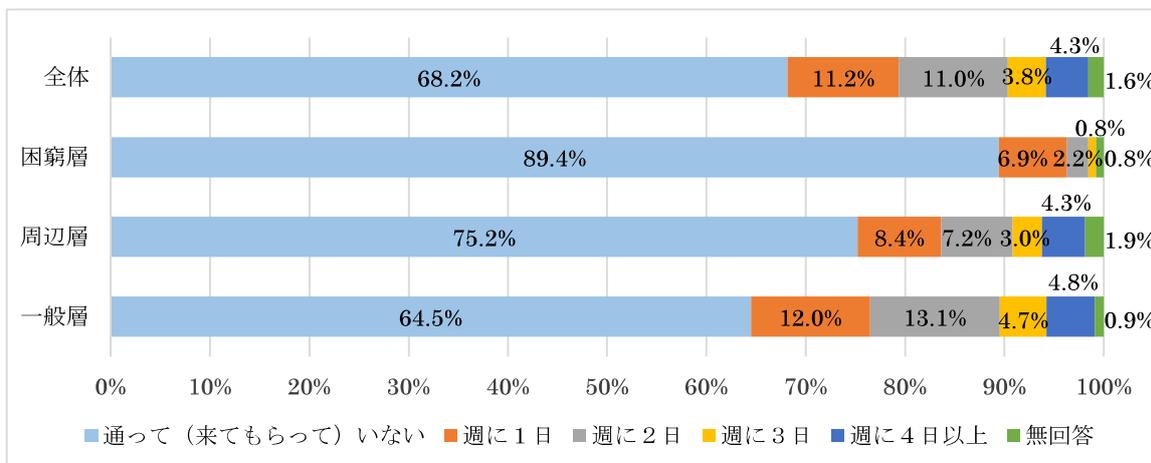
図表 2-3-1 通塾(または家庭教師)状況(小学 5 年生):全体+生活困難度別(***)



図表 2-3-2 通塾(または家庭教師)状況(中学 2 年生):全体+生活困難度別(***)

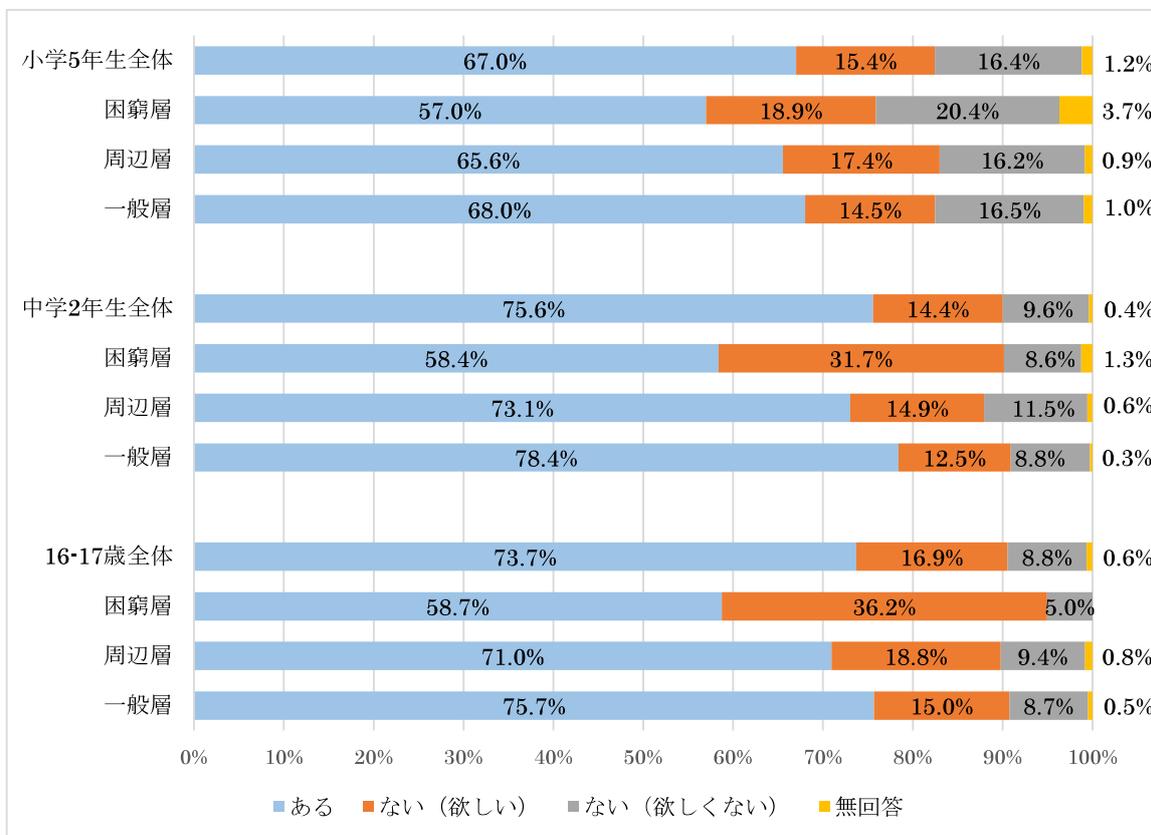


図表 2-3-3 通塾(または家庭教師)状況(16-17 歳):全体+生活困難度別(***)



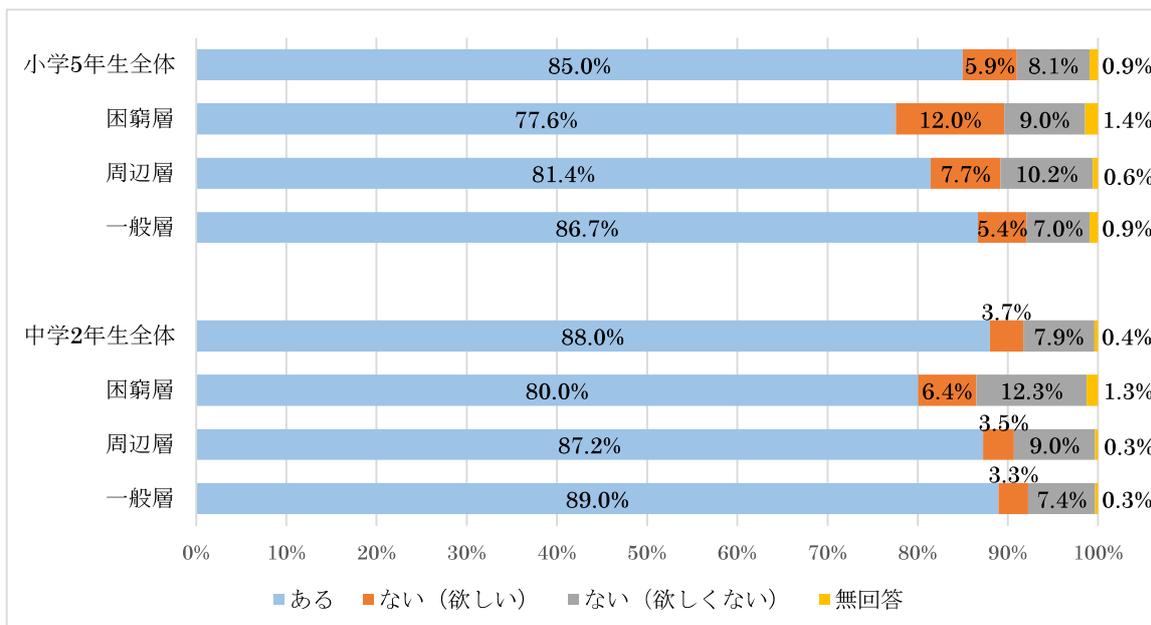
(4)学習環境の状況

図表 2-4-1 自宅でインターネットにつながるパソコンの欠如の状況(小学5年生・中学2年生・16-17歳):全体+生活困難度別 小5(X)、中2(***)、16-17歳(***)

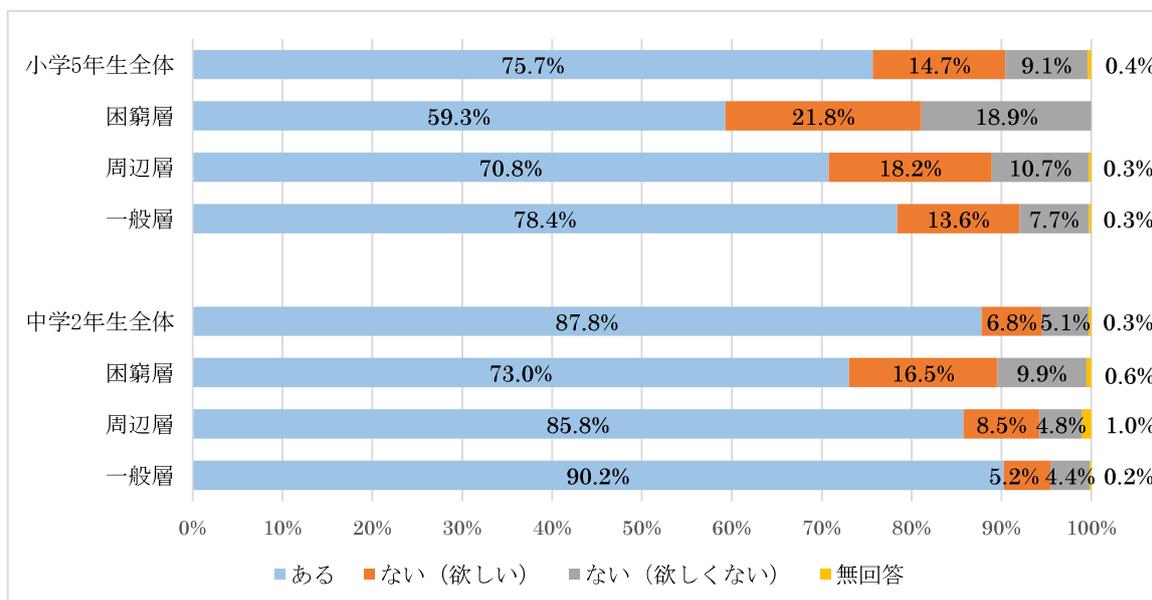


図表 2-4-2 自分だけの本(学校の教科書やマンガは除く)の欠如の状況

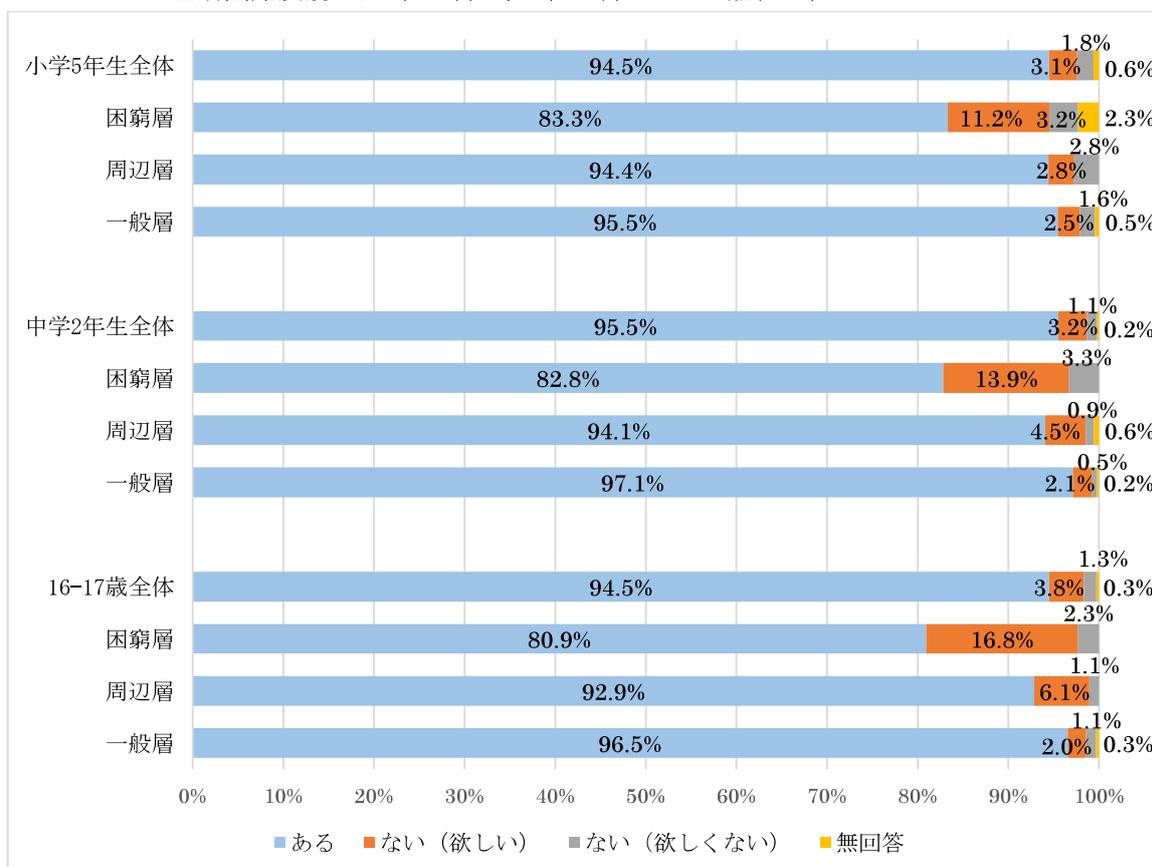
(小学5年生・中学2年生):生活困難度別 小5(***)、中2(**)



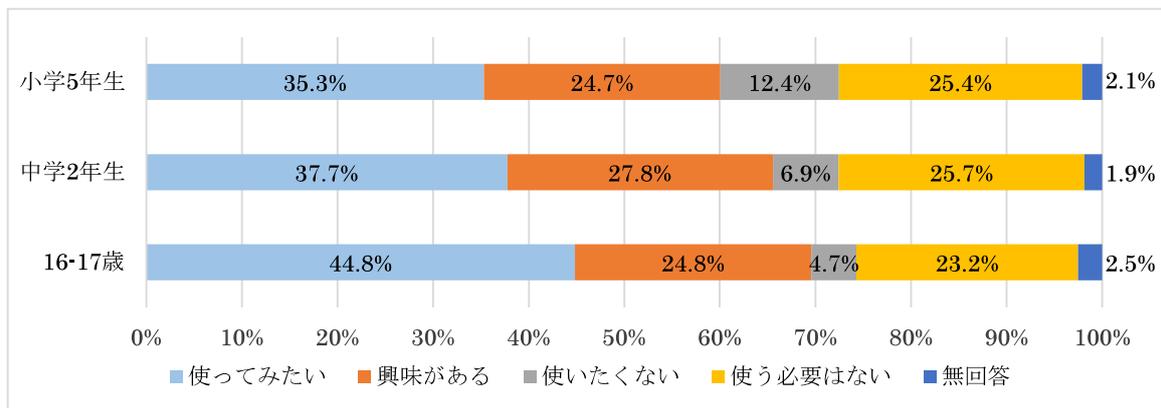
図表 2-4-3 自分専用の勉強机の欠如の状況(小学5年生・中学2年生):
生活困難度別 小5(***)、中2(***)



図表 2-4-4 自宅で宿題(勉強)ができる場所の欠如の状況(小学5年生・中学2年生・16-17歳):
生活困難度別 小5(***)、中2(***)、16-17歳(***)

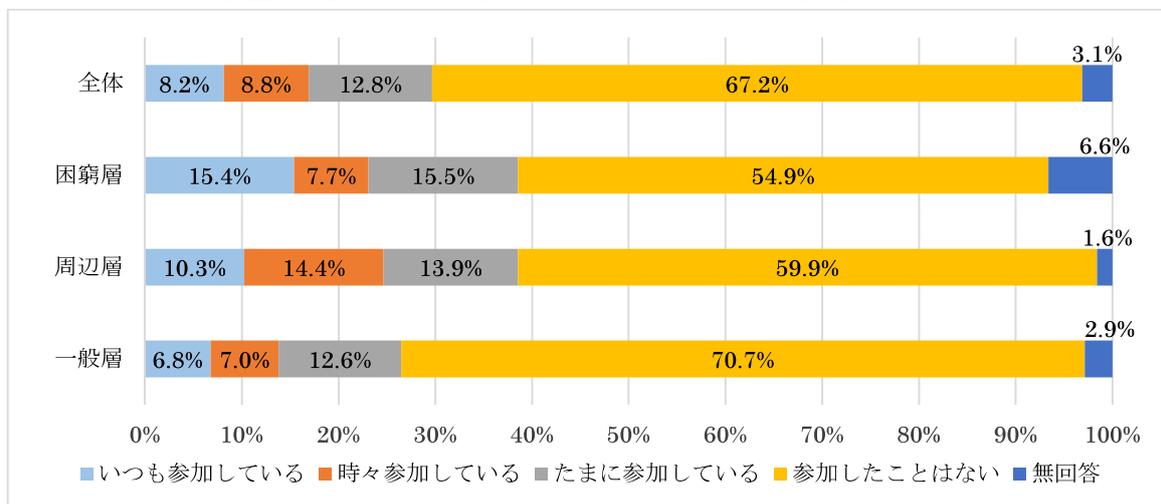


図表 2-4-5 家で勉強できない時、静かに勉強できる場所の利用意向：年齢層別

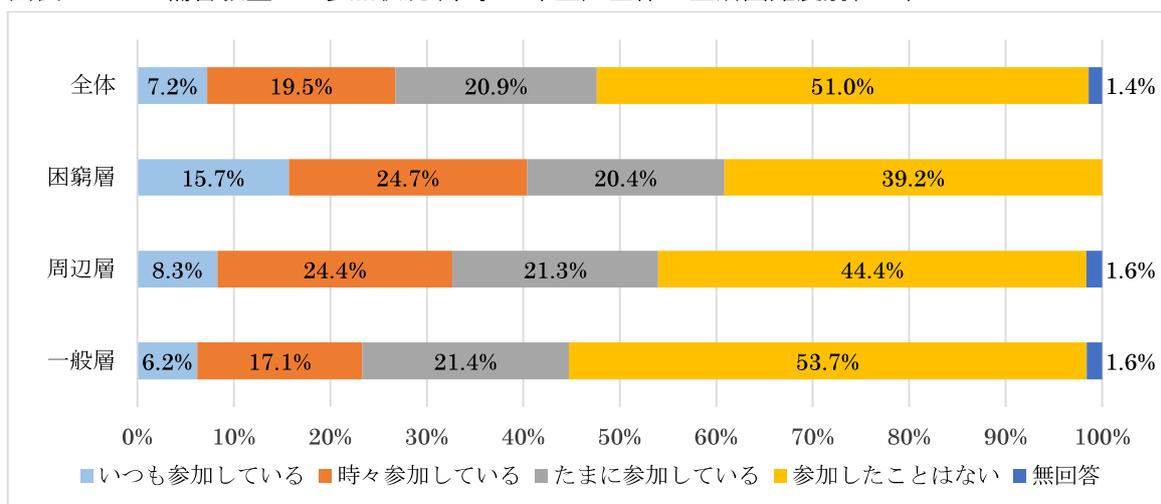


(5) 補習教室への参加状況

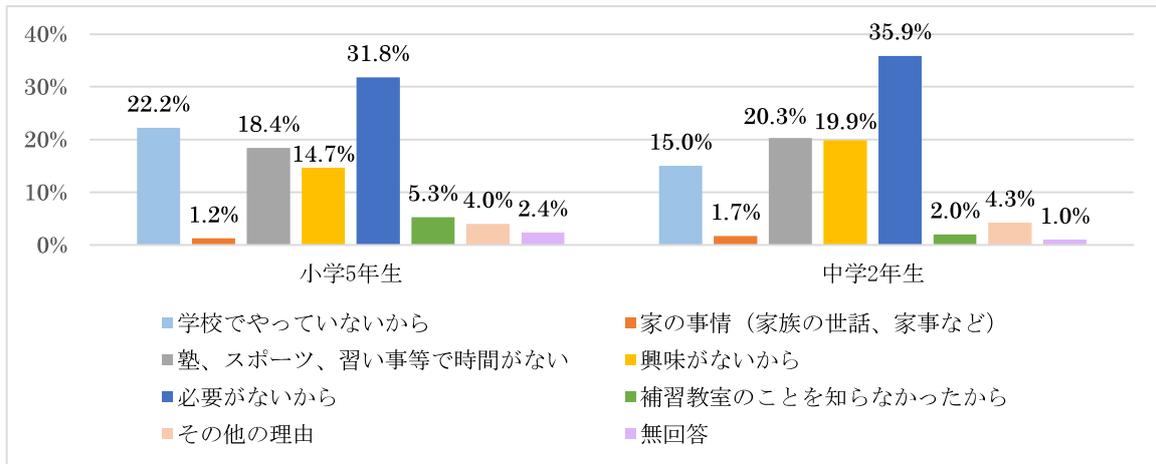
図表 2-5-1 補習教室への参加状況(小学5年生):全体+生活困難度別(***)



図表 2-5-2 補習教室への参加状況(中学2年生):全体+生活困難度別(***)



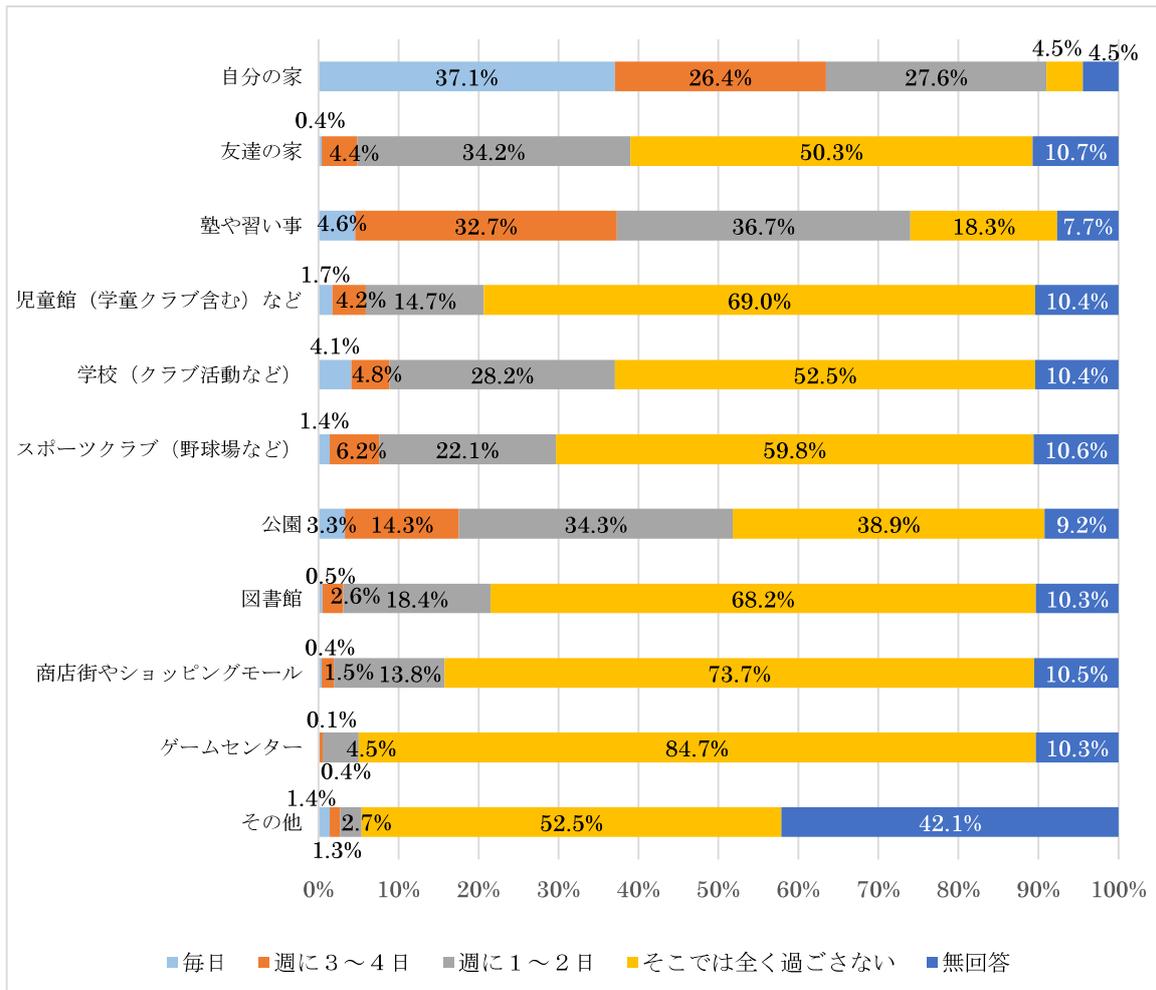
図表 2-5-3 補習教室に参加しない理由(小学5年生・中学2年生)



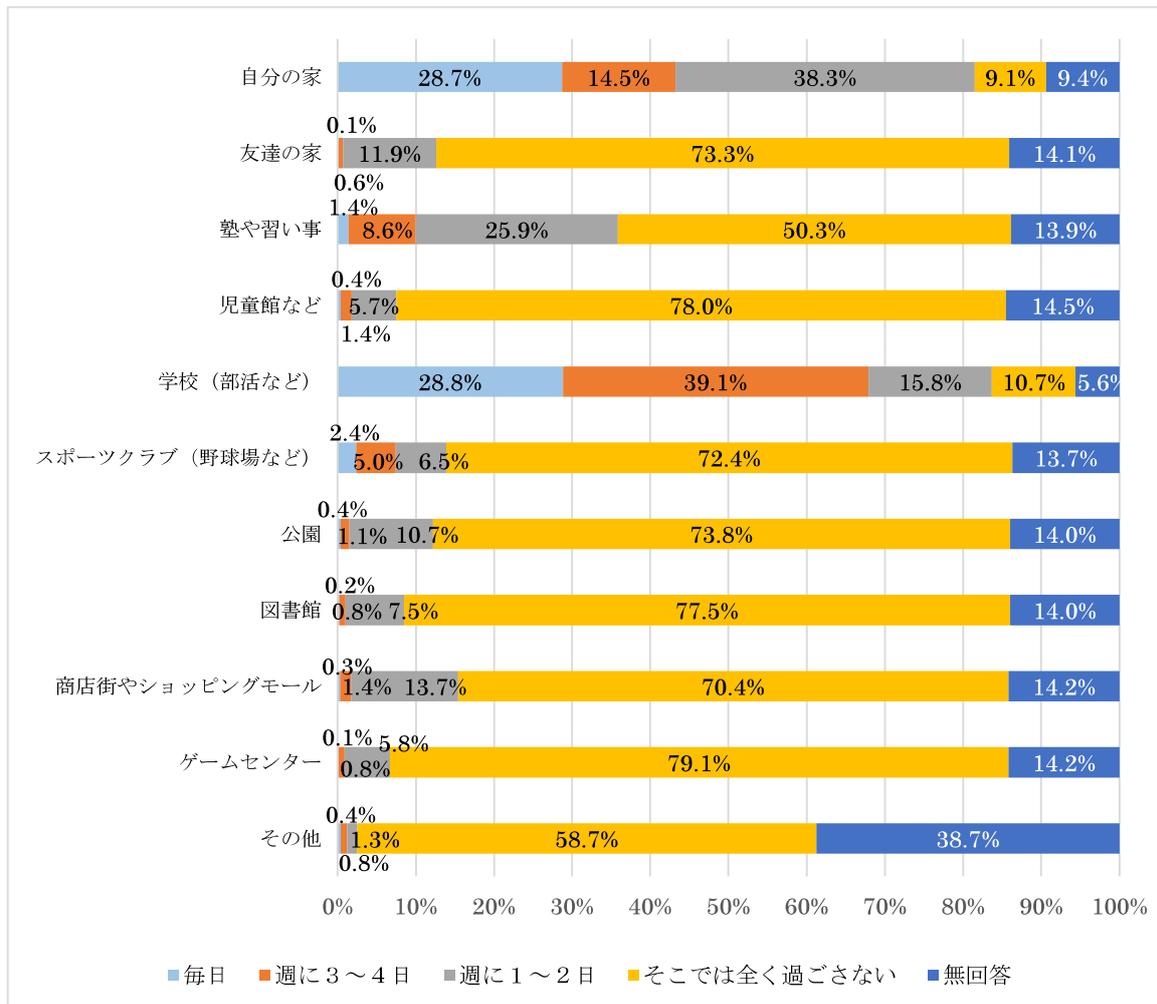
3 子供の生活・友人関係

(1) 放課後の過ごし方

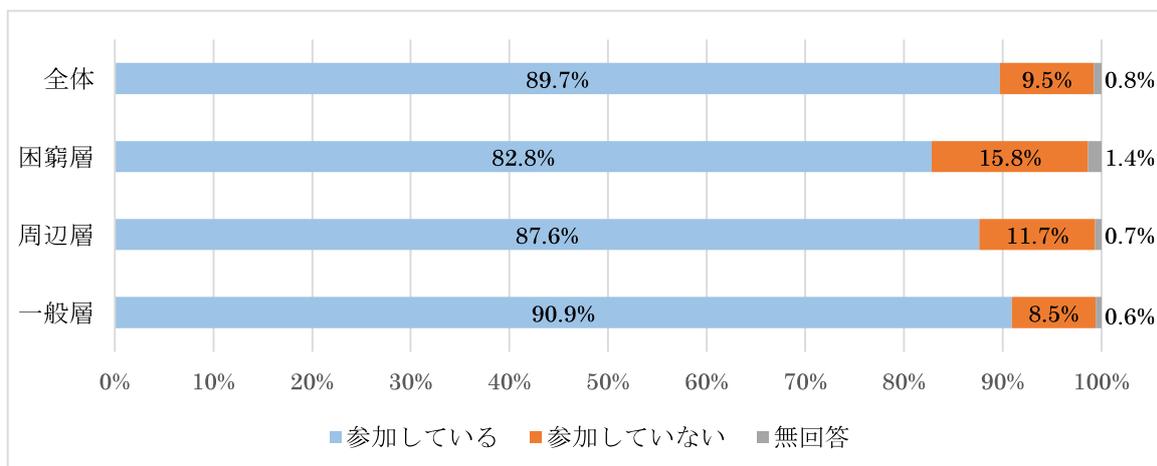
図表 3-1-1 平日の放課後に過ごす場所(小学5年生)



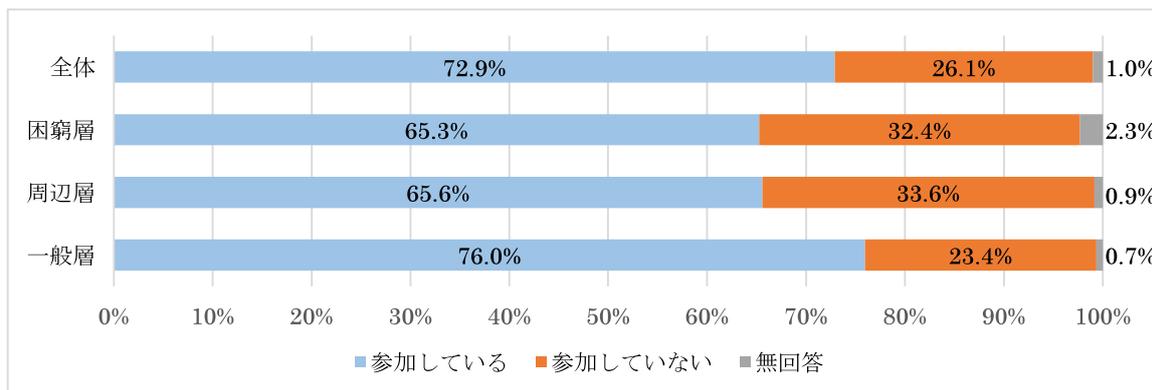
図表 3-1-2 平日の放課後に過ごす場所(中学 2 年生)



図表 3-1-3 クラブ活動への参加状況(中学 2 年生):生活困難度別(***)

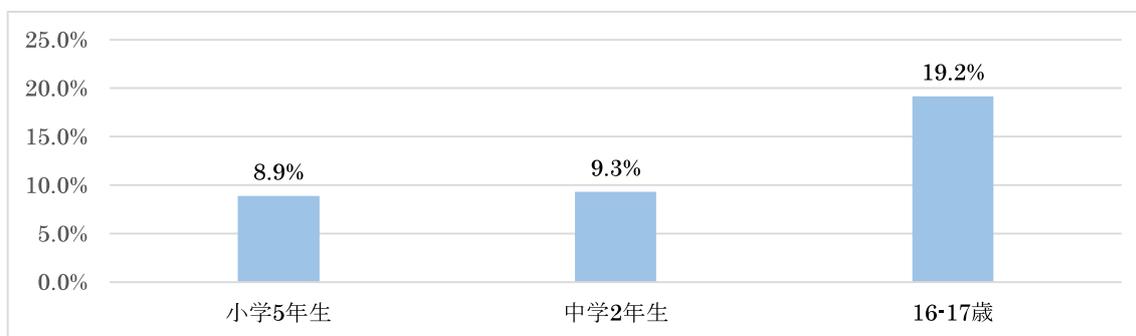


図表 3-1-4 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動への参加状況(16-17歳)(***)

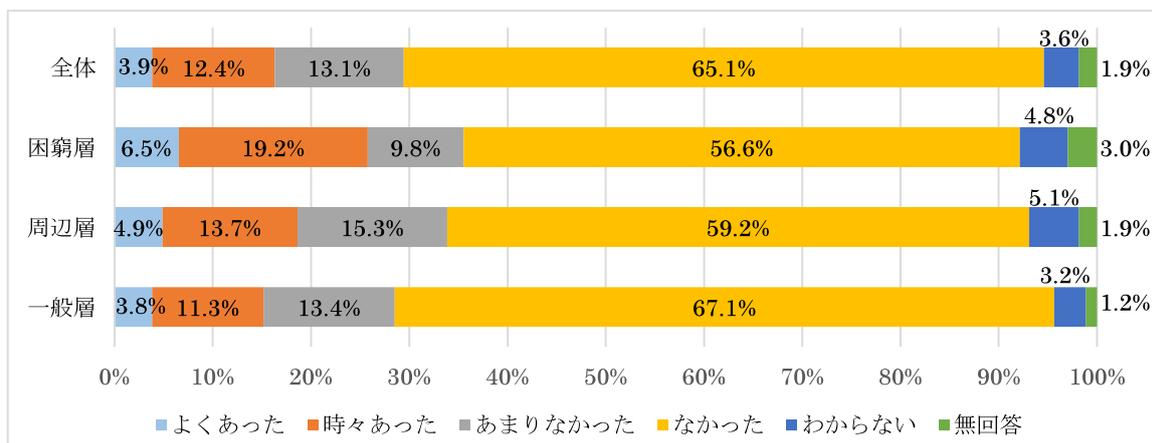


(2)友人関係

図表 3-2-1 平日の放課後に「一人で過ごす」ことが一番多い子供の割合:年齢層別

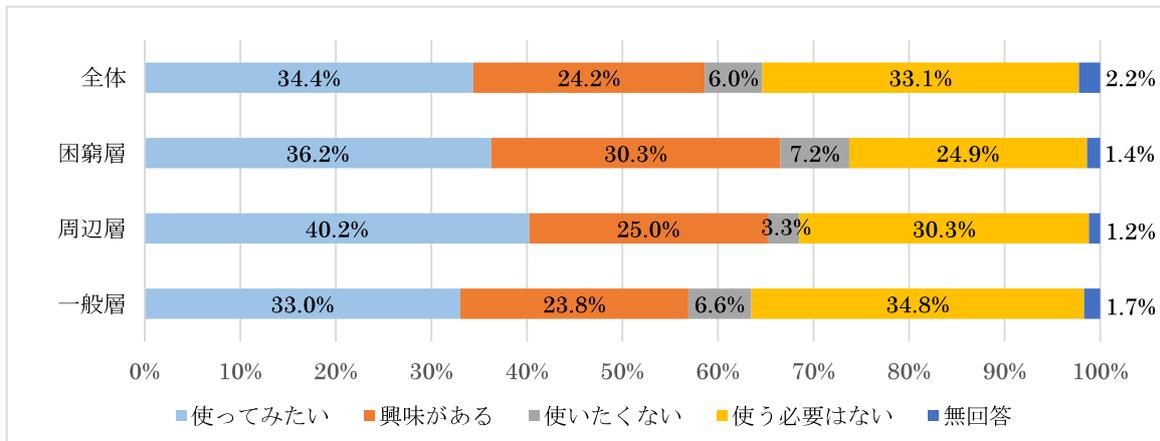


図表 3-2-2 いじめられた経験(小学5年生):生活困難度別(**)

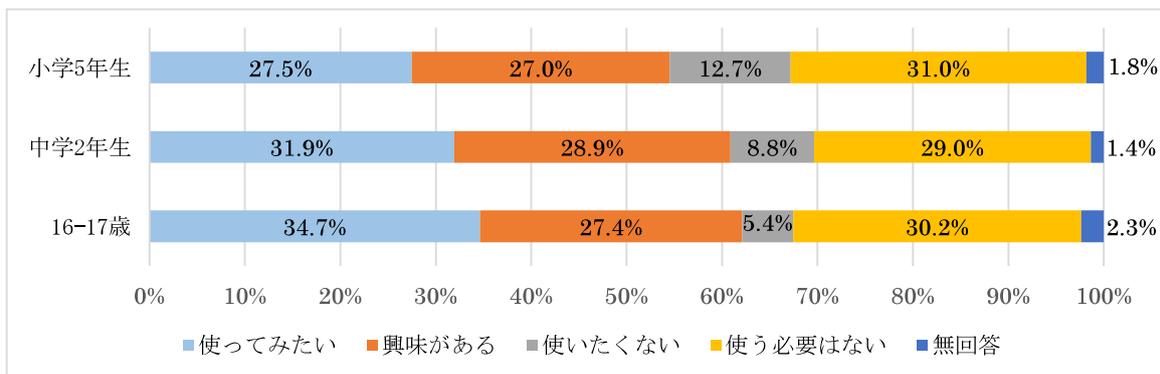


(3)居場所事業等の利用意向

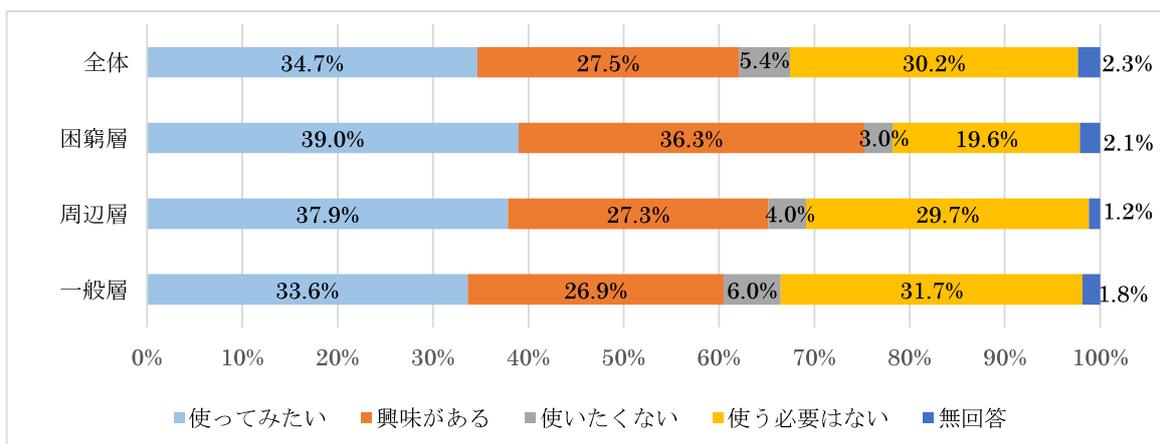
図表 3-3-1 平日の放課後に夜までいることができる場所の利用意向(16-17 歳):生活困難度別(**)



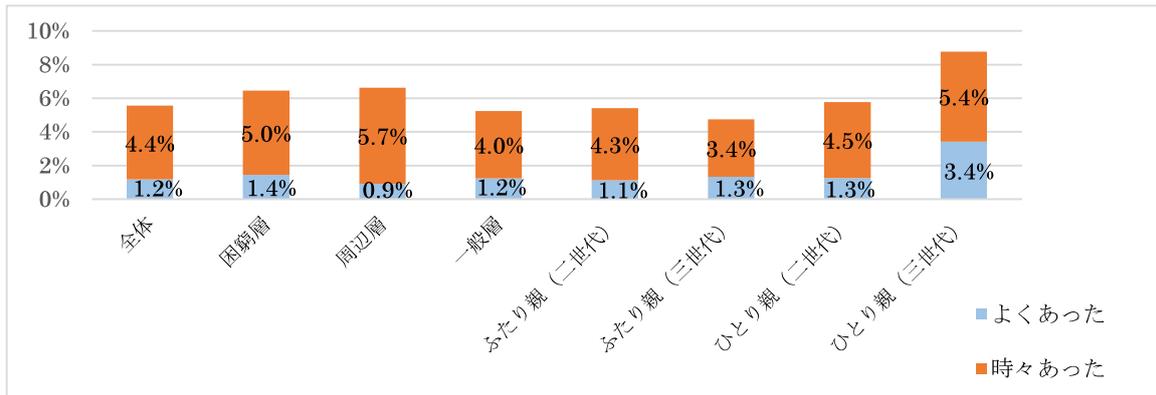
図表 3-3-2 家以外で、休日にいることができる場所の利用意向:年齢層別 (**)



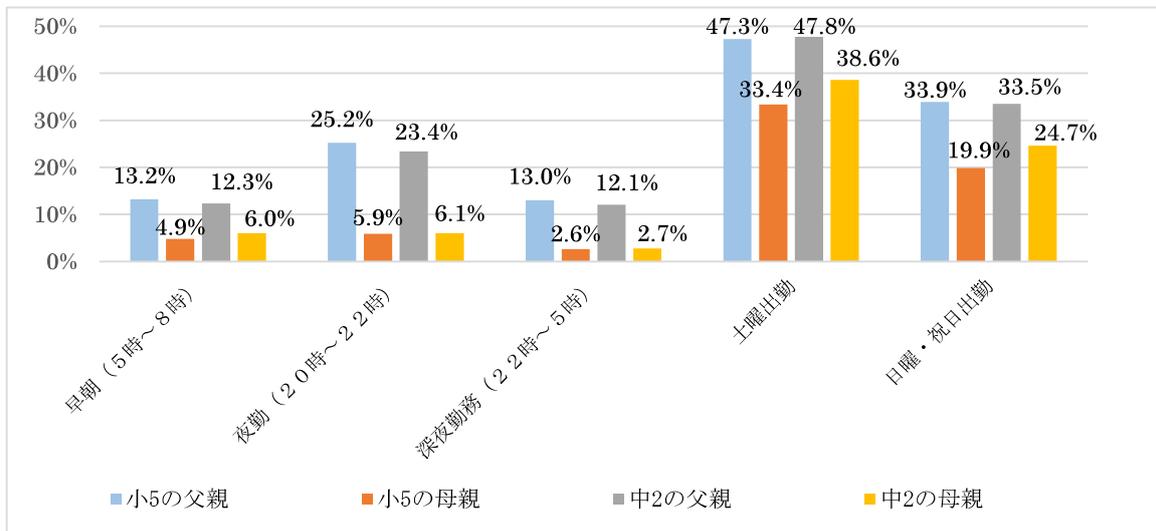
図表 3-3-3 家以外で、休日にいることができる場所の利用意向(16-17 歳):生活困難度別(**)



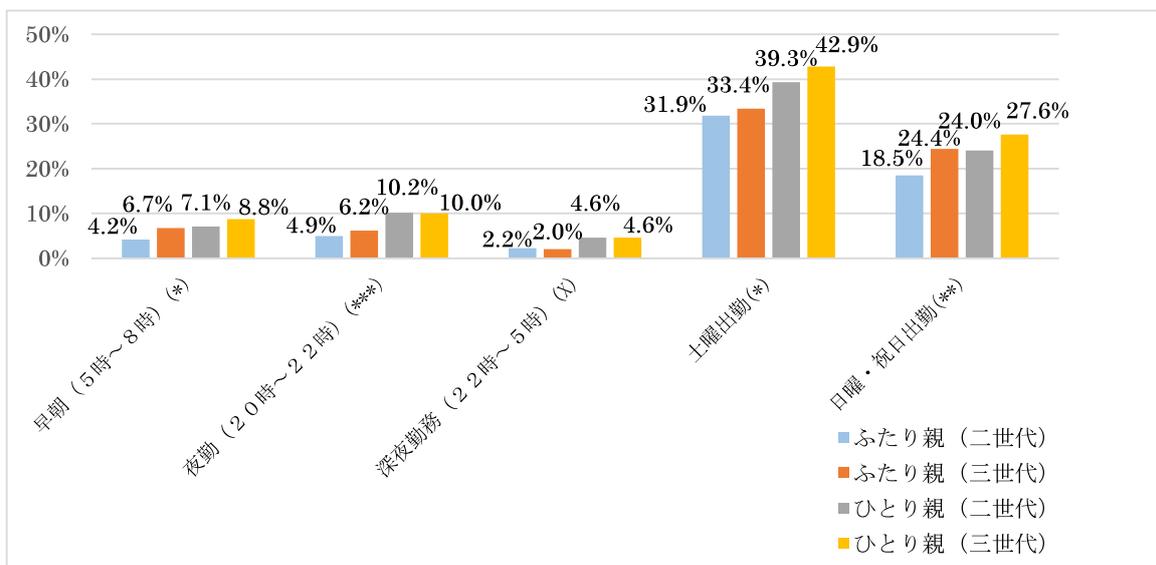
図表 3-3-4 夜遅くまで子供だけで過ごした経験(小学5年生):生活困難度別(**)・世帯タイプ別(X)



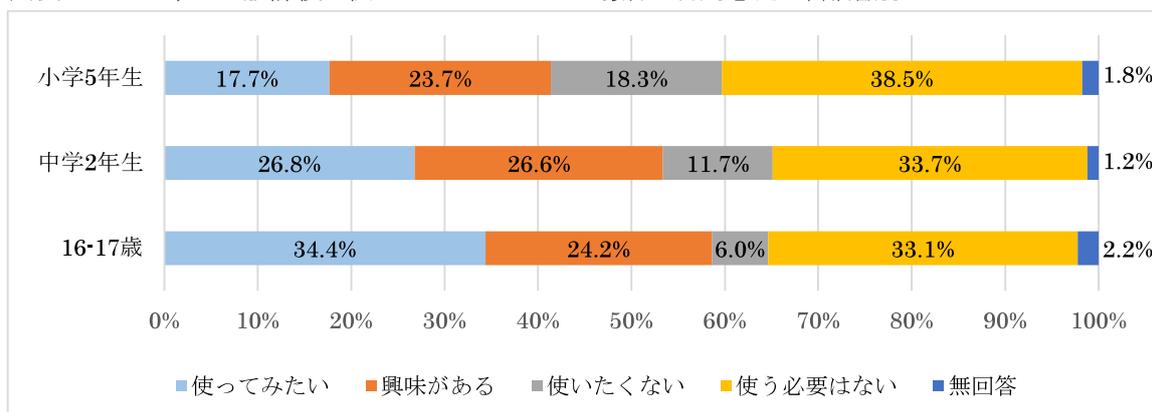
図表 3-3-5 父母の平日日中以外の就労(小学5年生、中学2年生)



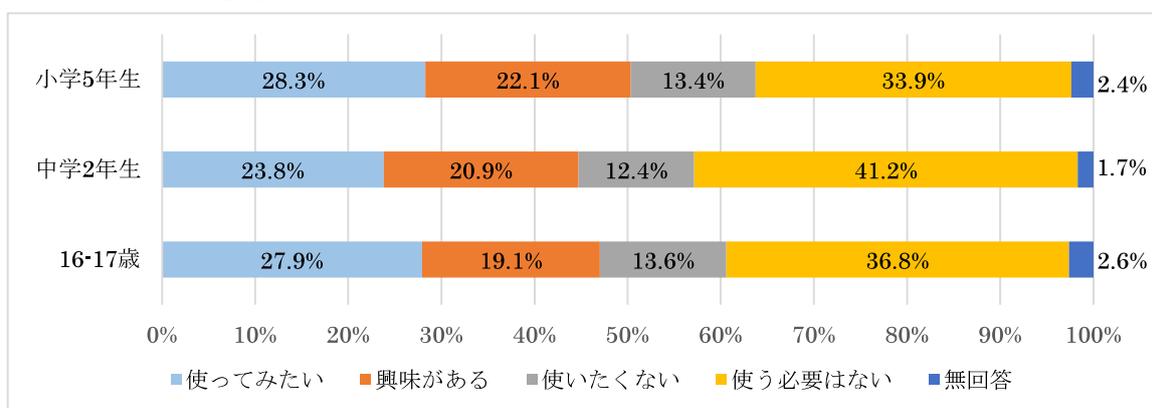
図表 3-3-6 母親の平日日中以外の就労(小学5年生):世帯タイプ別



図表 3-3-7 平日の放課後に夜までいることができる場所の利用意向：年齢層別

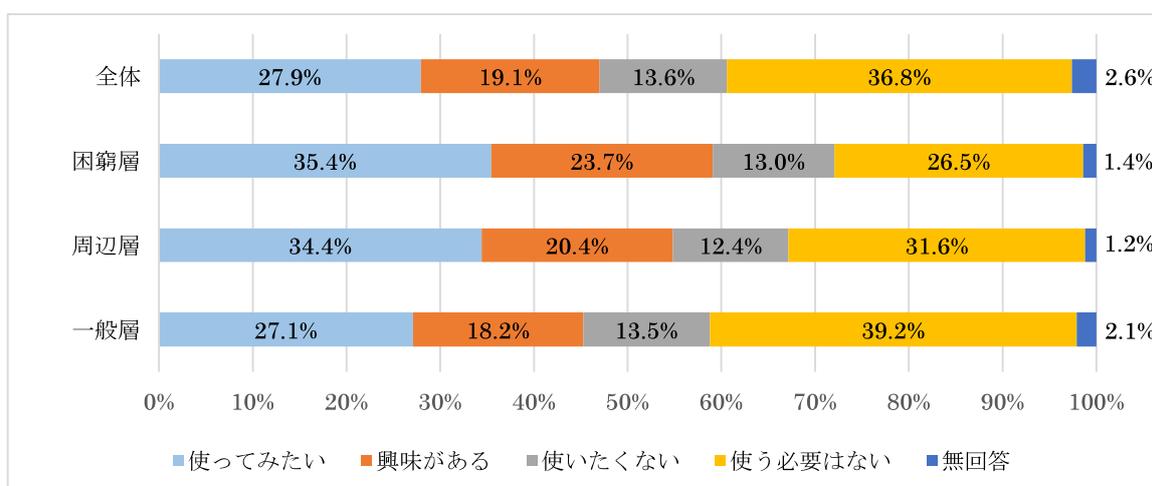


図表 3-3-8 家の人がいない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所の利用意向：年齢層別



※16-17歳は、「家の人がいない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所」

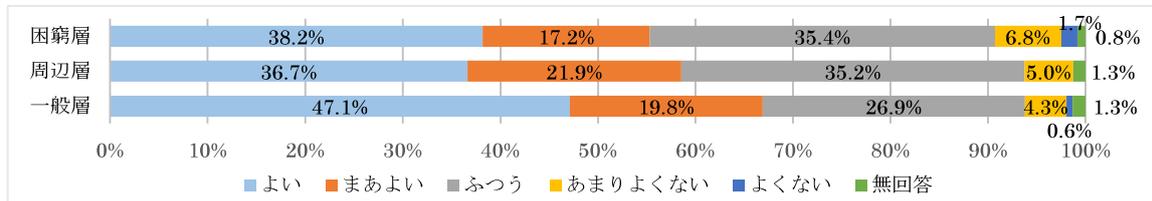
図表 3-3-9 家の人がいない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所の利用意向（16-17歳）：生活困難度別(***)



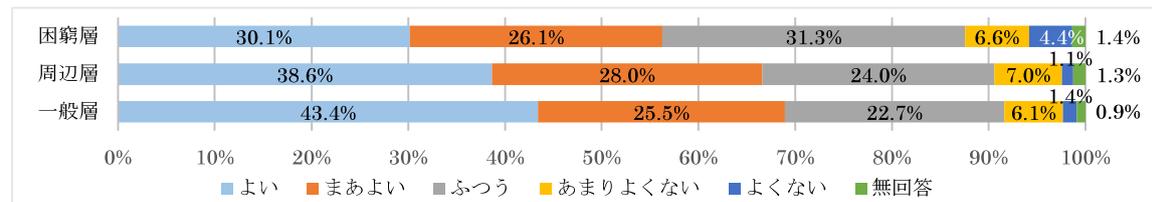
4 子供の健康と自己肯定感

(1)健康・医療

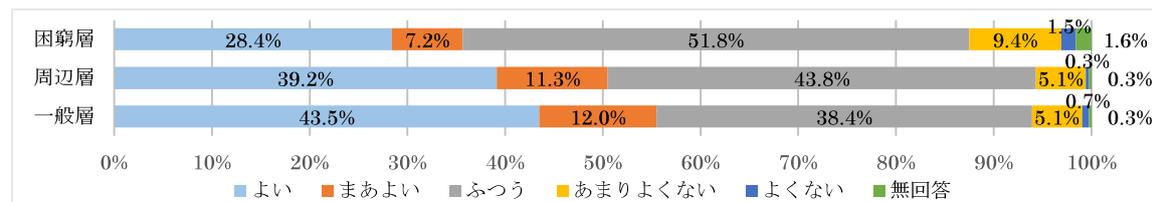
図表 4-1-1 自分の健康状態(小学 5 年生):生活困難度別(***)



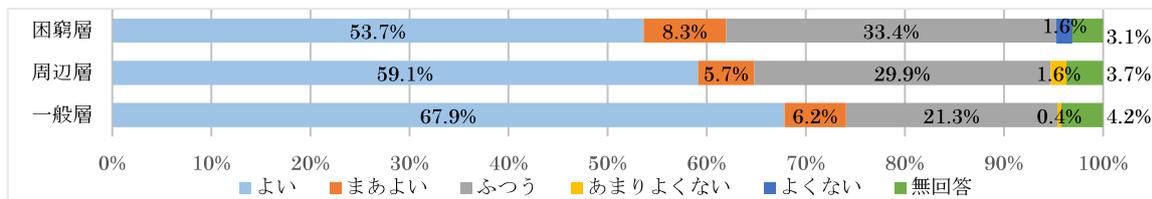
図表 4-1-2 自分の健康状態(中学 2 年生):生活困難度別(***)



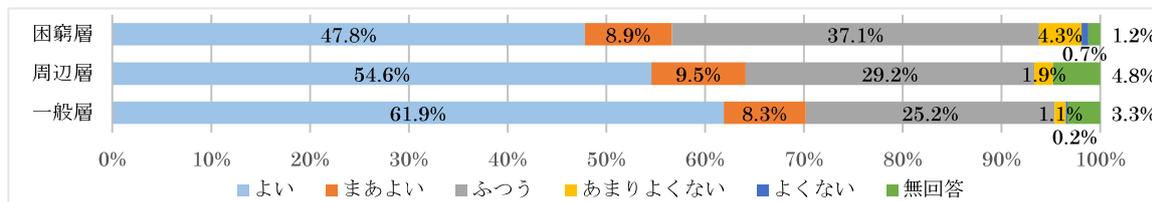
図表 4-1-3 自分の健康状態(16-17 歳):生活困難度別(***)



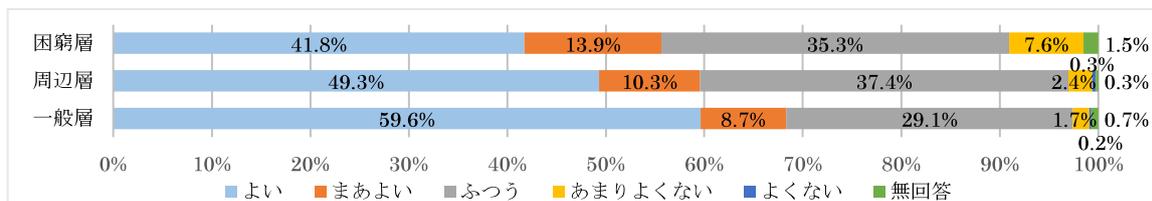
図表 4-1-4 保護者からみた子供の健康状態(小学 5 年生):生活困難度別(***)



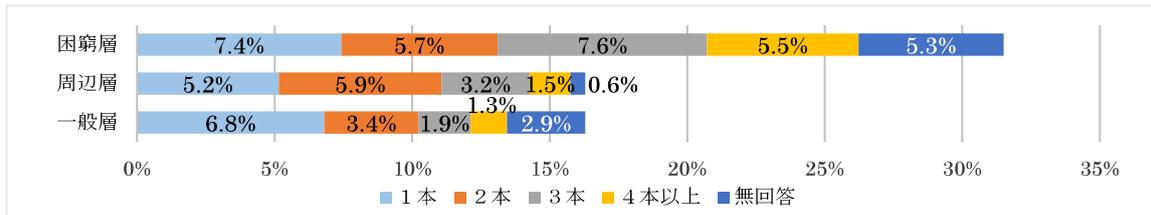
図表 4-1-5 保護者からみた子供の健康状態(中学 2 年生):生活困難度別(***)



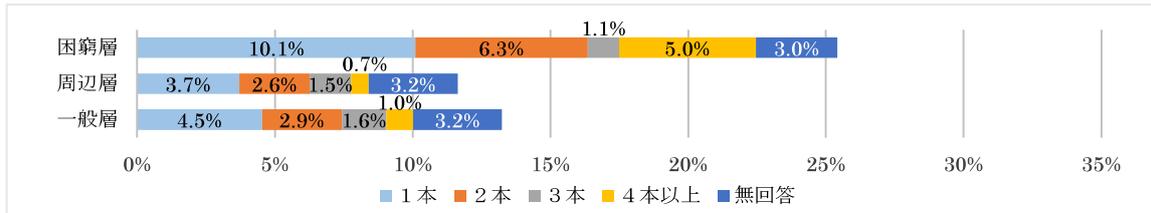
図表 4-1-6 保護者からみた子供の健康状態(16-17 歳):生活困難度別(***)



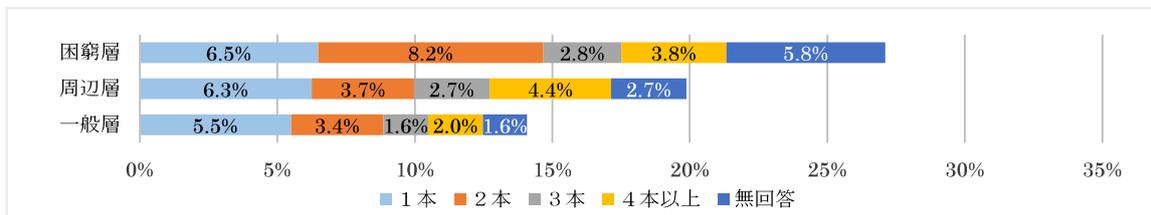
図表 4-1-7 むし歯の本数(治療中も含む)(小学5年生):生活困難度別(***)



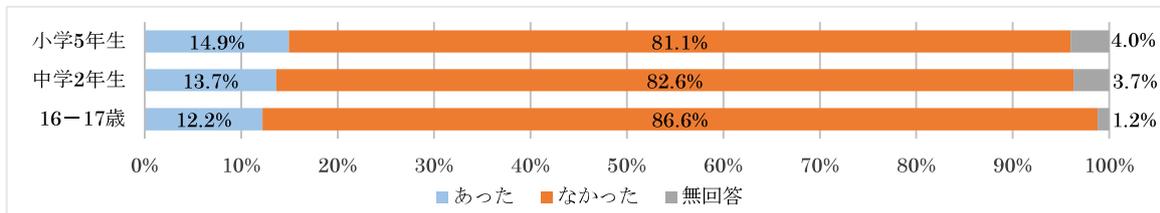
図表 4-1-8 むし歯の本数(治療中も含む)(中学2年生):生活困難度別(***)



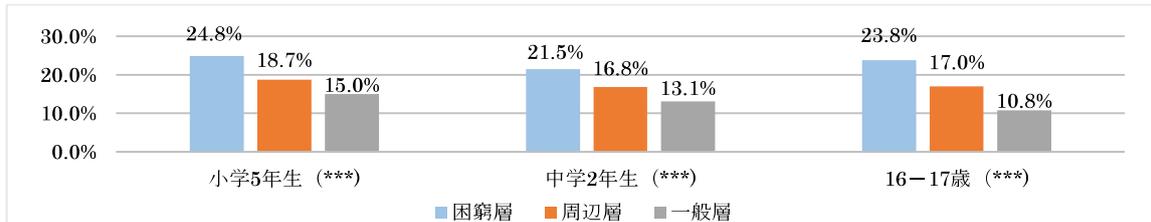
図表 4-1-9 むし歯の本数(治療中も含む)(16-17歳):生活困難度別(***)



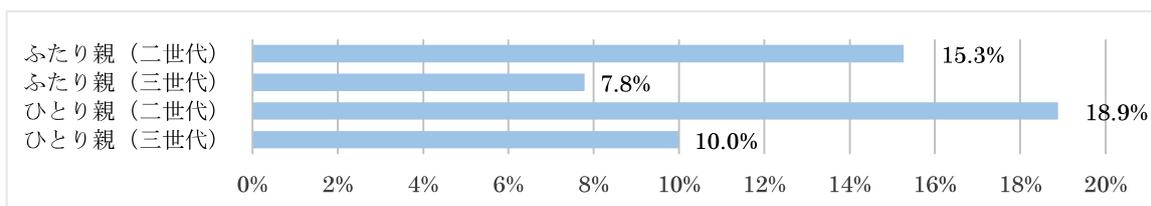
図表 4-1-10 医療の受診抑制経験:年齢層別



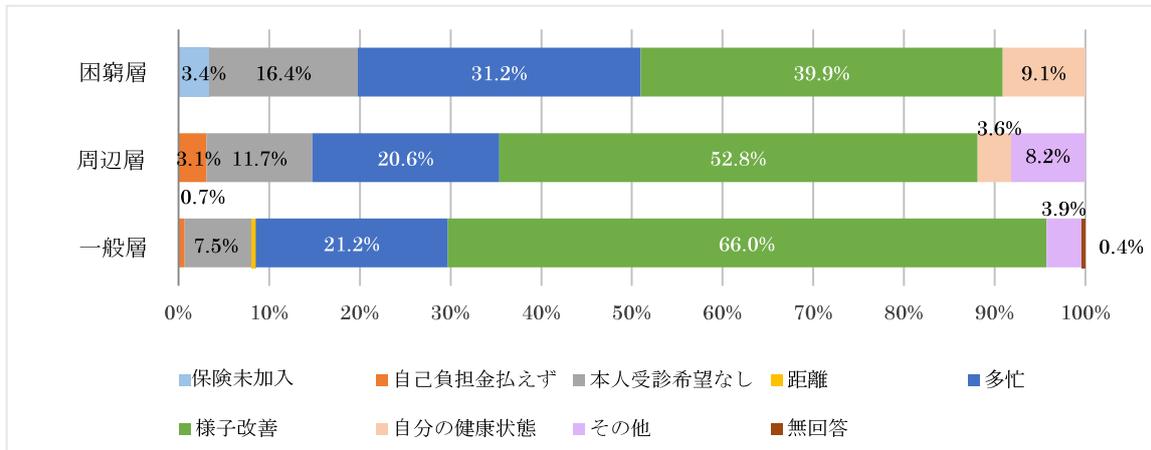
図表 4-1-11 医療の受診抑制経験(小学5年生・中学2年生・16-17歳):生活困難度別



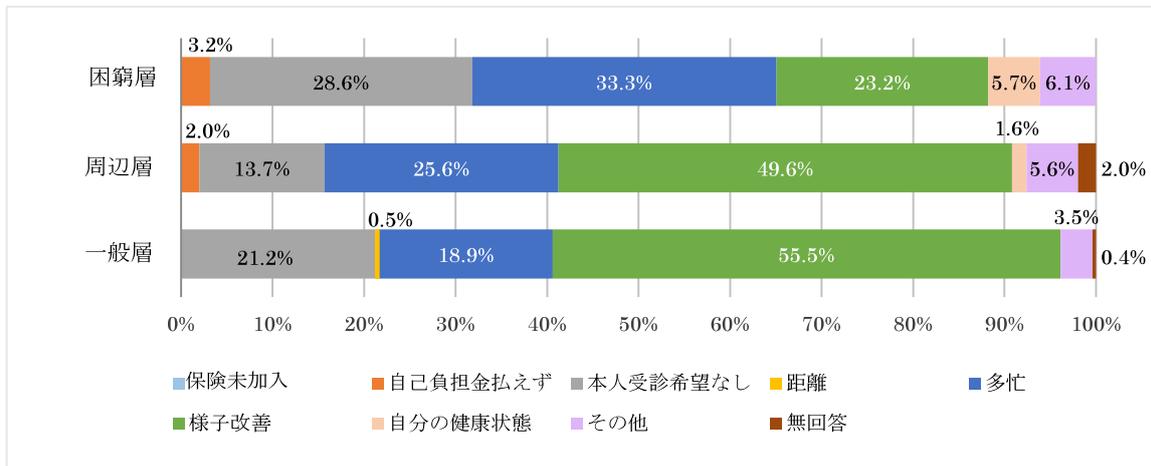
図表 4-1-12 医療の受診抑制経験(小学5年生):世帯タイプ別(***)



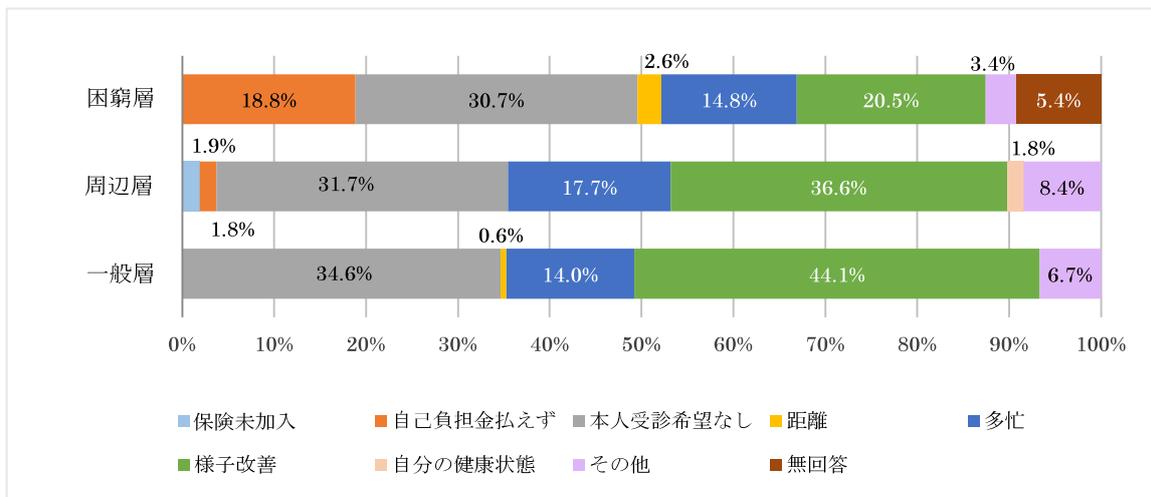
図表 4-1-13 医療の受診抑制理由(小学 5 年生):生活困難度別(***)



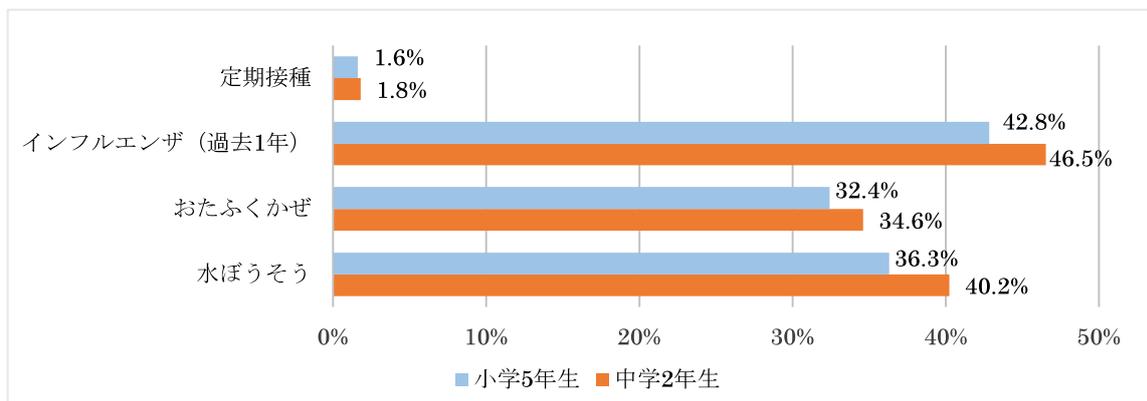
図表 4-1-14 医療の受診抑制理由(中学 2 年生):生活困難度別(***)



図表 4-1-15 医療の受診抑制理由(16-17 歳):生活困難度別(***)

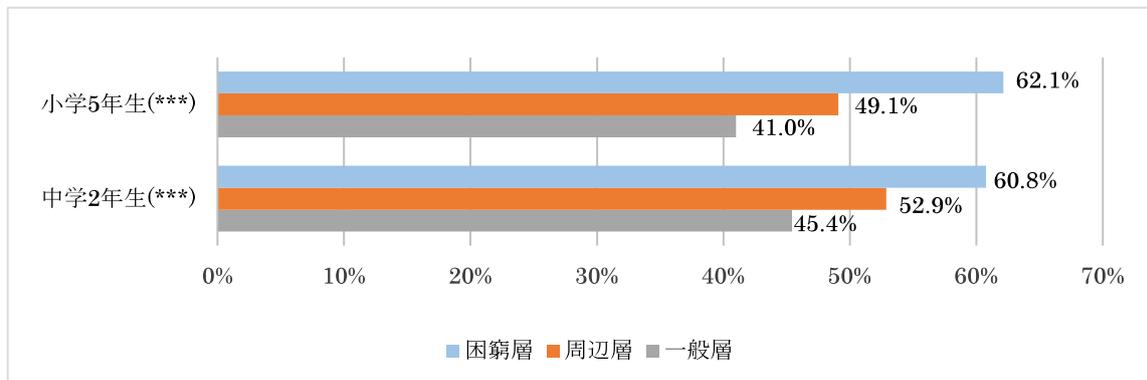


図表 4-1-16 予防接種の未接種状況(小学5年生・中学2年生)

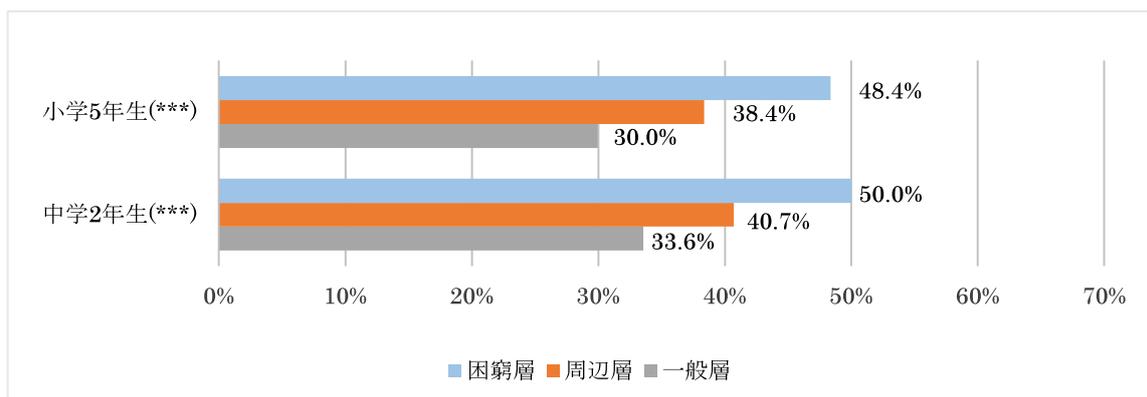


※水ぼうそうは、平成26年10月より定期予防接種となっている。

図表 4-1-17 予防接種の未接種状況(インフルエンザ(過去1年間))
(小学5年生・中学2年生):生活困難度別



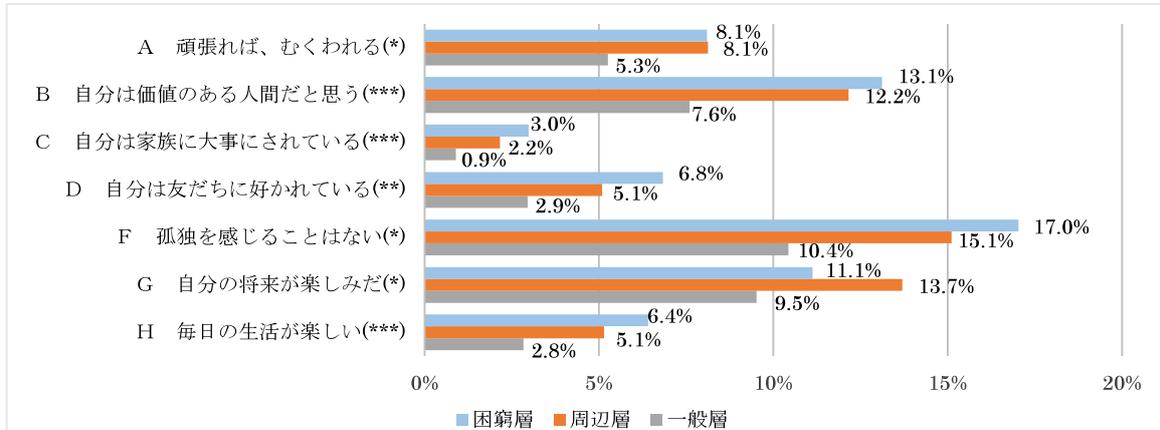
図表 4-1-18 予防接種の未接種状況(おたふく)(小学5年生・中学2年生):生活困難度別



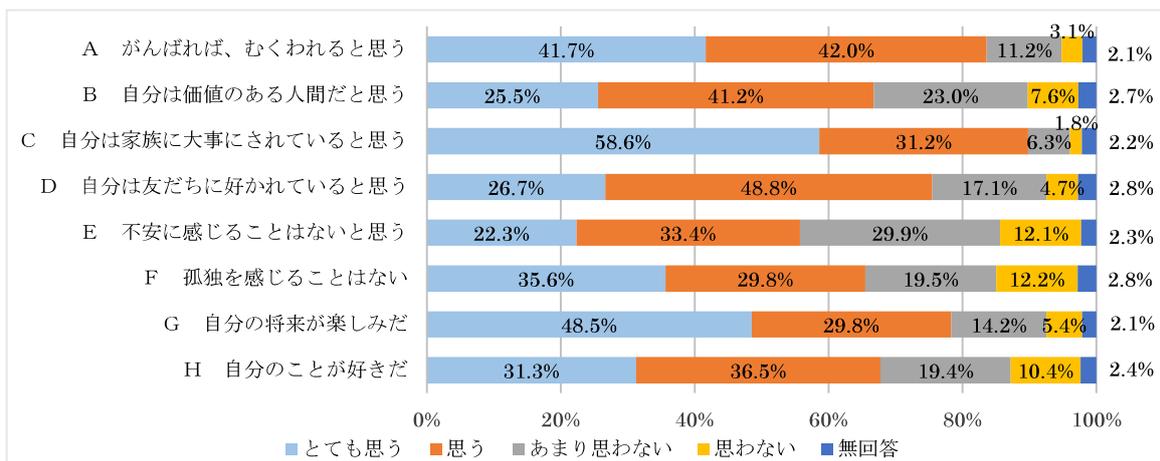
(2)自己肯定感

図表 4-2-1 自己肯定感(「(そう)思わない」と回答)(16-17 歳):生活困難度別

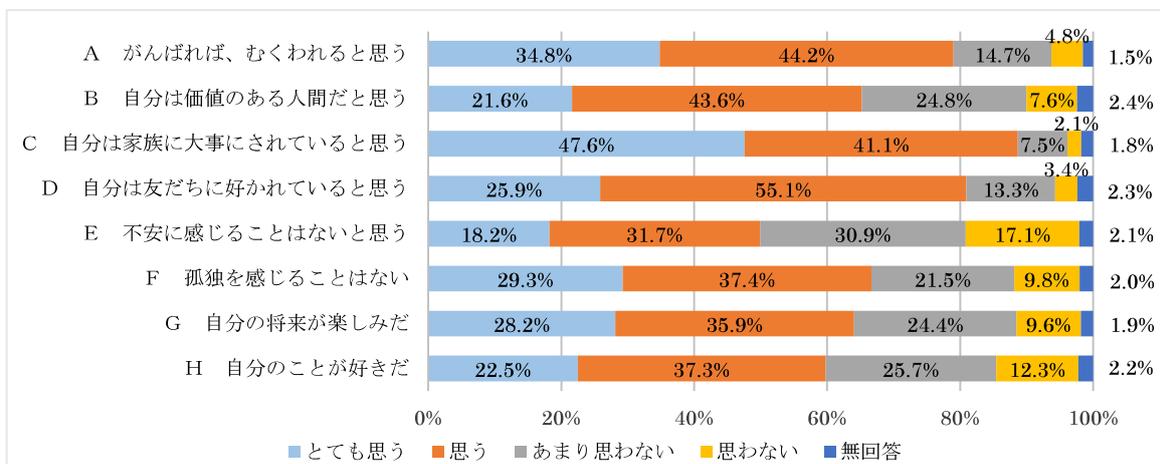
(統計的に有意差があるもののみ)



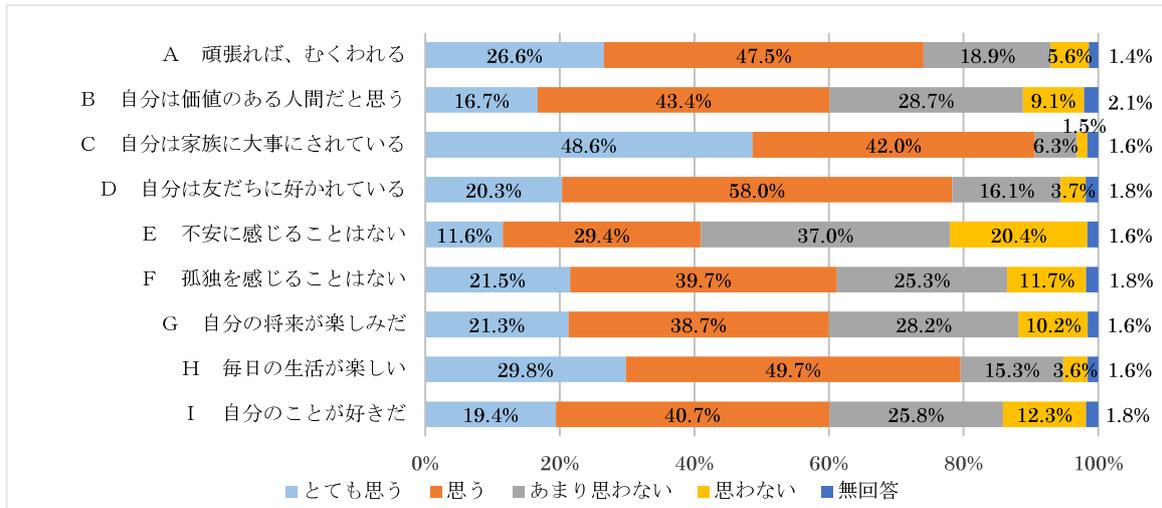
図表 4-2-2 自己肯定感(小学 5 年生)



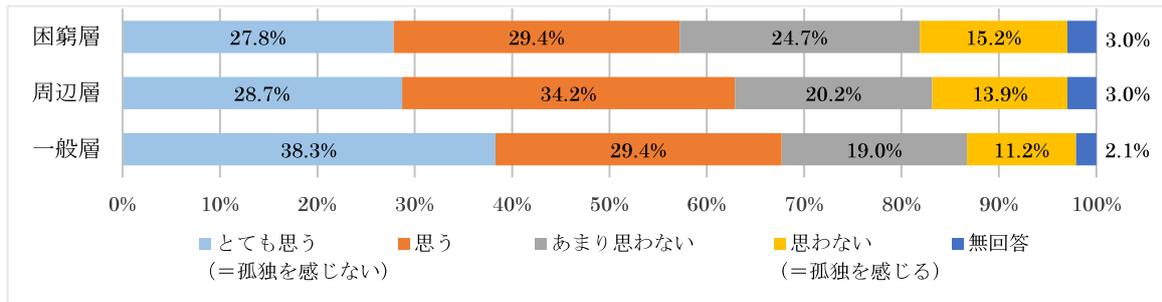
図表 4-2-3 自己肯定感(中学 2 年生)



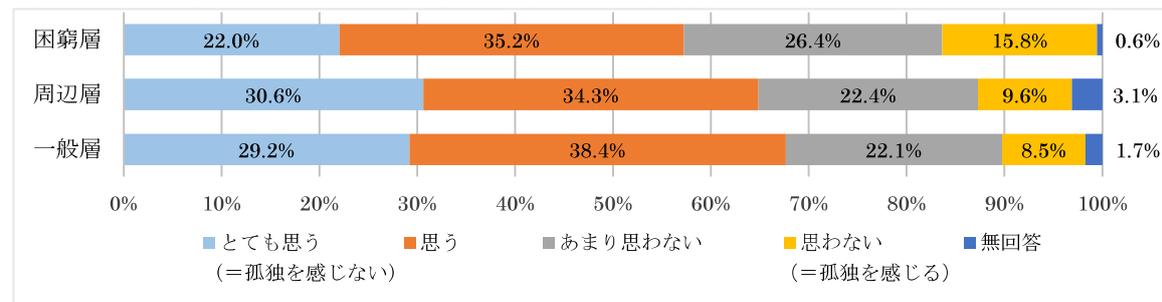
図表 4-2-4 自己肯定感(16-17 歳)



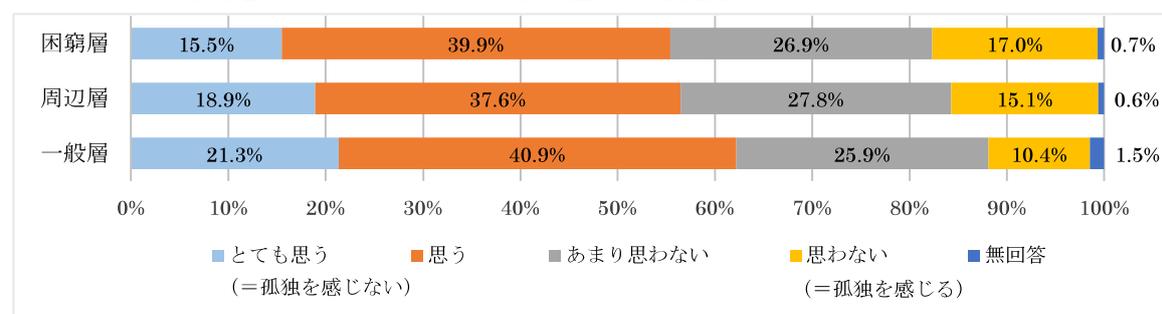
図表 4-2-5 孤独を感じることはない(小学 5 年生):生活困難度別(**)



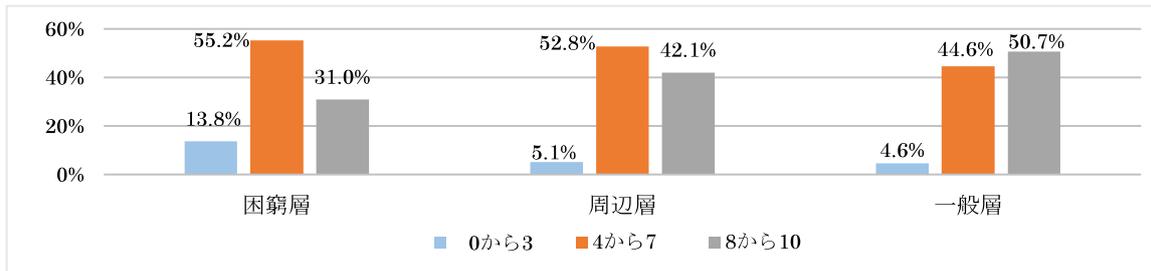
図表 4-2-6 孤独を感じることはない(中学 2 年生):生活困難度別(**)



図表 4-2-7 孤独を感じることはない(16-17 歳):生活困難度別(*)



図表 4-2-8 この1年間の幸福度(16-17歳):生活困難度別(***)

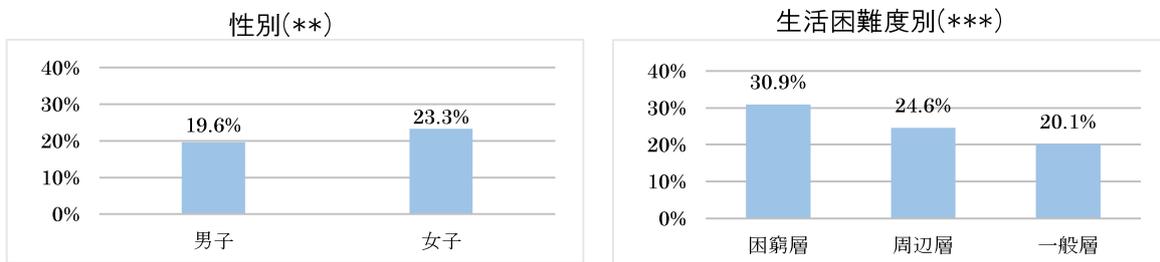


図表 4-2-9 小学5年生、中学2年生の抑うつ傾向(DSRS-C※)

抑うつ傾向	小学5年生		中学2年生	
	度数	ウエイト付%	度数	ウエイト付%
なし	2,287	80.2%	2,124	73.5%
あり	355	12.3%	589	20.1%
無回答	258	7.6%	240	6.4%

※小学5年生と中学2年生の抑うつ傾向を測る指標として、DSRS-C パールソン児童用抑うつ性尺度を用いている。最近1週間の心の状態(「楽しみにしていることがたくさんある」「とても良く眠れる」など18項目)について、子供自身が3段階評価(「いつもそうだ」「時々そうだ」「そんなことはない」)を行い、各項目を選択肢に応じてそれぞれ0~2点で点数化する。その合計が16点以上であった場合、抑うつ傾向があると判断される。

図表 4-2-10 抑うつ傾向(中学2年生)

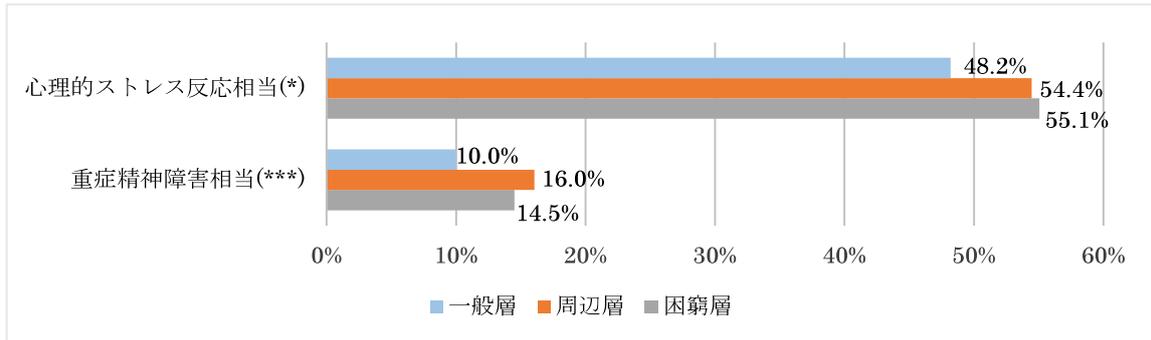


図表 4-2-11 16-17歳の抑うつ傾向(K6※)

抑うつ傾向(あり)	度数	ウエイト付%
心理的ストレス反応相当	1,234	47.47%
9+: 気分・不安障害相当	687	26.3%
10+: 気分・不安障害相当	595	22.7%
重症精神障害相当	295	11.1%

※16-17歳の抑うつ傾向を測る指標として、K6という指標を用いている。K6は、一般住民を対象とした調査で心理的ストレスを含む何らかの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」などの6つの質問について5段階(「まったくない」(0点)、「少しだけ」(1点)、「ときどき」(2点)、「たいてい」(3点)、「いつも」(4点))で点数化する。合計点数が高いほど、精神的な問題がより重い可能性があると考えられ、「心理的ストレス反応相当(5点以上)」「気分・不安障害相当(9点以上および10点以上)」「重症精神障害相当(13点以上)」に分類される。

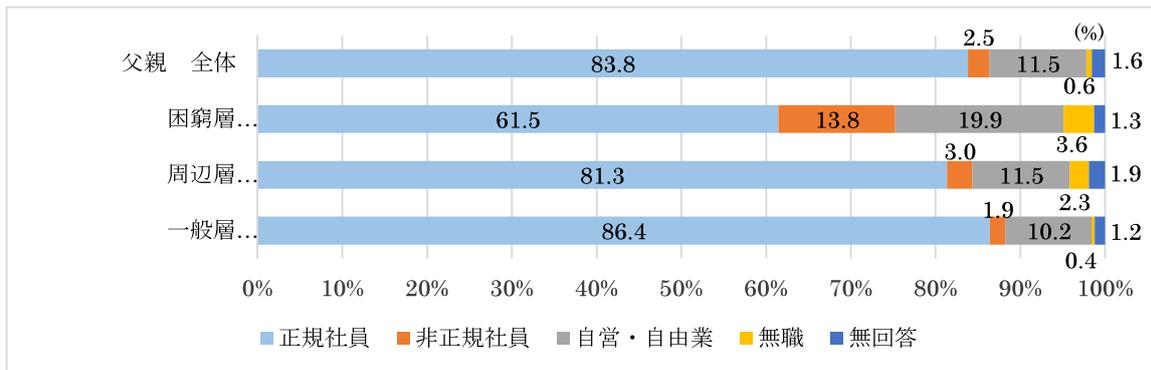
図表 4-2-12 抑うつ傾向(16-17 歳):生活困難度別



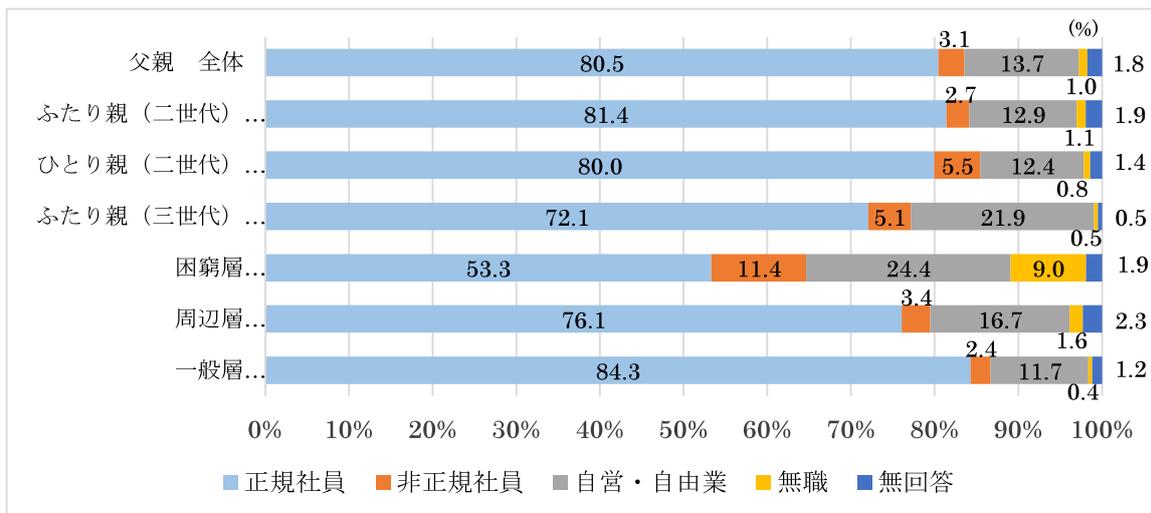
5 保護者の状況

(1)保護者の就労状況

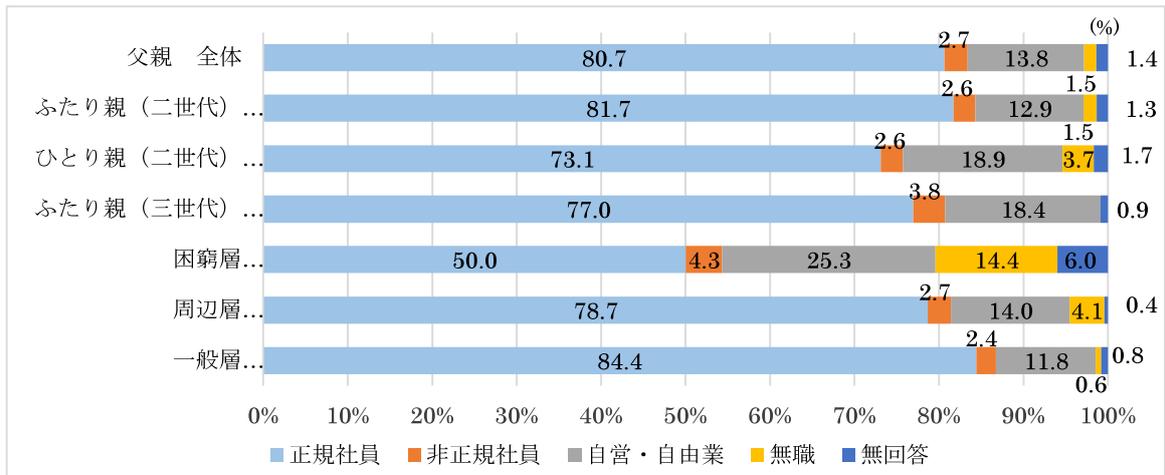
図表 5-1-1 父親の就労状態(小学 5 年生):全体+生活困難度別(***)



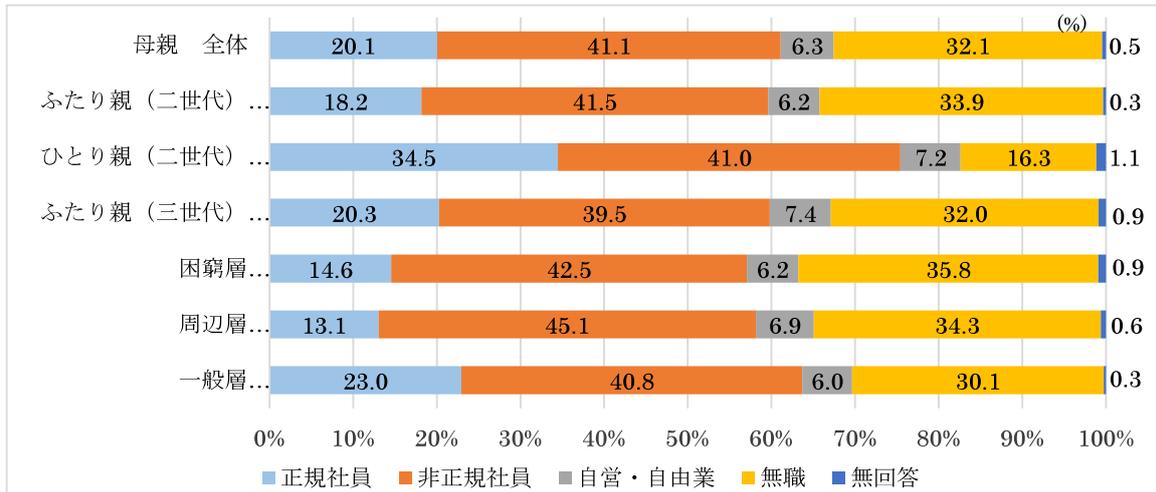
図表 5-1-2 父親の就労状態(中学 2 年生):全体+世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



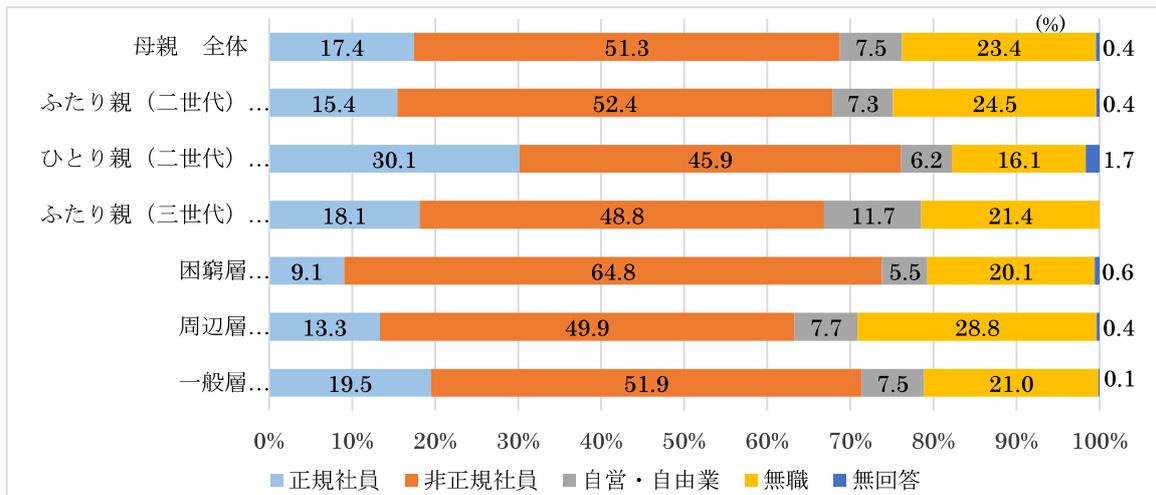
図表 5-1-3 父親の就労状態(16-17 歳):全体+世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



図表 5-1-4 母親の就労状態(小学 5 年生):全体+世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



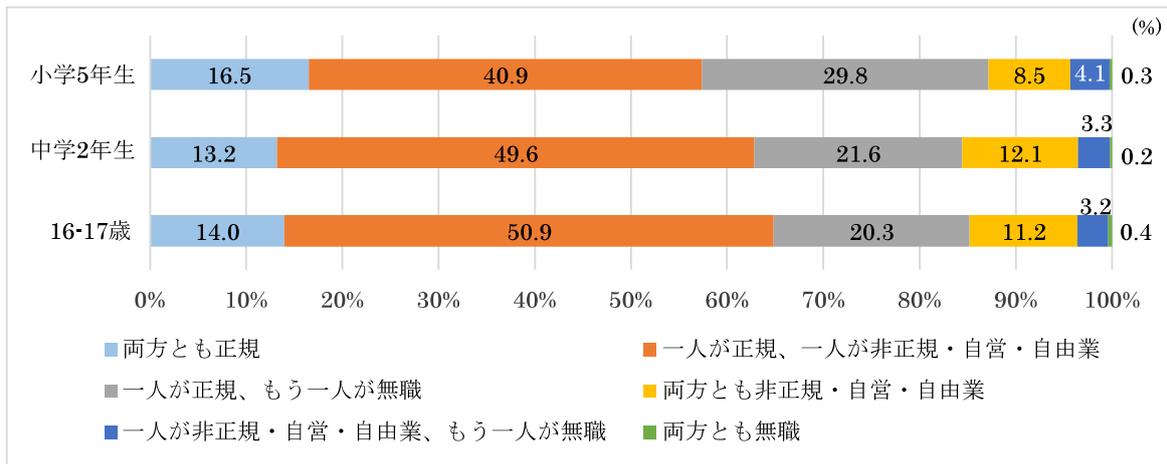
図表 5-1-5 母親の就労状態(中学 2 年生):全体+世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



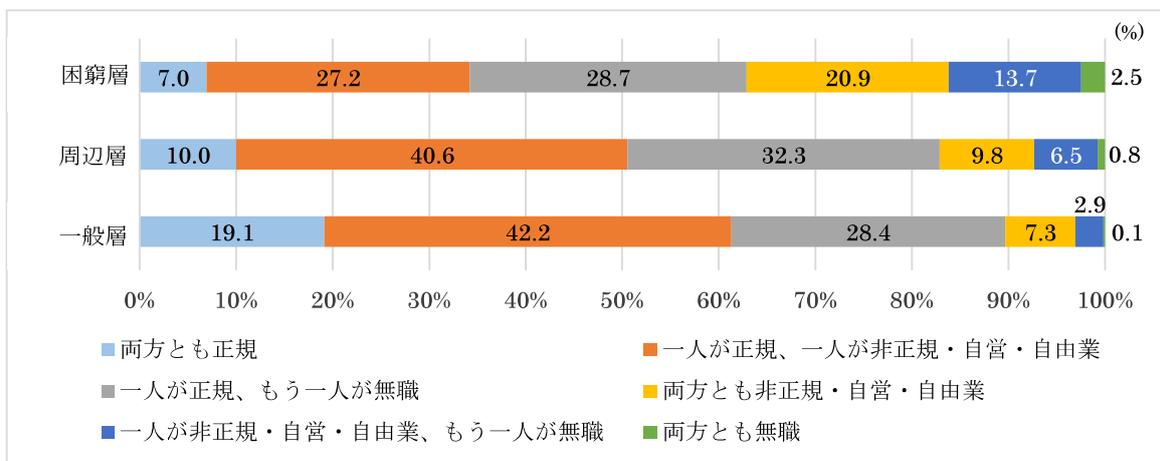
図表 5-1-6 母親の就労状態(16-17 歳):全体+世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



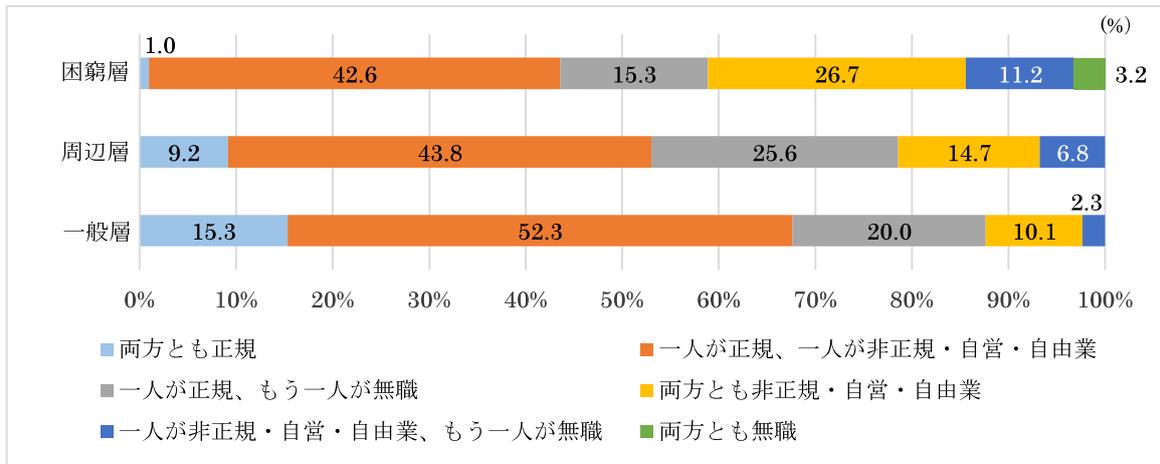
図表 5-1-7 ふたり親世帯の共働きの状況:年齢層別



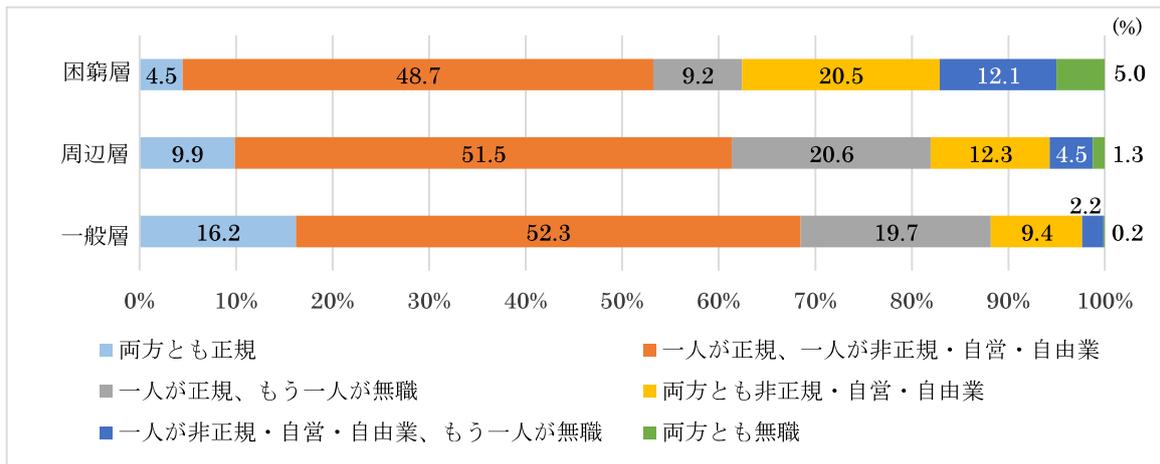
図表 5-1-8 ふたり親世帯の共働きの状況(小学5年生):生活困難度別(***)



図表 5-1-9 ふたり親世帯の共働きの状況(中学2年生):生活困難度別(***)

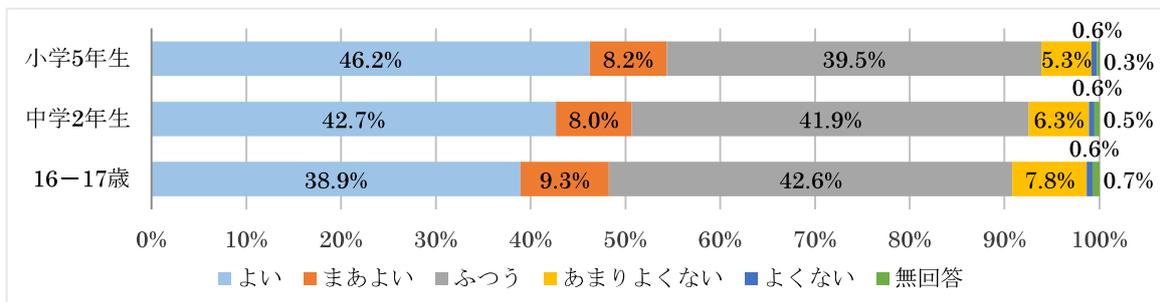


図表 5-1-10 ふたり親世帯の共働きの状況(16-17歳):生活困難度別(***)

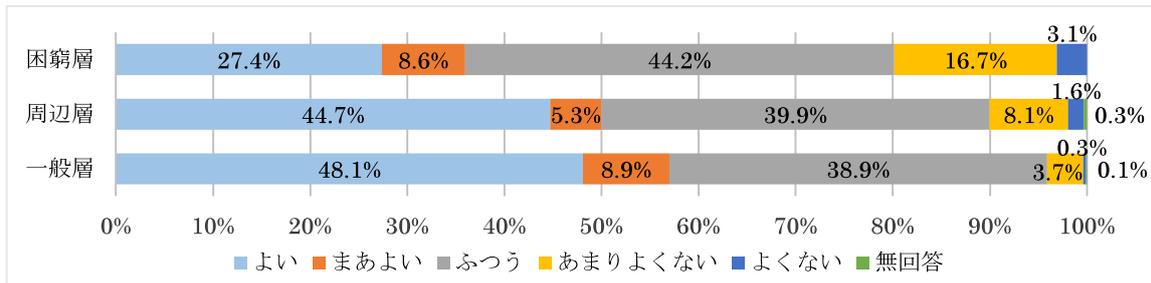


(2)保護者の健康状態と精神的ストレス

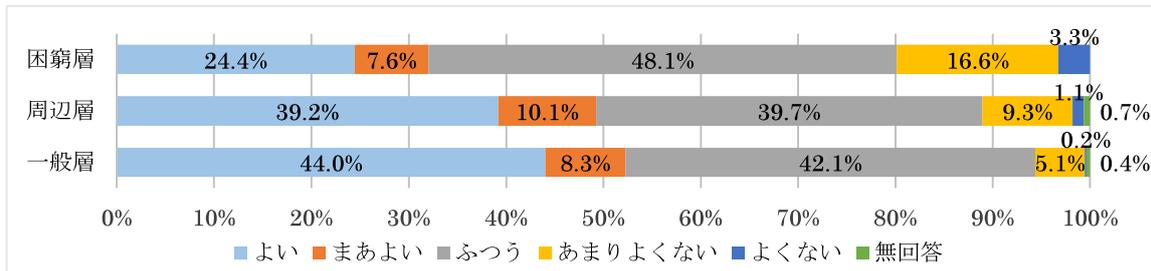
図表 5-2-1 保護者の健康状態:年齢層別



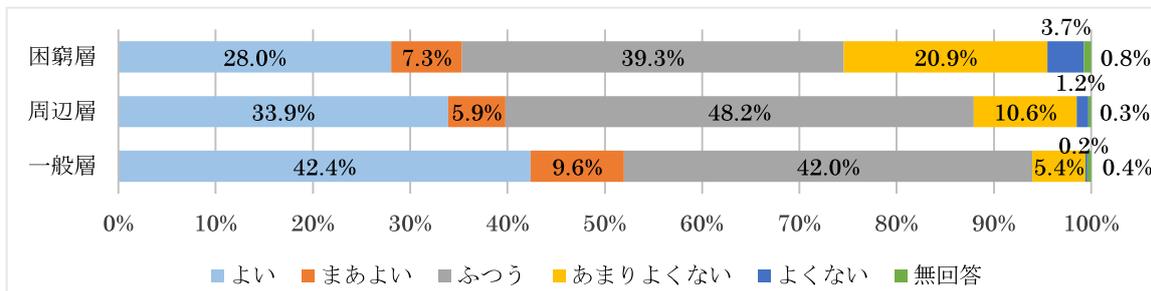
図表 5-2-2 保護者の健康状態(小学5年生):生活困難度別(***)



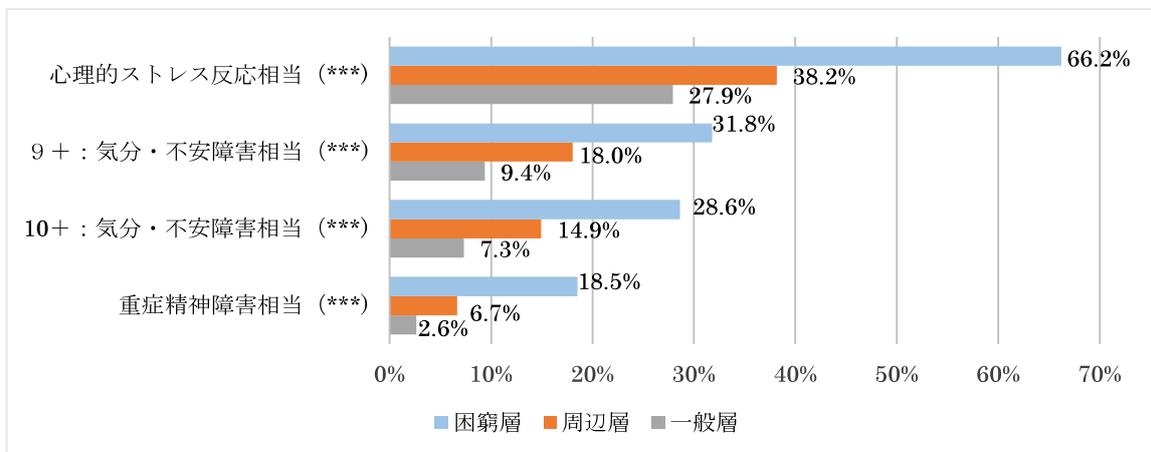
図表 5-2-3 保護者の健康状態(中学2年生):生活困難度別(***)



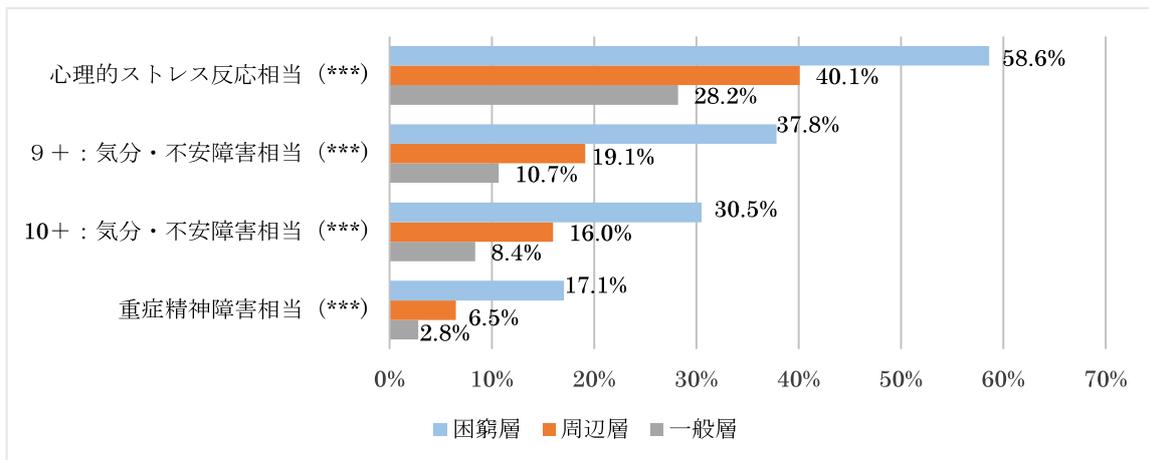
図表 5-2-4 保護者の健康状態(16-17歳):生活困難度別(***)



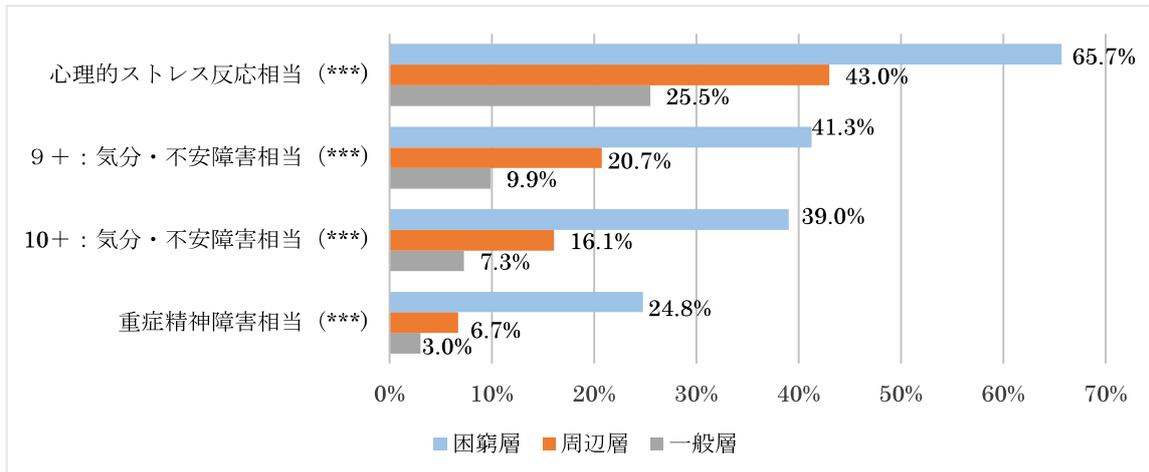
図表 5-2-5 保護者の抑うつ傾向(小学5年生):生活困難度別



図表 5-2-6 保護者の抑うつ傾向(中学2年生):生活困難度別



図表 5-2-7 保護者の抑うつ傾向(16-17歳):生活困難度別



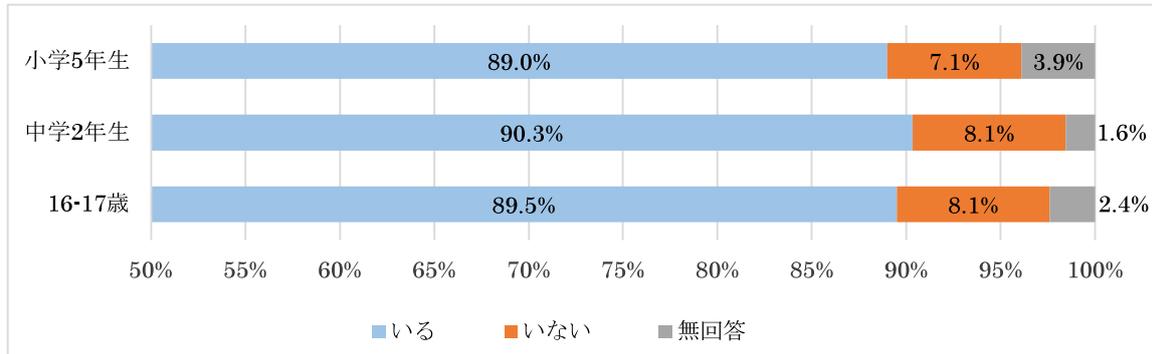
図表 5-2-8 保護者の抑うつ傾向(K6)

抑うつ傾向 (あり)	小学5年生		中学2年生		16-17歳	
	度数	ウエイト付%	度数	ウエイト付%	度数	ウエイト付%
心理的ストレス反応相当	885	31.6%	387	31.8%	834	32.3%
9+ : 気分・不安障害相当	342	12.1%	387	13.5%	378	14.7%
10+ : 気分・不安障害相当	281	10.0%	318	11.0%	299	11.6%
重症精神障害相当	118	4.2%	134	4.7%	134	5.3%

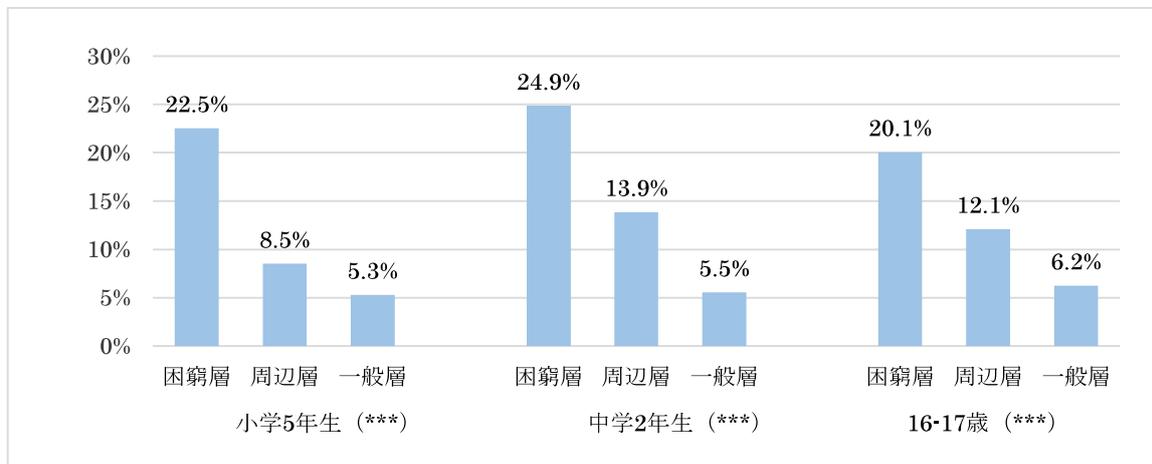
※保護者の抑うつ傾向を測る指標として、K6 指標を用いている(K6 指標については、図表 4-2-11 下の※を参照)。

(3)相談相手

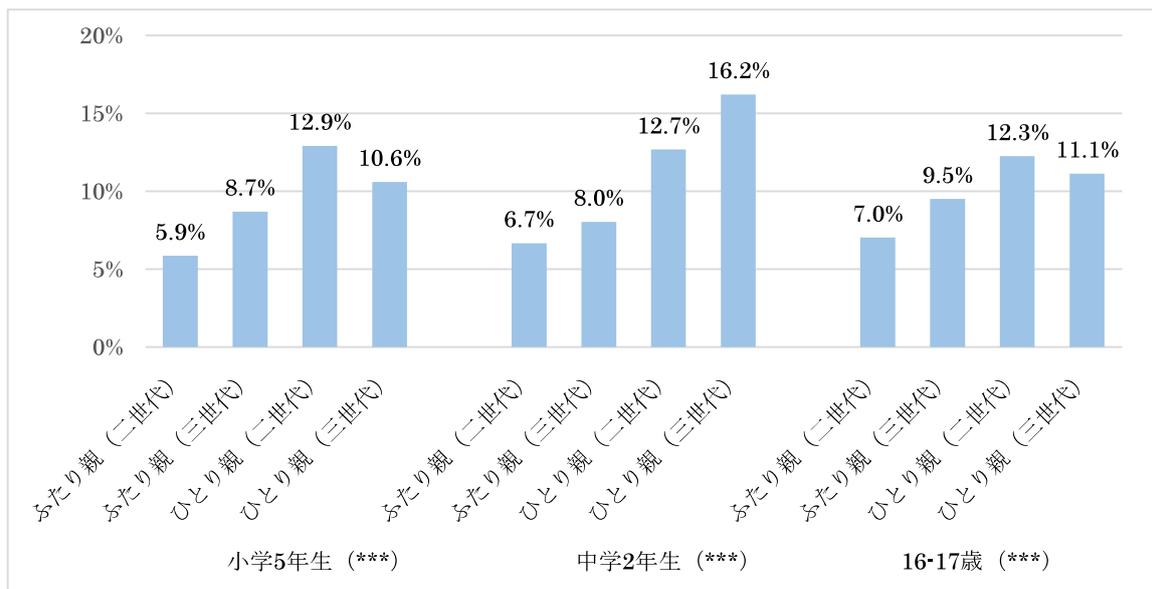
図表 5-3-1 相談相手の有無:年齢層別



図表 5-3-2 相談相手のいない保護者の割合:生活困難度別



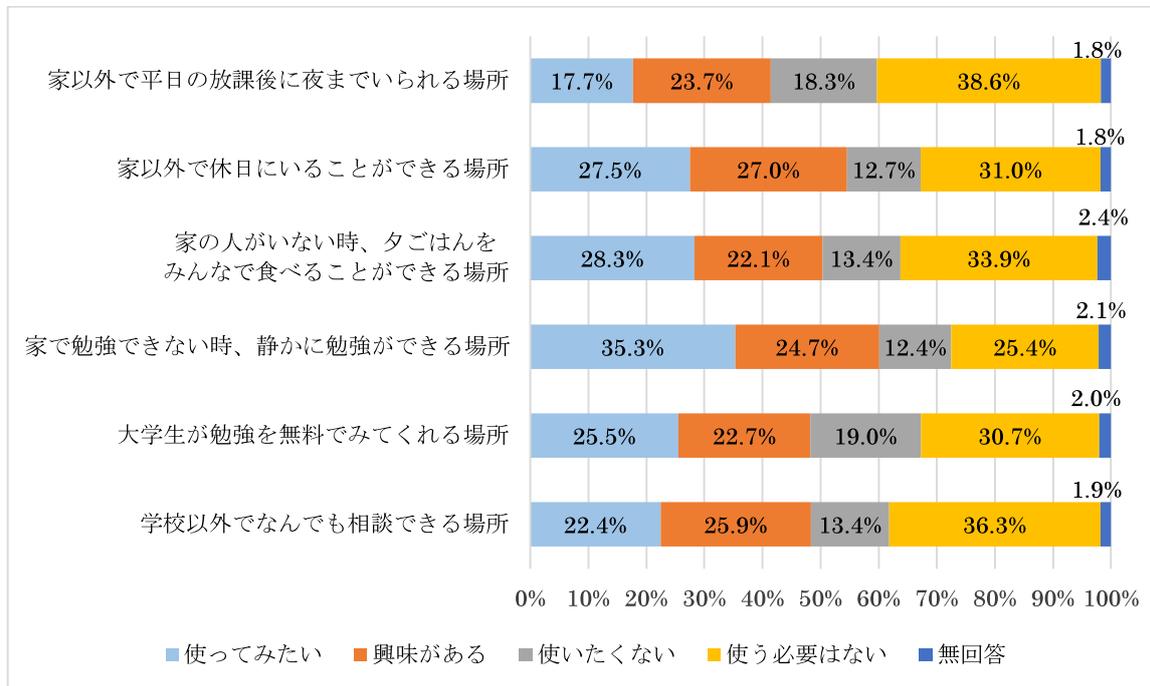
図表 5-3-3 相談相手のいない保護者の割合:世帯タイプ別



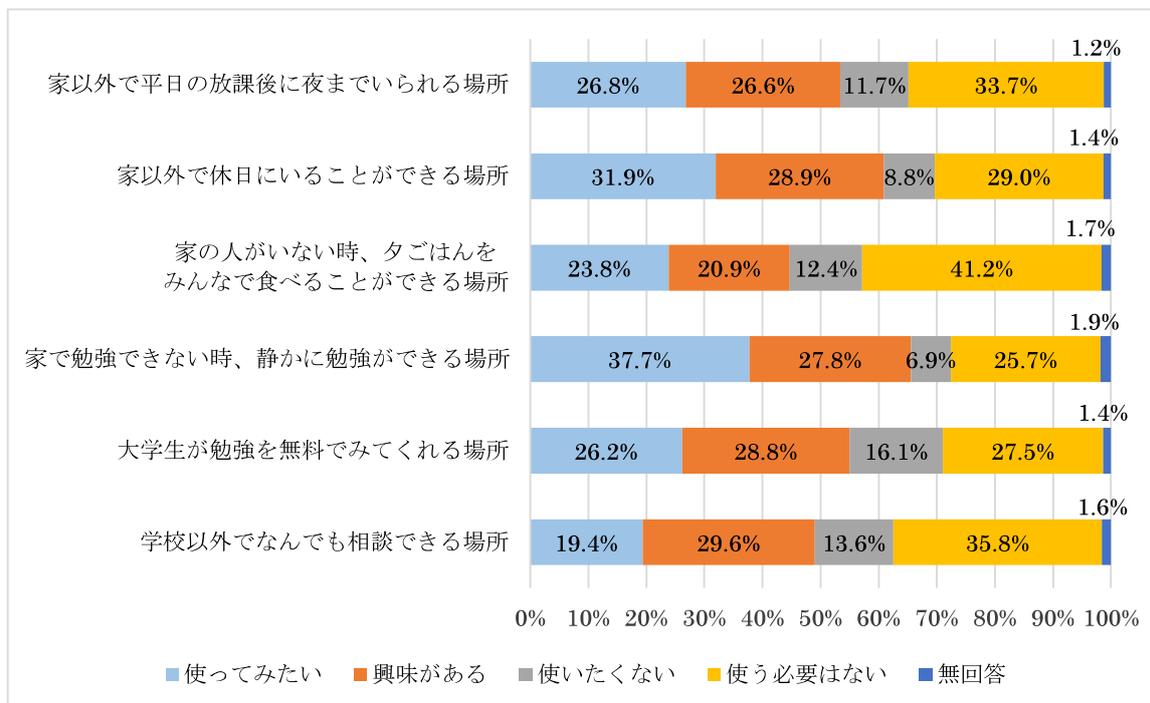
6 制度・サービスの利用

(1) 子供本人の支援サービス利用意向

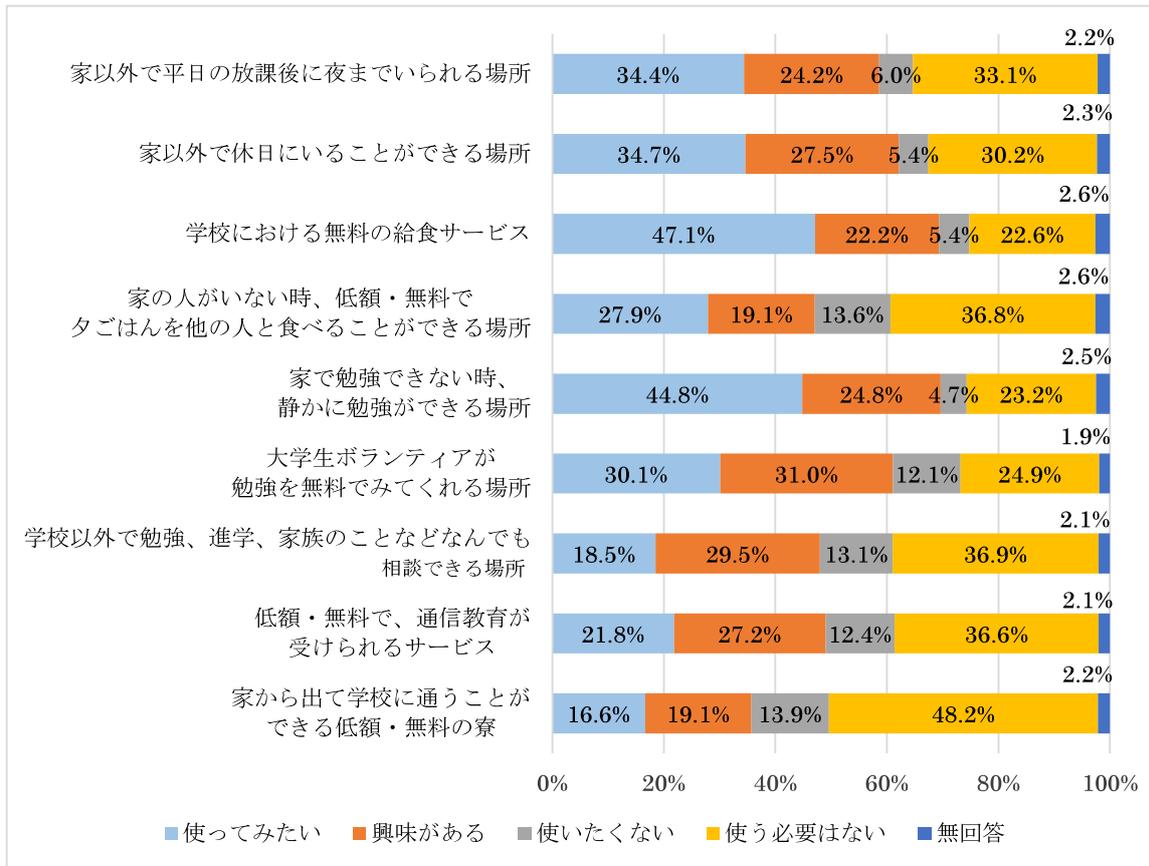
図表 6-1-1 子供本人のサービス利用意向(小学 5 年生)



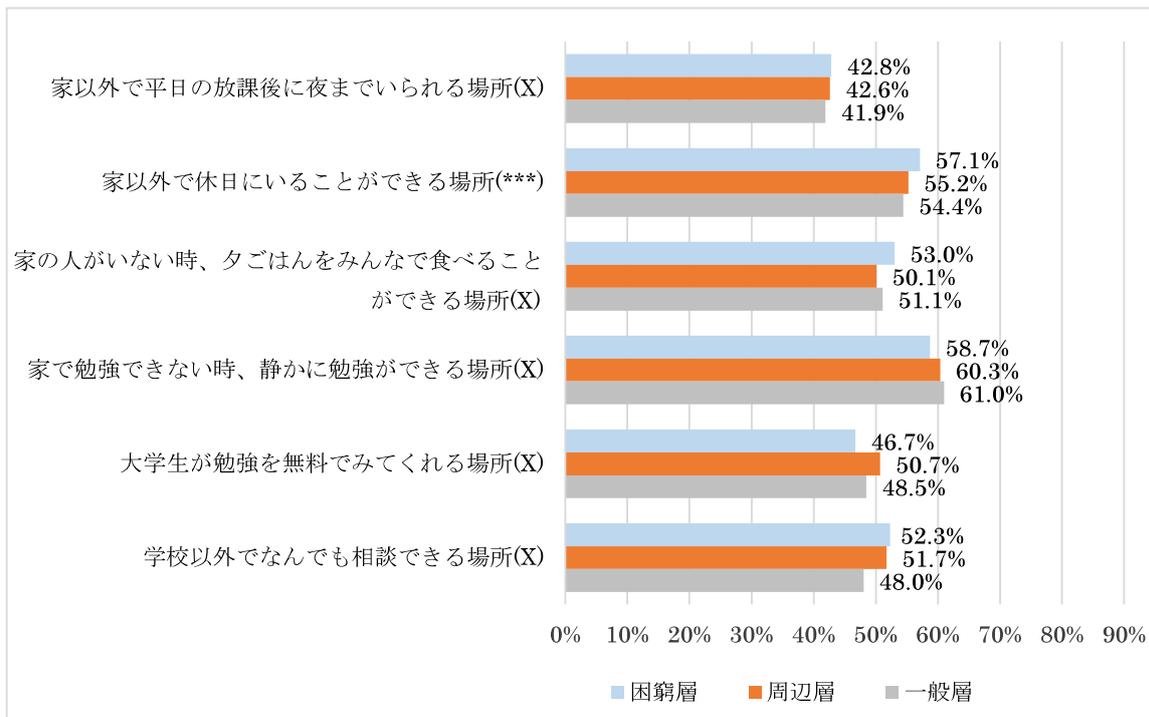
図表 6-1-2 子供本人のサービス利用意向(中学 2 年生)



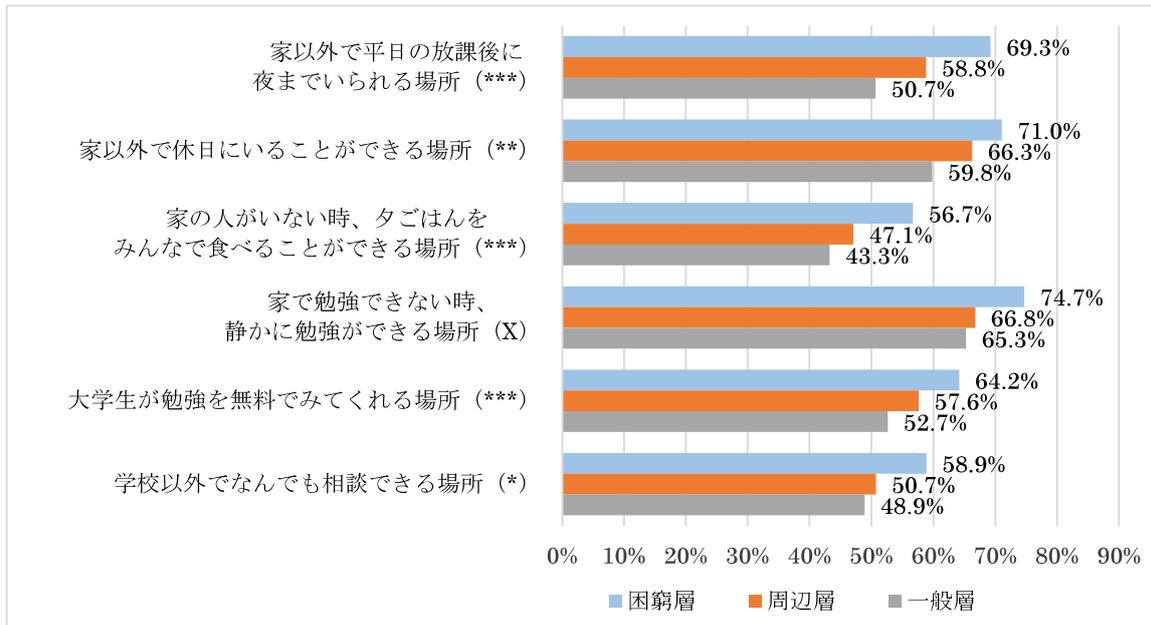
図表 6-1-3 子供本人のサービス利用意向(16-17 歳)



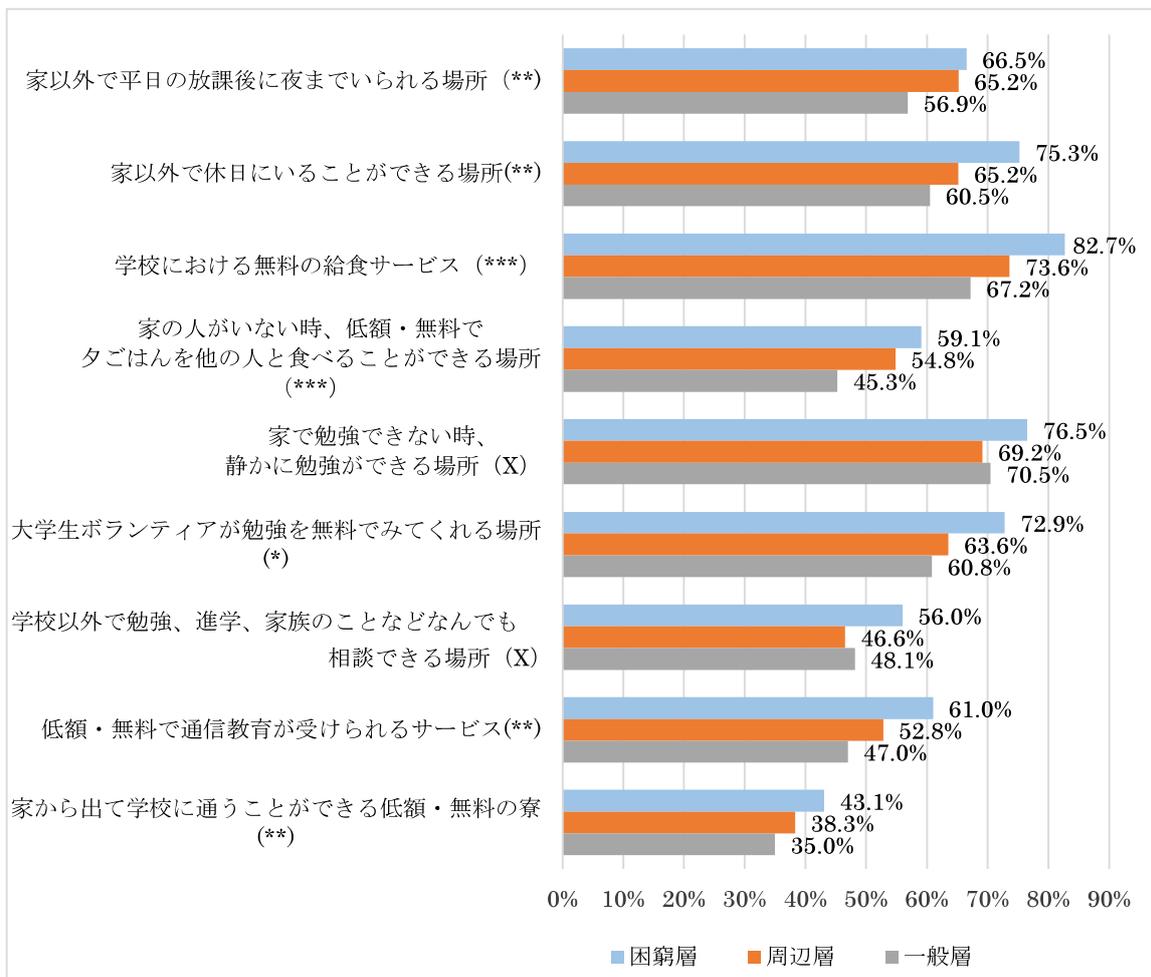
図表 6-1-4 子供本人のサービス利用意向(小学 5 年生):生活困難度別



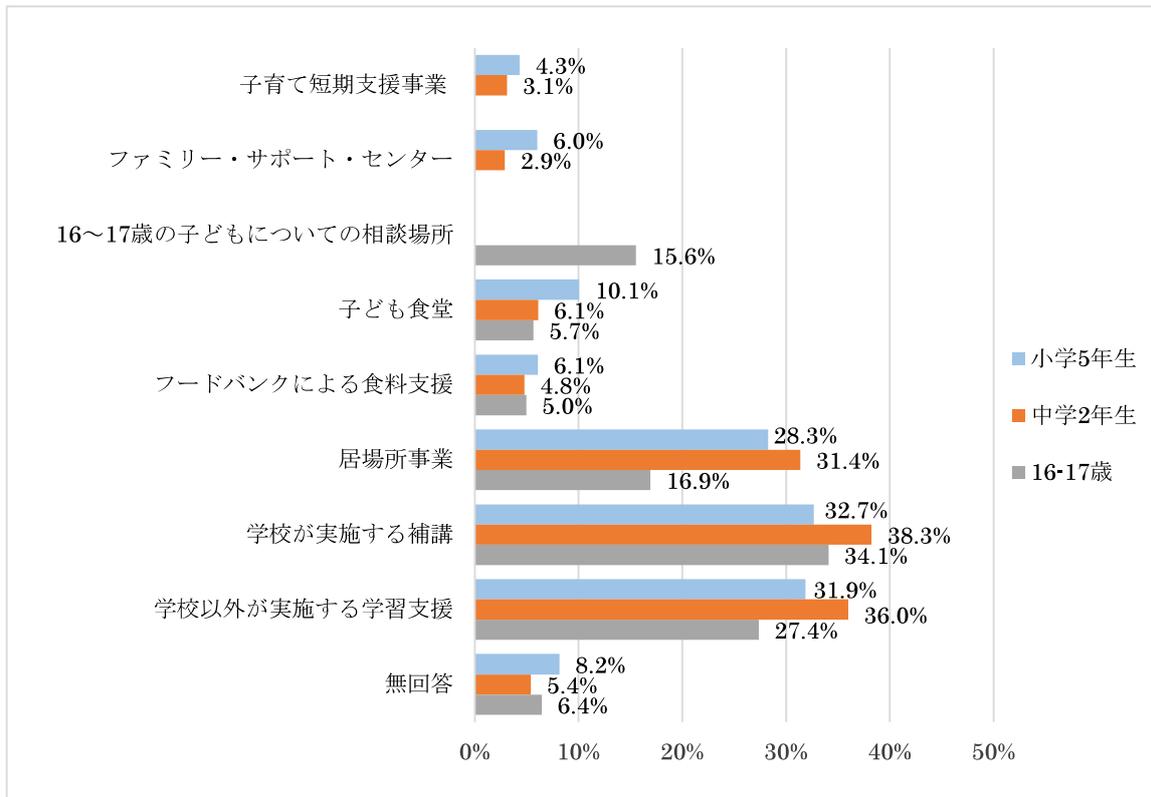
図表 6-1-5 子供本人のサービス利用意向(中学 2 年生):生活困難度別



図表 6-1-6 子供本人のサービス利用意向(16-17 歳):生活困難度別



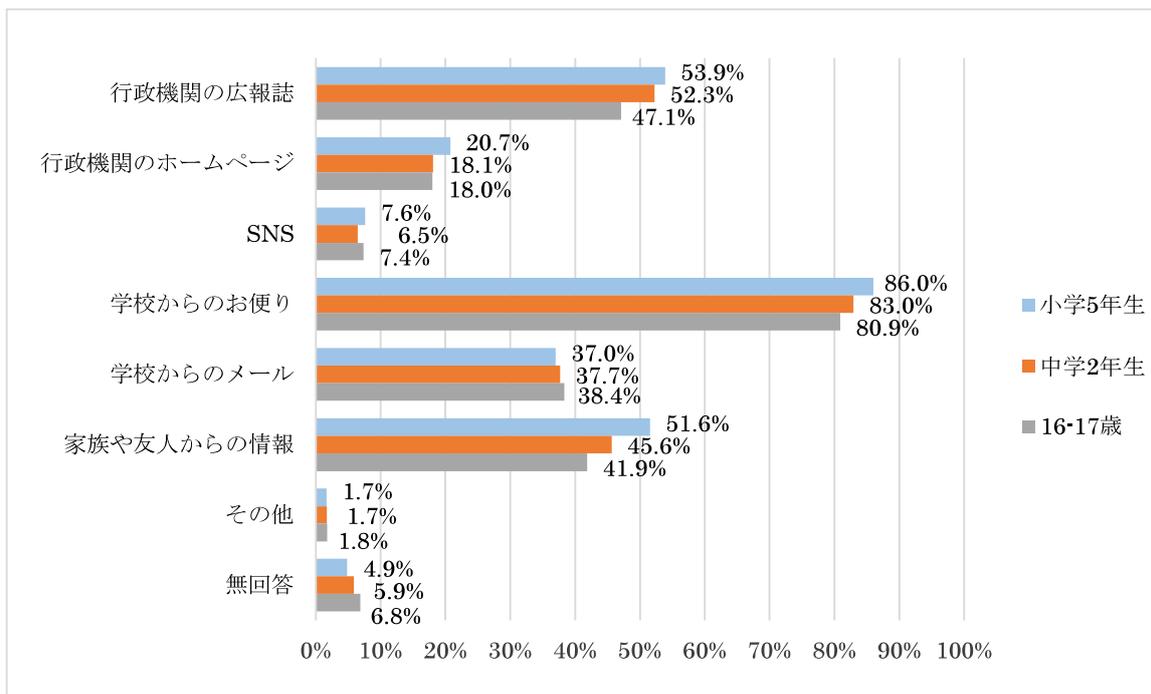
図表 6-1-7 支援サービスの利用意向：年齢層別



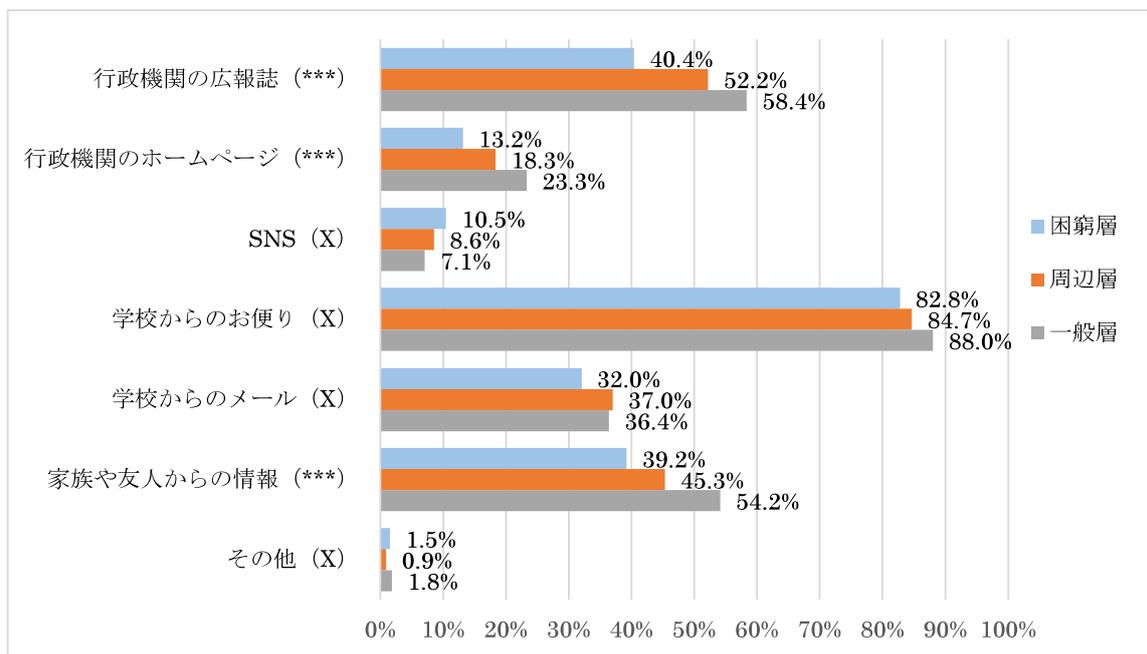
※居場所事業…小学校高学年も利用できる児童館や学童クラブ、中学生以上の子供が自由に時間を過ごせる場所など

(2)情報の受け取り方法

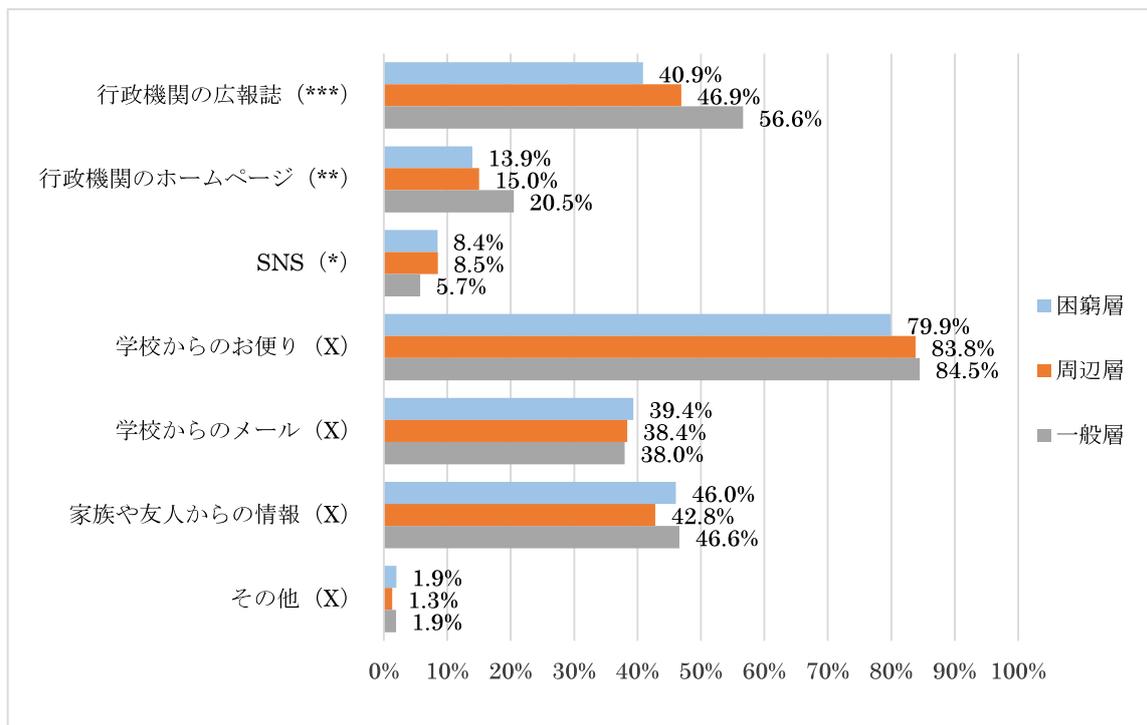
図表 6-2-1 子供の施策に関する情報の受け取り方法



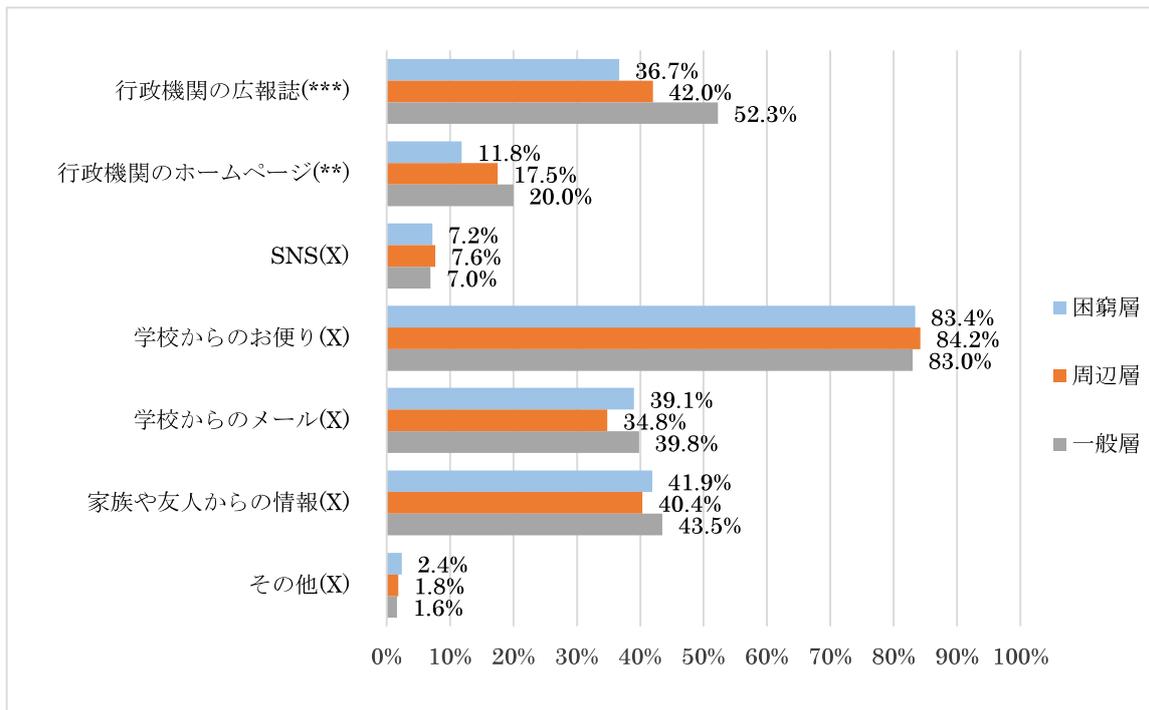
図表 6-2-2 情報の受け取り方法:生活困難度別(小学 5 年生)



図表 6-2-3 情報の受け取り方法:生活困難度別(中学 2 年生)

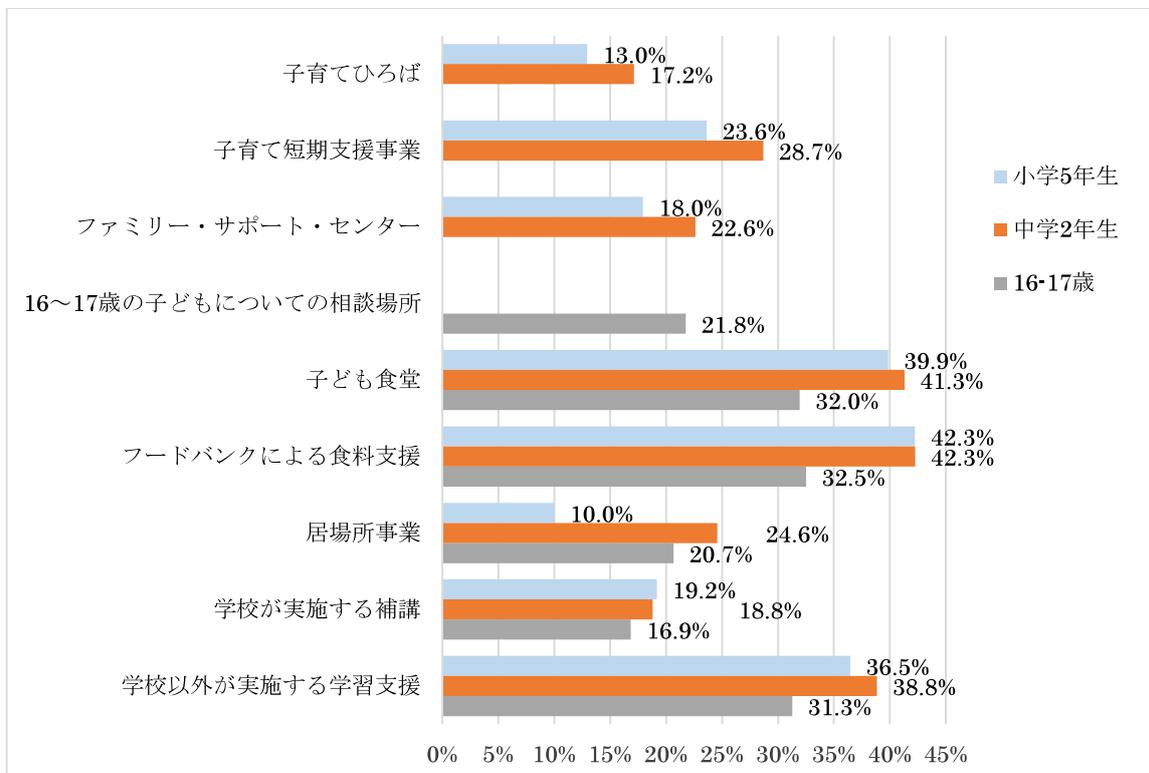


図表 6-2-4 情報の受け取り方法:生活困難度別(16-17 歳)



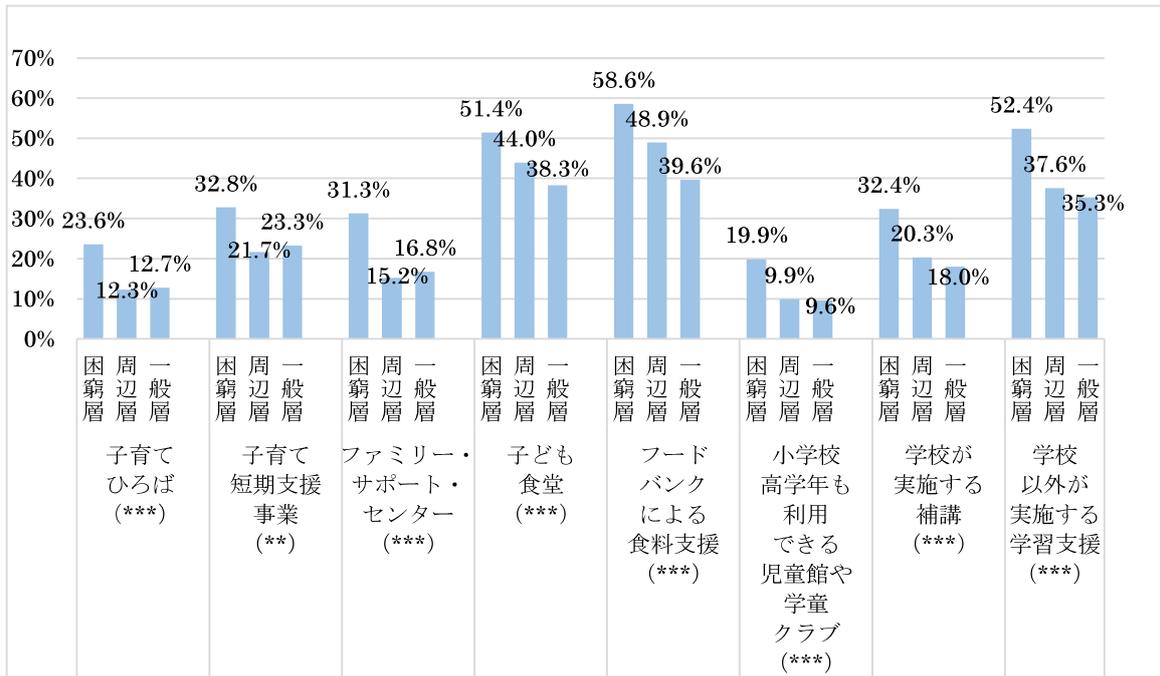
(3)支援サービスの利用状況・認知状況・利用意向

図表 6-3-1 支援サービスの非認知による不利用率:年齢層別

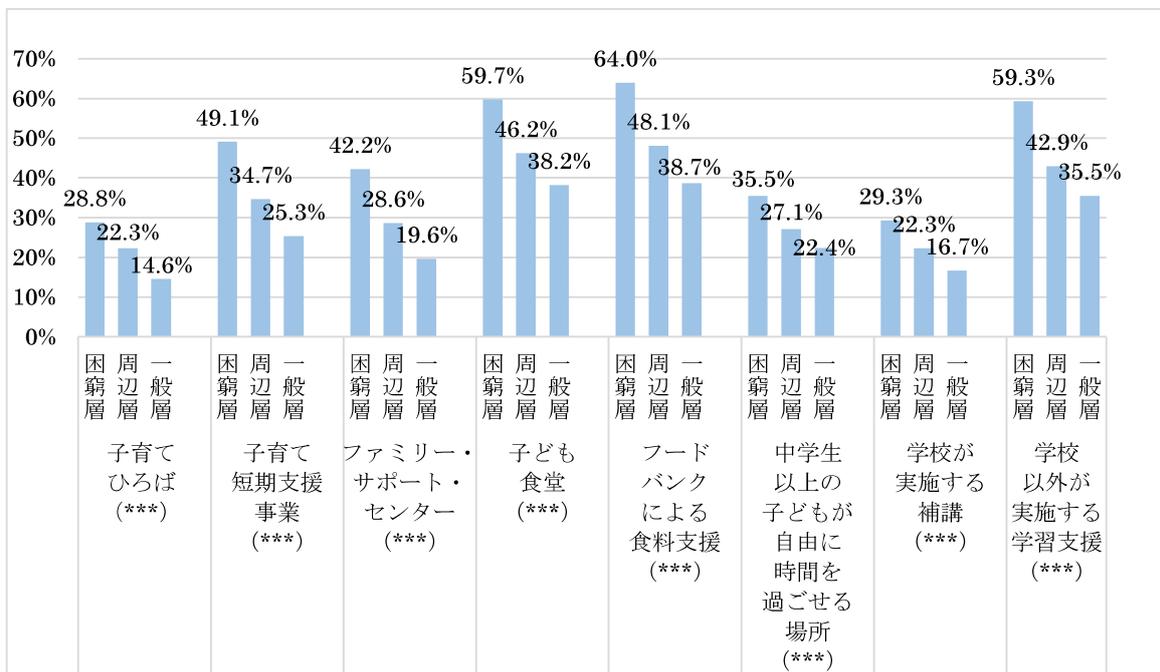


※居場所事業…小学校高学年も利用できる児童館や学童クラブ、中学生以上の子供が自由に時間を過ごせる場所など

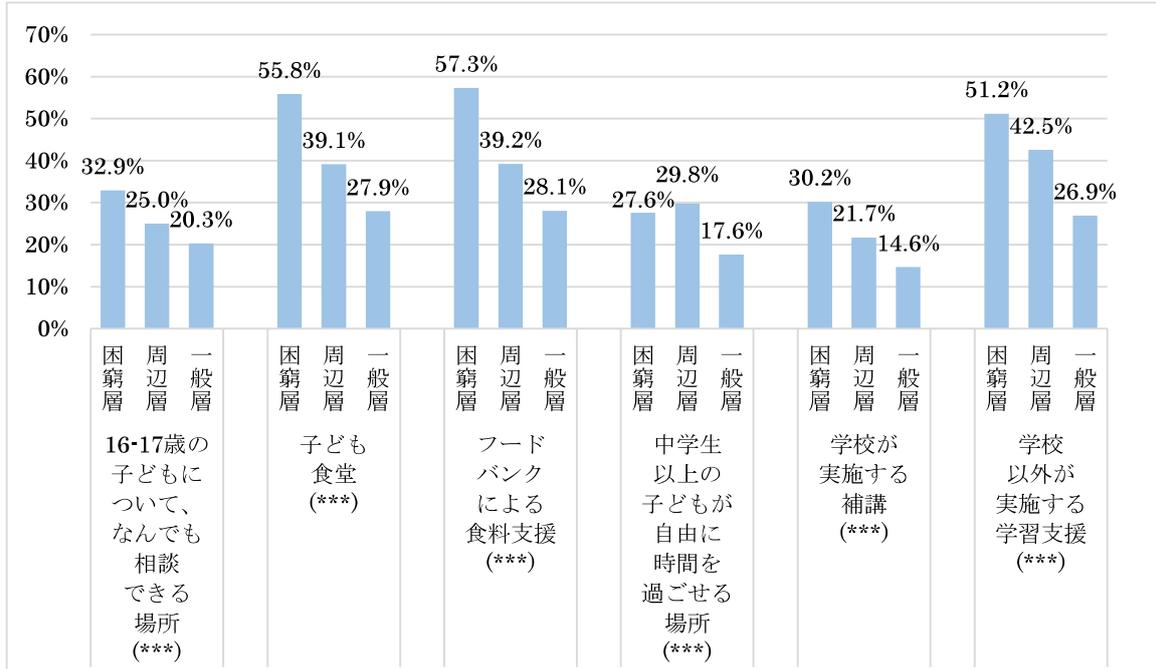
図表 6-3-2 支援サービスの非認知による不利用率:生活困難度別(小学 5 年生)



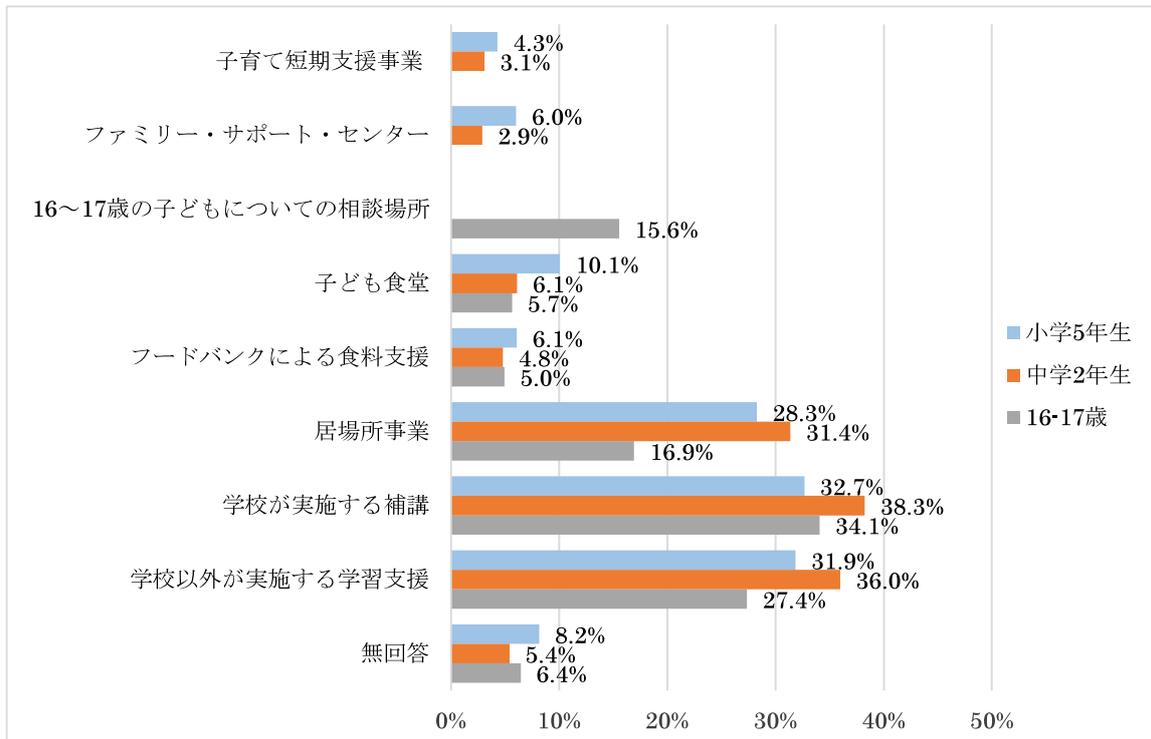
図表 6-3-3 支援サービスの非認知による不利用率:生活困難度別(中学 2 年生)



図表 6-3-4 支援サービスの非認知による不利用率:生活困難度別(16-17 歳)

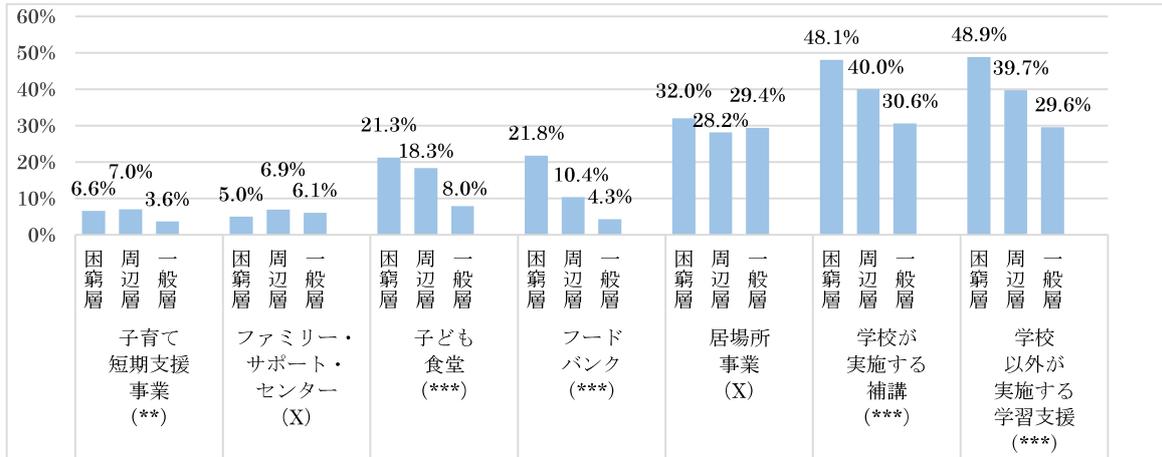


図表 6-3-5 支援サービスの利用意向:年齢層別



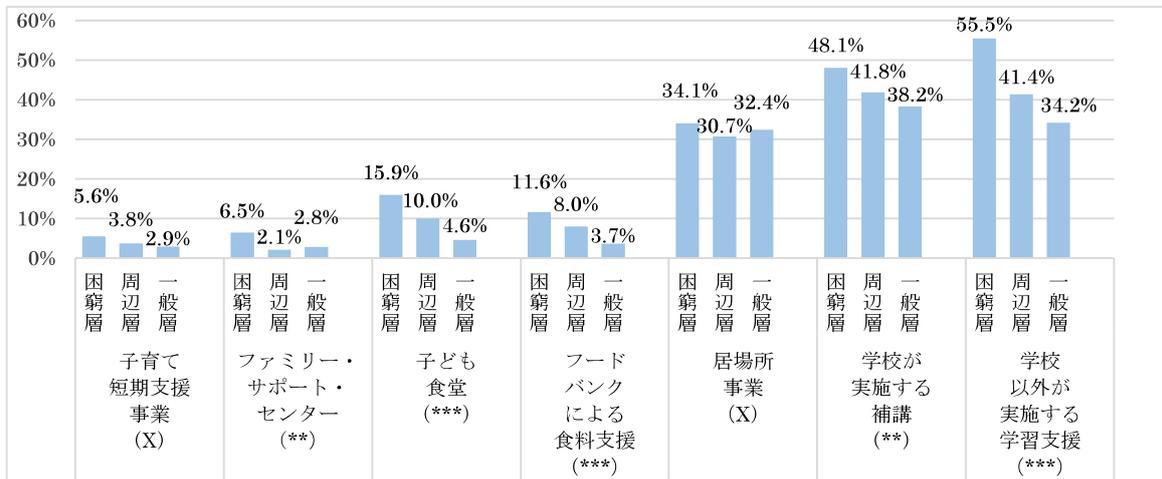
※再掲(=図表 6-1-7)

図表 6-3-6 支援サービスの利用意向：生活困難度別(小学5年生)



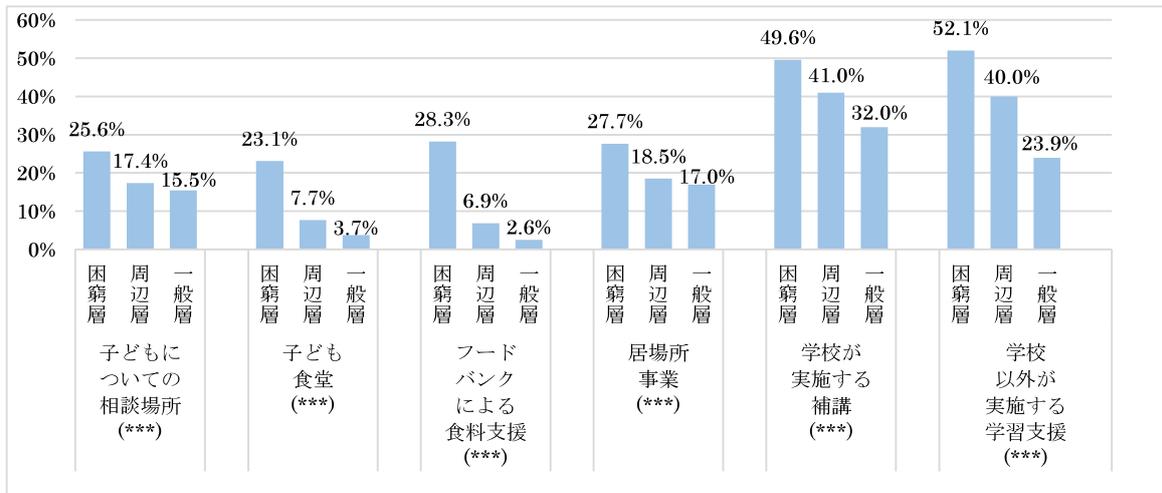
※居場所事業…小学校高学年も利用できる児童館や学童クラブなど

図表 6-3-7 支援サービスの利用意向：生活困難度別(中学2年生)



※居場所事業…中学生以上の子供が自由に時間を過ごせる場所など

図表 6-3-8 支援サービスの利用意向：生活困難度別(16-17歳)



※居場所事業…中学生以上の子供が自由に時間を過ごせる場所など

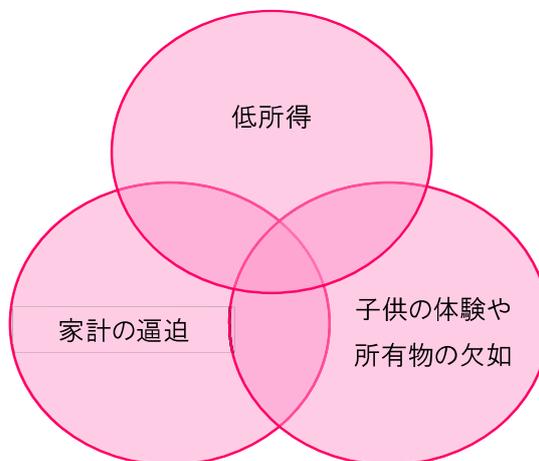
生活困難について(補足)

本調査では、子供の「生活困難」を以下の3つの要素に基づいて分類した。

① 低所得	③ 子供の体験や所有物の欠如
<p>等価世帯所得が厚生労働省「平成 27 年国民生活基礎調査」から算出される基準未満の世帯</p> <p><低所得基準> 世帯所得の中央値 427 万円 ÷ $\sqrt{\text{平均世帯人数}(2.49 \text{ 人}) \times 50\%}$ = 135.3 万円</p>	<p>子供の体験や所有物などに関する 15 項目のうち、<u>経済的な理由</u>で、欠如している項目が 3 つ以上該当</p> <ol style="list-style-type: none"> 海水浴に行く 博物館・科学館・美術館などに行く キャンプやバーベキューに行く スポーツ観戦や劇場に行く 遊園地やテーマパークに行く(*) 毎月おこづかいを渡す 毎年新しい洋服・靴を買う 習い事(音楽、スポーツ、習字等)に通わせる 学習塾に通わせる(又は家庭教師に来てもらう) お誕生日のお祝いをする 1年に1回くらい家族旅行に行く クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる 子供の年齢に合った本 子供用のスポーツ用品・おもちゃ 子供が自宅で宿題(勉強)をすることができる場所 <p>*16-17 歳は「友人と遊びに出かけるお金」</p>
② 家計の逼迫	
<p>経済的な理由で、公共料金や家賃を支払えなかった経験、食料・衣類を買えなかった経験などの 7 項目のうち、1 つ以上が該当</p> <ol style="list-style-type: none"> 電話料金 電気料金 ガス料金 水道料金 家賃 家族が必要とする食料が買えなかった 家族が必要とする衣類が買えなかった 	

◆生活困難層(困窮層・周辺層)、一般層

生活困難層	困窮層 + 周辺層
困窮層	2 つ以上の要素に該当
周辺層	いずれか1つの要素に該当
一般層	いずれの要素にも該当しない



生活困難層の割合

(1)生活困難層の割合

【年齢層別】

	小学 5 年生	中学 2 年生	16 - 17 歳
生活困難層	20.5%	21.6%	24.0%
困窮層	5.7%	7.1%	6.9%
周辺層	14.9%	14.5%	17.1%
一般層	79.5%	78.4%	76.0%

※端数処理の関係上、合計と一致しない場合がある。

【世帯タイプ別】

		年齢層	ふたり親 (二世帯)	ふたり親 (三世帯)	ひとり親 (二世帯)	ひとり親 (三世帯)
生活困難層	困窮層	小学 5 年生	4.0%	8.3%	12.7%	10.7%
		中学 2 年生	5.2%	3.9%	16.3%	22.0%
		16-17 歳	4.2%	3.8%	19.0%	16.2%
	周辺層	小学 5 年生	13.1%	17.8%	20.2%	38.2%
		中学 2 年生	12.7%	14.1%	22.9%	30.5%
		16-17 歳	15.4%	14.6%	22.9%	45.5%
一般層	小学 5 年生	82.9%	73.9%	67.1%	51.1%	
	中学 2 年生	82.1%	82.0%	60.8%	47.5%	
	16-17 歳	80.4%	81.6%	58.1%	38.3%	

(2)「低所得」「家計の逼迫」「子供の体験や所有物の欠如」の割合

	小学 5 年生	中学 2 年生	16-17 歳
低所得	11.6%	11.6%	11.0%
家計の逼迫	8.1%	7.7%	7.4%
子供の体験や所有物の欠如	7.8%	11.8%	14.2%

集計方法

- すべての集計は、自治体、年齢層、性別の回収率にてウェイトを付けて集計している。
- 本報告において、クロス表の掲載の際には、 χ 二乗検定によって分布が統計的に有意であるかを検定している。その結果、1%水準で有意である場合は表頭に「***」、5%水準で有意の場合は「**」、10%水準で有意の場合は「*」、有意でない場合は「X」を付している。
- 世帯タイプは、保護者票の子供と父親、母親それぞれの同居状況から判別している。そのため、各制度や公的統計の定義とは必ずしも一致しない。
- 端数処理の関係上、合計と一致しない場合がある。
- 本報告の数値は速報値のため、今後公表される数値とは異なる場合がある。

子供の生活実態調査【若者(青少年)調査】

結果の概要<中間のまとめ>

東京都では、今後の子供・子育て支援施策の参考とするため、子供と子育て家庭の生活状況などに関する「子供の生活実態調査」を実施しました。15～23歳の若者(青少年)を対象とした調査結果の概要(中間のまとめ)は、以下のとおりです。

調査の概要

- (1) 調査対象 都内の3自治体(新宿区・足立区・八王子市)に在住の15～23歳の若者(青少年)*本人とその保護者
*平成28年4月1日から平成29年3月31日の間に16～23歳になる者
- (2) 調査対象数 2,200世帯
- (3) 抽出方法 住民基本台帳による層化二段無作為抽出
- (4) 調査方法 訪問留置訪問回収法
- (5) 有効回答数 若者 1,056票(有効回答率48.0%)
保護者 1,022票(有効回答率46.5%)
- (6) 調査期間 平成28年5月14日から6月13日まで

【本調査における「低所得」の定義】

等価可処分所得^{※1}が厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」から算出される基準^{※2}未満の世帯を「低所得層」と定義する。また、「低所得層」に属する若者のいる世帯の割合を「低所得率^{※3}」とする。

※1 世帯の可処分所得(収入から税金・社会保険料等を除いたいわゆる手取り収入)を世帯人数の平方根で割って調整した所得

※2 厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」から算出された「等価可処分所得」の中央値の50%である122万円(所得は平成24年値)に、平成24年から26年の平均所得の伸び率を乗じた122.5万円

※3 世帯所得をカテゴリー値で聞いていること、所得税、住民税、社会保険料などを詳しく聞いていないことなどの理由から、厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」を用いて算出されている「子供の貧困率」(16.3%)と比較できるものではない

主な調査結果

1 生活困窮の状況

(1)所得の状況

若者の属する世帯の約 15%が低所得層

[低所得層の割合]

- 若者の属する世帯の 14.9%が低所得層である(図表 1-1)。世帯タイプ別では、「ひとり暮らし」の若者の約 6 割が低所得層であり、他の世帯タイプに比べ割合が高くなっている(図表 1-2)。

(2)公共料金等の滞納経験

金銭的な理由から、公共料金や家賃の支払いができなかった世帯は、低所得層とひとり親世帯に多い

[公共料金や家賃の支払い状況(過去1年間)]

- 全体の約 3%から約 5%の世帯において、公共料金や家賃の滞納経験があり(図表 1-3)、この割合は低所得層で高くなっている(図表 1-4)。世帯タイプ別では、ひとり親世帯において割合が高く、三世帯世帯とひとり暮らし世帯において低くなっている(図表 1-5)。

(3)所有物の状況

低所得層の若者の勉強に必要な場所や手段が確保されていない

[所有物の状況]

- 若者が「持ちたいが、持っていない」とした項目のトップ3は、「自分に投資するお金」「自分の部屋」「インターネットにつながるパソコン」である(図表 1-6)。
低所得層の若者の約 2 割が「自分の部屋」「インターネットにつながるパソコン」、約1割が「家の中で勉強ができる場所」を「持ちたいが、持っていない」状況にある(図表 1-7)。
「インターネットにつながるパソコン」「家の中で勉強ができる場所」については、特に 15-18 歳の低所得層において、「持ちたいが、持っていない」割合が非低所得層に比べて高くなっている(図表 1-8)。

2 食事・栄養の状況

低所得層の若者の約 5%が「ほぼ毎日1食」、約 30%が「ほぼ毎日2食」で、野菜や果物を食べる機会が少ない

【食事の回数】

- 若者の 1.8%は、平日の食事回数が「ほぼ毎日1食」であり、24.9%が「ほぼ毎日2食」である(図表 2-1)。19-23 歳男性においては、34.9%が「ほぼ毎日2食」である(図表 2-1)。低所得層の若者では、5.3%が「ほぼ毎日1食」であり、29.4%が「ほぼ毎日2食」である(図表 2-2)。ひとり暮らしの若者の 11.8%が、平日3食食べない主な理由として、「食費を節約」をあげている(図表 2-3)。

【食品群ごとの摂取頻度】

- 若者の 18.3%が野菜を毎日摂取しておらず、低所得層ではこの率は 29.1%である(図表 2-4、5)。

3 健康

経済的な理由によって医療受診を控えている若者がいる

【公的健康保険の加入状況】

- 低所得層とひとり親世帯の若者の 1 割弱は、自分が公的健康保険に「未加入」と答えている(図表 3-1)。

【医療の受診抑制】

- 若者の約 4%が、「あなたは、自分が必要と思う時に、医者(歯医者)にかかることができますか」という問いに対し、「できないことがある(経済的理由)」と答えている(図表 3-2)。低所得層とひとり親世帯では、この割合が約1割である(図表 3-3,4)。

4 進学状況

(1) 進学した高等学校の種類

低所得層の若者の約 55%は公立高校に、約 42%は私立高校に進学している

[進学した高等学校の種類・理由]

- 所得階層による高校の設置主体(公立、私立など)の有意差は確認されず、高校選択に所得は大きな影響を与えていない(図表 4-1)。高等学校に進学した低所得層の若者の 41.9%は、私立高校に進学している(図表 4-1)。高校選択の理由についても、「私立高校の方が教育の質が高いと思った」「公立高校の入試に合格しなかった」には所得階層による有意差は確認されていない(図表 4-2)。なお、課程についてみると、低所得層の方が全日制以外の学校を選んでいる割合が高い(図表 4-3)。

(2) 高等学校卒業後の進路

低所得層の若者は、非低所得層の若者より大学に進学する割合が低い

[高等学校卒業後に進学した学校の種類]

- 低所得層の若者の約 3 割が短大・専門学校に進学している(図表 4-4)。また、大学に進学する割合が非低所得層と比べて低い。国公立の大学に進学する割合は、低所得層より非低所得層が高い(図表 4-4)。

(3) 今後の進学希望

現在、学生でない若者の約 2 割から約 3 割は、将来進学したいと考えている

[今後の進学希望]

- 現在、学生でない若者のうち、19-23 歳の約 2 割、また、サンプルは少ないものの 15-18 歳の約 3 割は、今後、進学したいと考えている(図表 4-5)。

5 学校生活での困難

若者の4割弱は「学校をやめたくなるほど」悩んだことがあり、この割合は低所得層で高い

[学校生活の悩み]

- 若者の36.4%は、「学校をやめたくなるほど、悩んだことがある」としており(図表 5-1)、この割合は特に19-23歳の女性において高い(図表 5-2)。所得階層別、世帯タイプ別には、低所得層とひとり親世帯で悩みを抱えている割合が高くなっている(図表 5-3,4)。

[悩みの理由]

- 15-18歳について、悩みの理由をみると、学業については29.8%(図表 5-5)、人間関係については14.7%(図表 5-6)、心身の健康については12.3%(図表 5-7)、経済的な理由は7.0%(図表 5-8)となっている。経済的な理由による悩みは、低所得層とひとり親世帯の若者に多い(図表 5-9,10)。

6 就労状況と就労にかかわる困難

若者の約3割が就労上のトラブルを経験している

[就労状況]

- 就労(アルバイトを含む)している若者の割合は、15歳で8.0%であり、年齢が上がるとともに高くなる傾向にある。18歳では52.6%と過半数となり、19歳で61.1%、20歳で76.9%、21歳で81.5%、22歳で78.6%となる(図表 6-1)。19-23歳の非正規雇用(アルバイトをしている学生を除く)の割合は、非低所得層では8.9%であるが、低所得層では17.5%となっている(図表 6-2)。

[職場でのトラブル経験]

- 若者の29.3%(勤労学生の43.3%)が、職場で何らかのトラブルを経験している(図表 6-3)。具体的な内容を見ると、「短期間で辞めていく人が多い」(15.2%)が最も多くなっており、「直前まで勤務スケジュールがわからない」(13.2%)、「休憩時間を取らせてもらえないことがある」(10.0%)、「長時間労働を日常的に強いられる」(9.3%)といったトラブルを経験している(図表 6-4)。

7 社会的孤立

若者の約 5%は、他の人とのあいさつや会話が 2～3 日に 1 回以下

【会話の頻度】

- 若者の 5.3%が電話、メール、LINEも含めて、毎日他の人とあいさつや会話をしておらず、2～3 日に 1 回以下となっている(図表 7-1)。特に、19-23 歳の低所得層の男性では、他者との会話が 4～7 日に 1 回以下の若者が 1 割弱存在する(図表 7-2)。

8 精神状況

低所得層の若者は、非低所得層の若者に比べて幸福度が低い傾向にある

【幸福度】

- 非低所得層では、幸福度が「高い」(上位 3 段階の 8-10 を選択)若者は 50.5%であるが、低所得層においては 33.6%である(図表 8-1)。また、幸福度が「低い」(下位 3 段階の 0-3 を選択)若者は、非低所得層では 4.3%であるが、低所得層では 11.8%となっている(図表 8-1)。

世帯タイプ別では、ふたり親世帯と三世帯世帯の若者の幸福度上位 3 段階(8-10)が約 5 割であるのに対し、ひとり暮らしの若者は 29.4%、ひとり親世帯の若者は 41.4%と少なくなっている(図表 8-2)。

9 親の状況

若者の保護者のうち、約 2 割が抑うつ傾向にある

【抑うつ傾向】

- 保護者のうち、19.5%が抑うつ傾向を示した(図表 9-1)。低所得層は非低所得層よりも抑うつ傾向がある保護者の割合が高く、世帯タイプ別にはひとり親世帯の保護者の抑うつ傾向の割合が高くなっている(図表 9-2)。父親・母親を就労形態別にみると、非正規雇用の父親の 24.3%、正規雇用の母親の 28.9%が抑うつ傾向にある(図表 9-3)。

10 支援制度の利用と周知

(1) 支援制度の認知度

ひとり親世帯における支援制度の認知度が低い

[支援制度を知らない割合(ひとり親世帯対象の制度)]

- ひとり親世帯を対象とする制度であるにもかかわらず、ひとり親世帯の保護者の6.7%が児童扶養手当を、6.4%が児童育成手当を、24.6%が母子及び父子福祉資金を知らない(図表 10-1)。

(2) 支援制度を認知していない保護者の相談先

約1割の保護者が「相談する相手や場所がない」

[支援制度を一つも知らないとした保護者が困った時の相談相手]

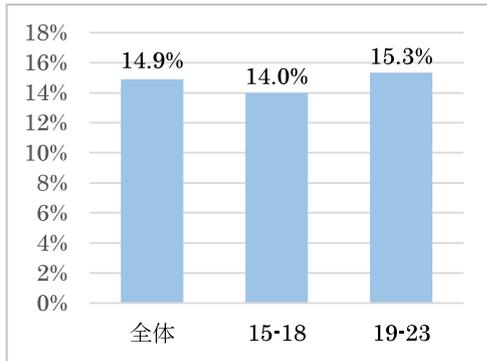
- 公的支援制度を認知していない保護者の相談先は「家族・親族」が最も多く49.7%、次いで「友人・知人」が12.4%となっている(図表 10-2)。また、10.5%が「相談する相手や場所がない」と答えている(図表 10-2)。

図表

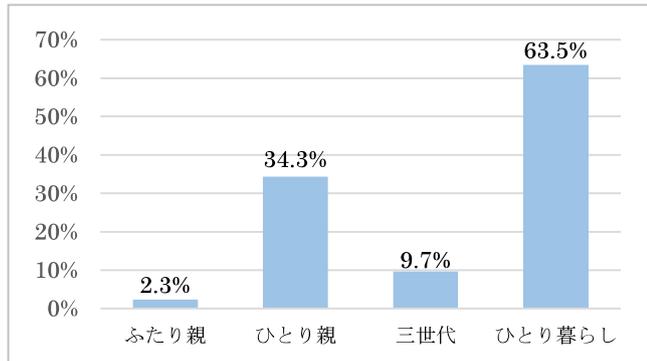
1 生活困窮の状況

(1) 所得の状況

図表 1-1 低所得率：年齢層別(X)

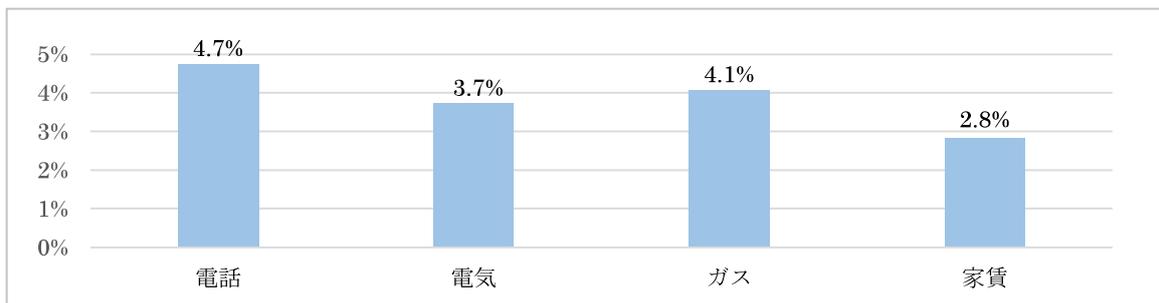


図表 1-2 低所得率：世帯タイプ別 (***)



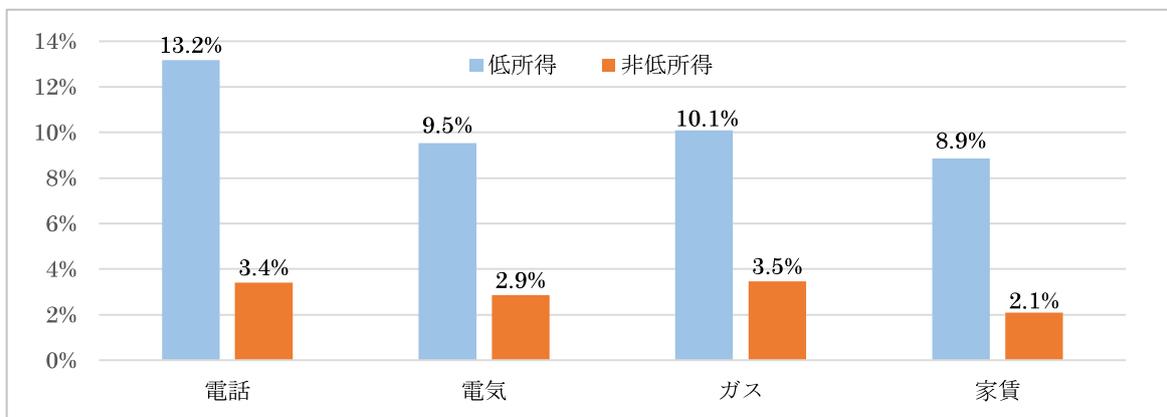
(2) 公共料金等の滞納経験

図表 1-3 公共料金等の滞納経験



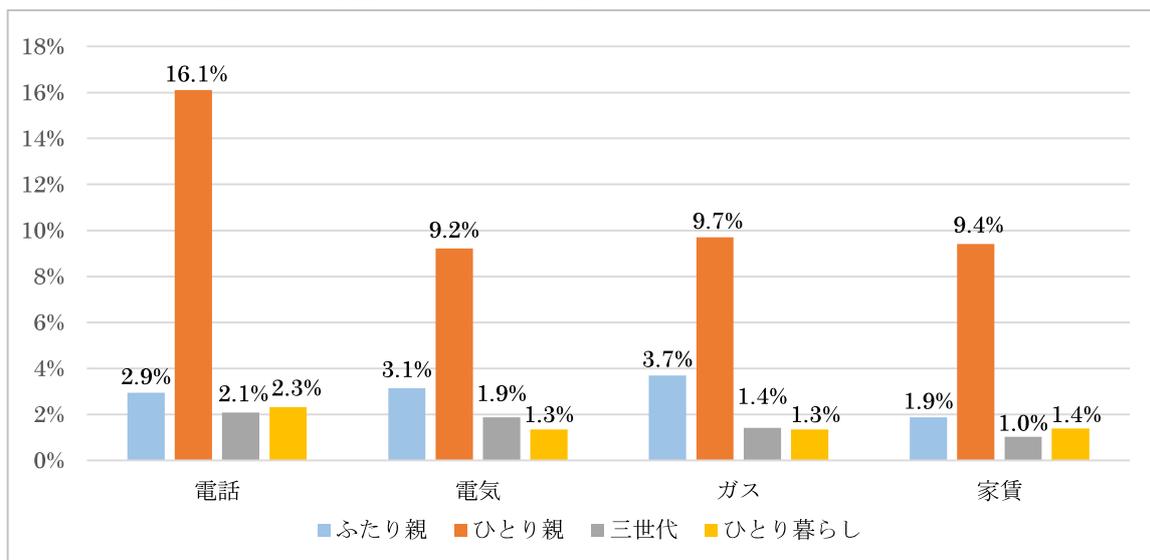
※ 保護者票および若者票(一人暮らしの場合)の情報から作成

図表 1-4 公共料金等の滞納経験：所得階層別(全て***)



※ 保護者票および若者票(一人暮らしの場合)の情報から作成

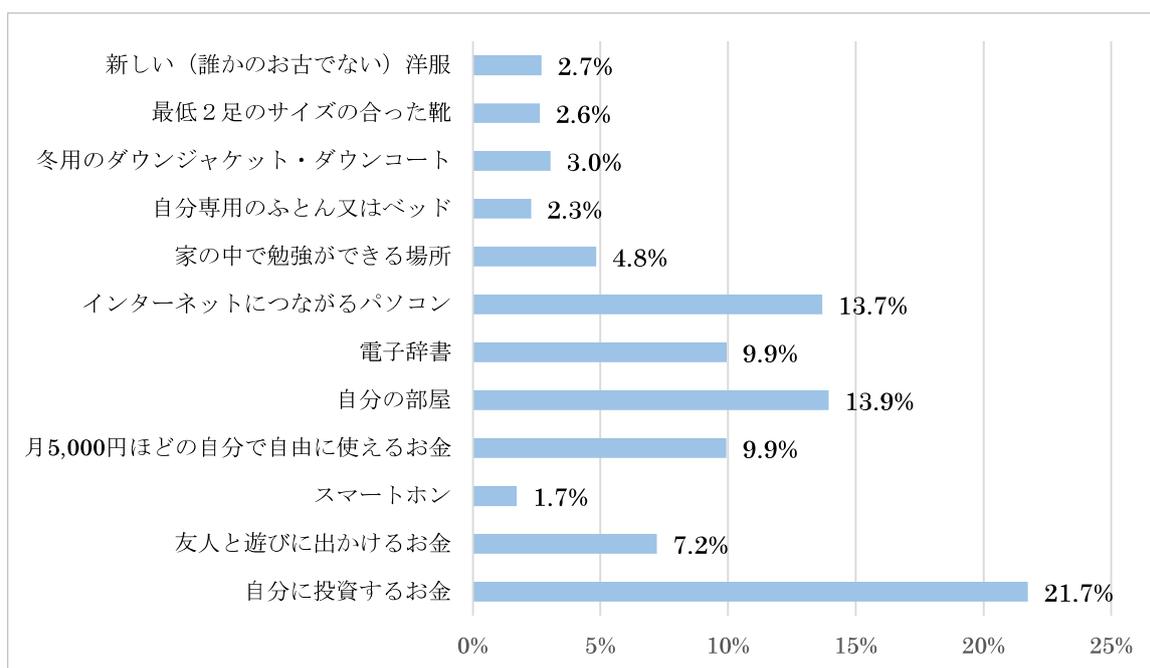
図表 1-5 公共料金等の滞納経験:世帯タイプ別(全て***)



※ 保護者票および若者票(一人暮らしの場合)の情報から作成

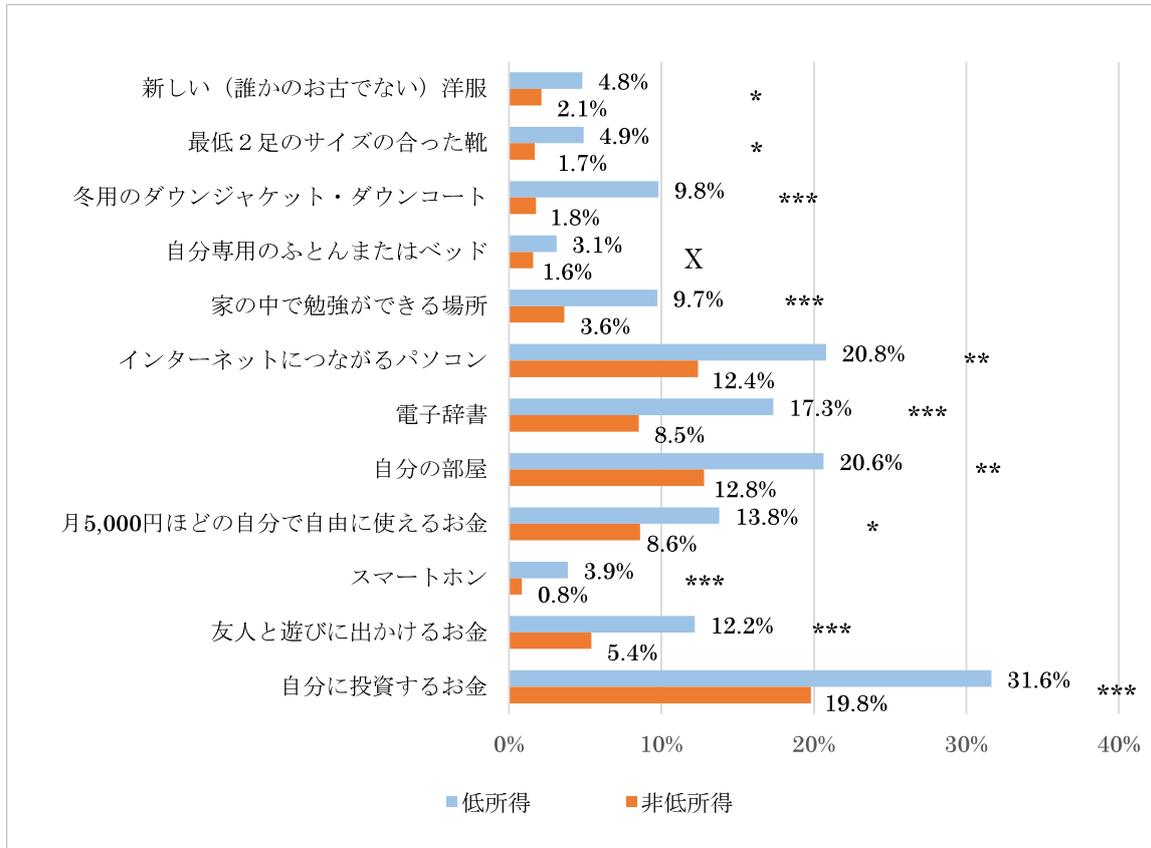
(3)所有物の状況

図表 1-6 所有物の状況(持ちたいが、持っていない割合※)



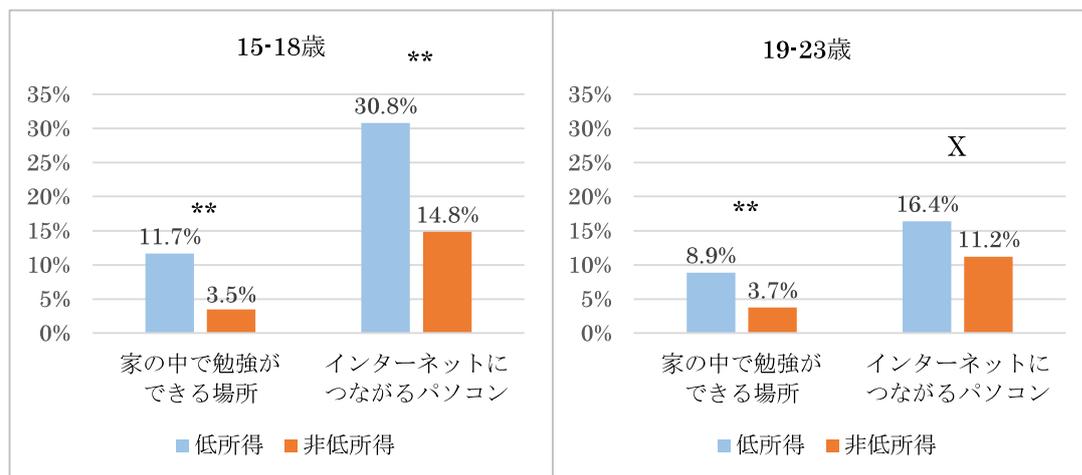
※「持ちたくない(いらない)」「無回答」を分母から除いた割合

図表 1-7 所有物の状況(持ちたいが、持っていない割合※):所得階層別



※「持ちたくない(いらない)」「無回答」を分母から除いた割合

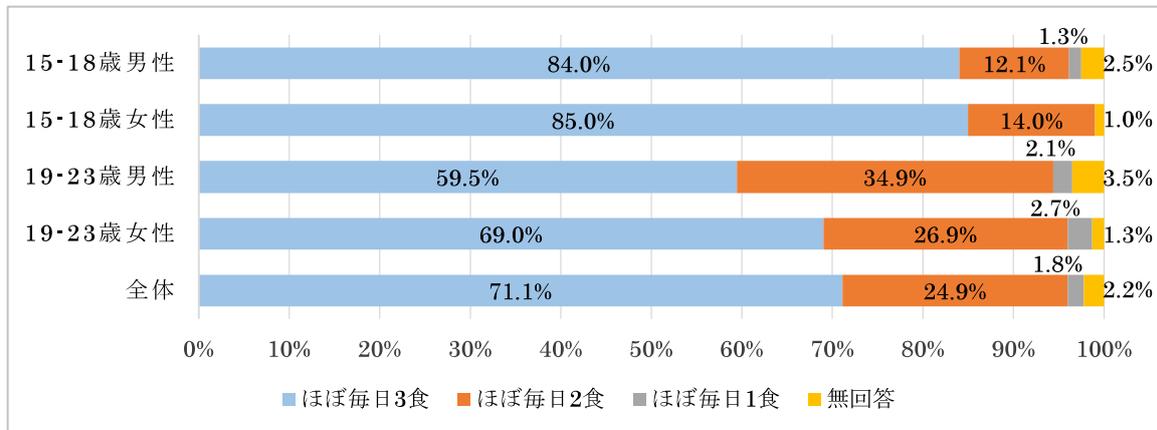
図表 1-8 所有物の状況(持ちたいが、持っていない割合※):所得階層別、年齢層別



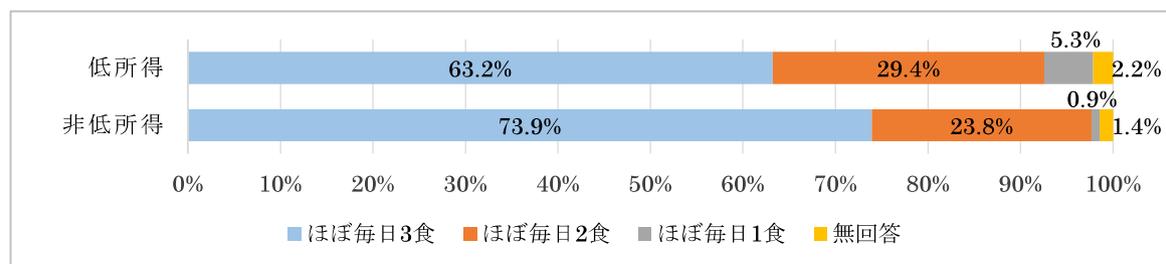
※「持ちたくない(いらない)」「無回答」を分母から除いた割合

2 食事・栄養の状況

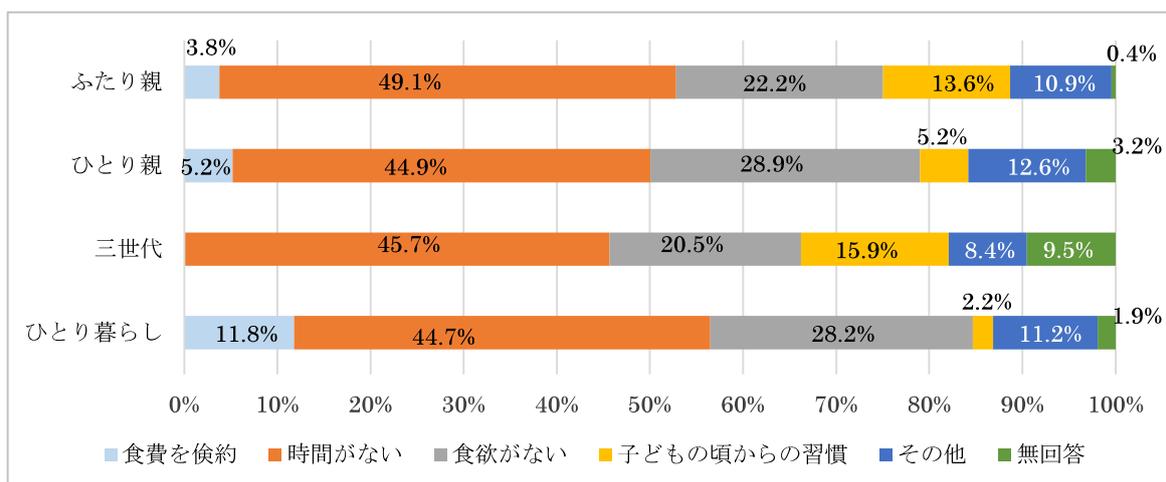
図表 2-1 平日(学校や仕事のある日)の食事の回数:年齢層、性別(***)



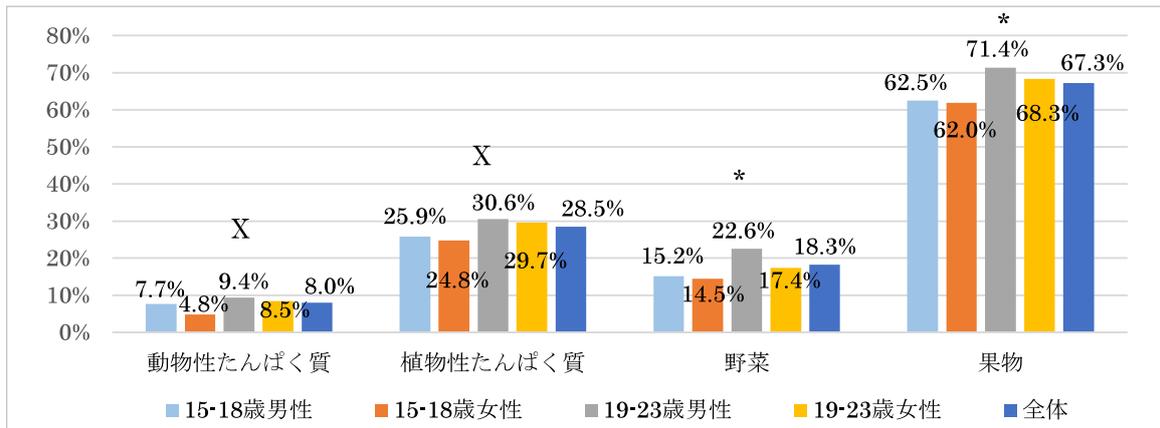
図表 2-2 平日(学校や仕事のある日)の食事の回数:所得階層別(***)



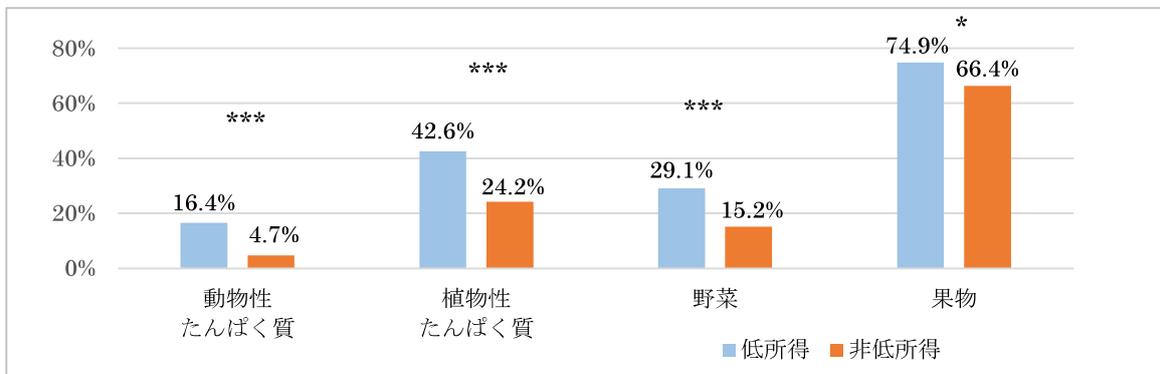
図表 2-3 平日に3食食べない主な理由:世帯タイプ別(X)



図表 2-4 1日1回摂取していない割合：年齢層・性別

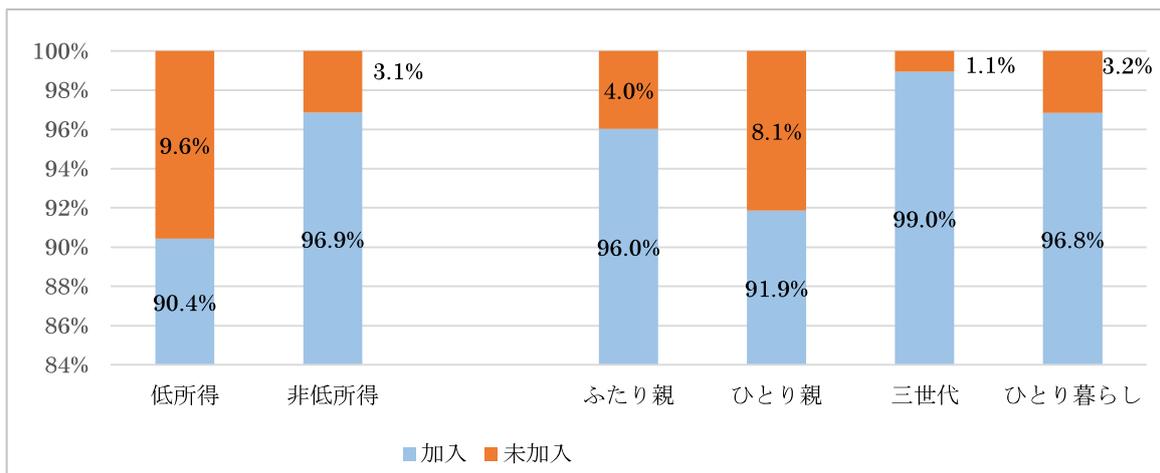


図表 2-5 1日1回摂取していない割合：所得階層別



3 健康

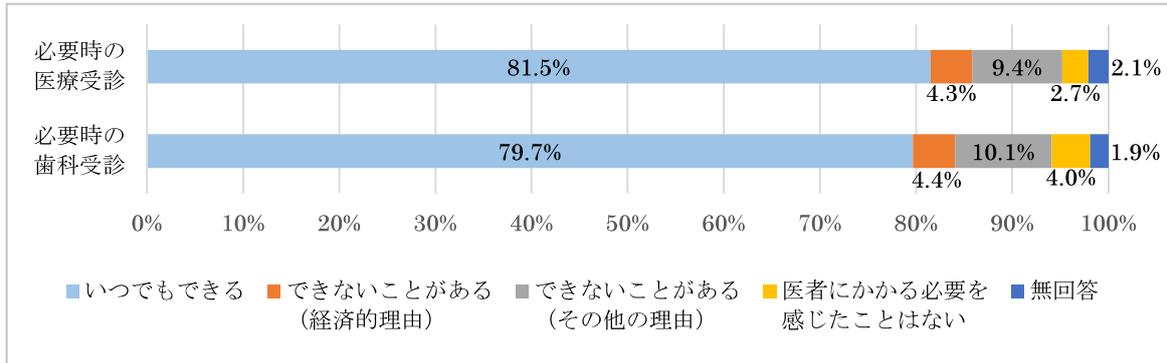
図表 3-1 公的健康保険の加入状況(本人回答による)：所得階層別(***)、世帯タイプ別(*)



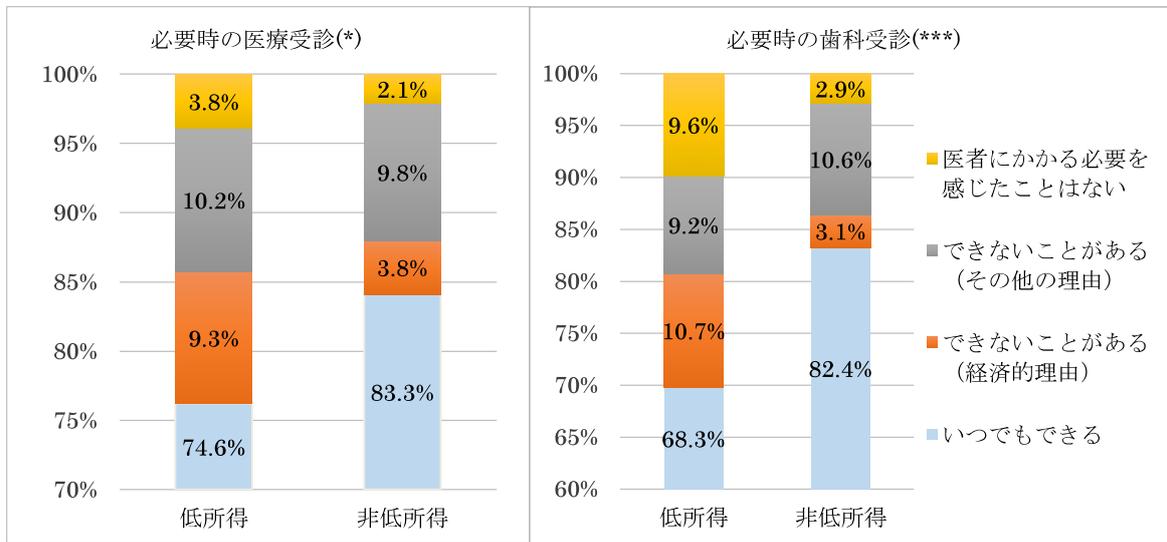
※加入・未加入の状況は、本調査対象者の回答によるものである。

※「加入」は、「自分または家族の国民健康保険に加入している」、「自分または家族の職場からの健康保険に加入している」、「扶養家族として、親の職場からの健康保険に加入している」と回答した割合。「未加入」は、「何も加入していない」と回答した割合。(無回答を分母から除く)

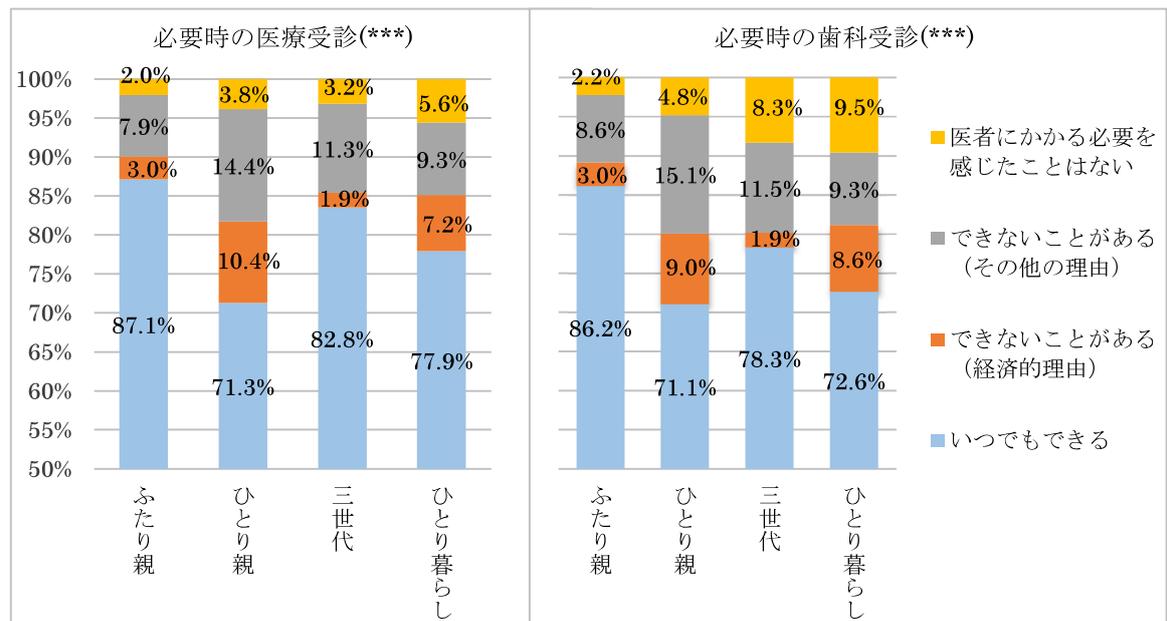
図表 3-2 必要時の医療受診・歯科受診



図表 3-3 必要時の医療受診・歯科受診：所得階層別



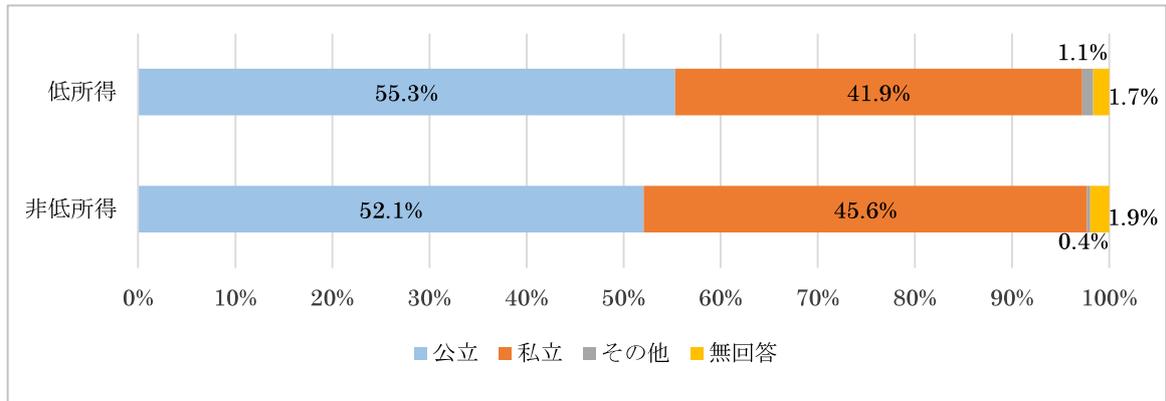
図表 3-4 必要時の医療受診・歯科受診：世帯タイプ別



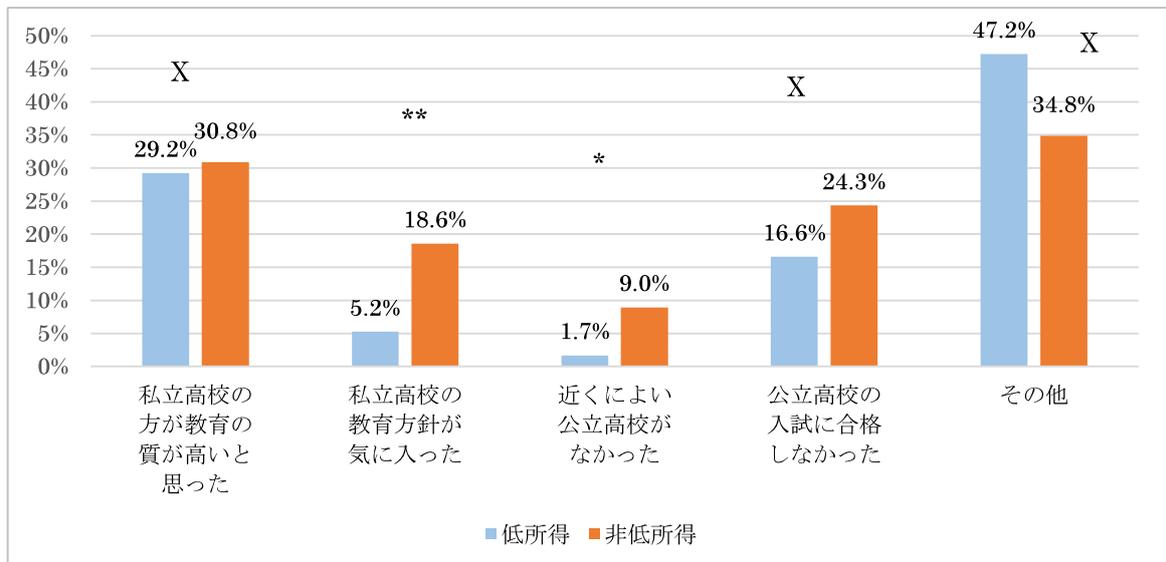
4 進学状況

(1) 進学した高等学校の種類

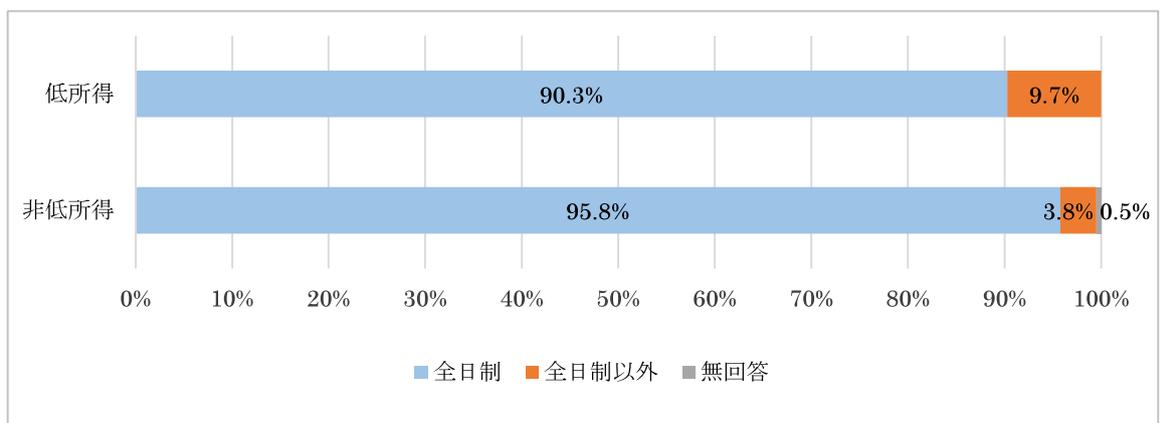
図表 4-1 進学した高等学校の種類(設置者):所得階層別(X)



図表 4-2 私立の高等学校に進学した理由(複数回答):所得階層別

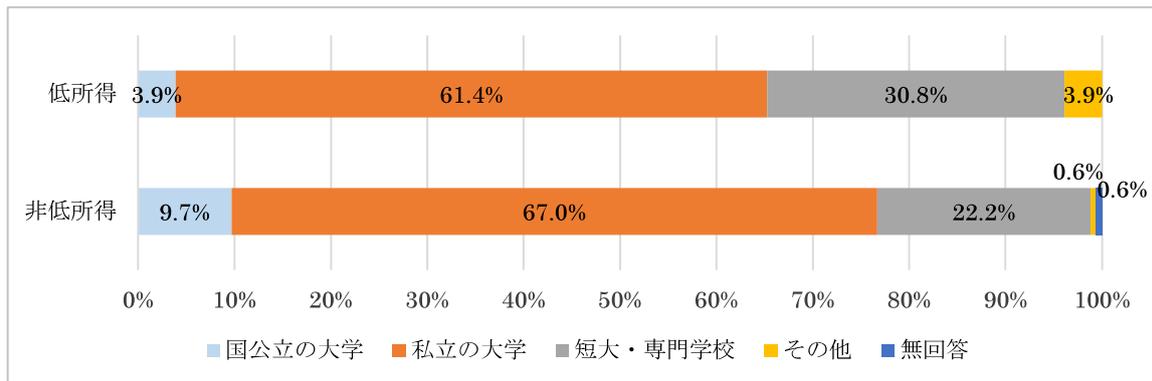


図表 4-3 進学した高等学校の種類(課程):所得階層別(**)



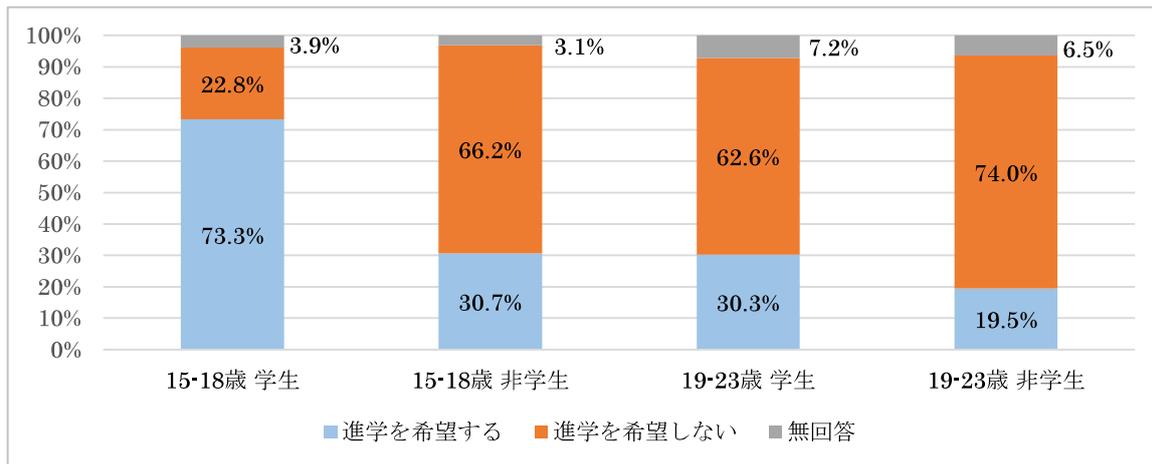
(2)高等学校卒業後の進路

図表 4-4 高等学校卒業後に進学した学校の種類:所得階層別(*)



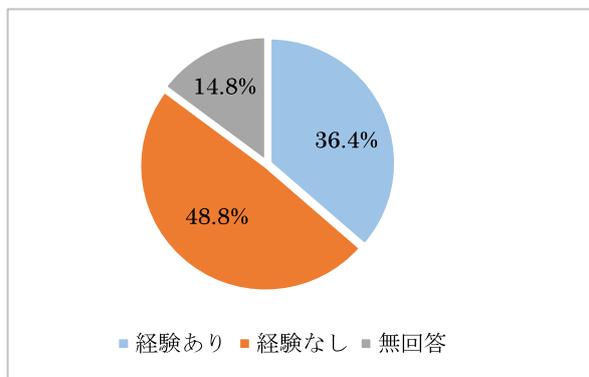
(3)今後の進学希望

図表 4-5 今後の進学希望 (***)

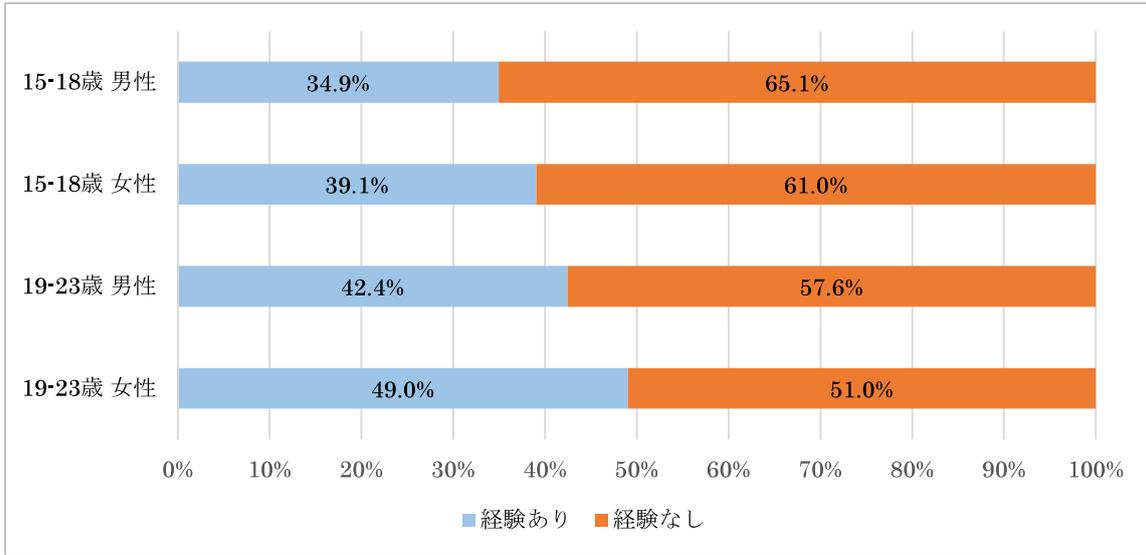


5 学校生活での困難

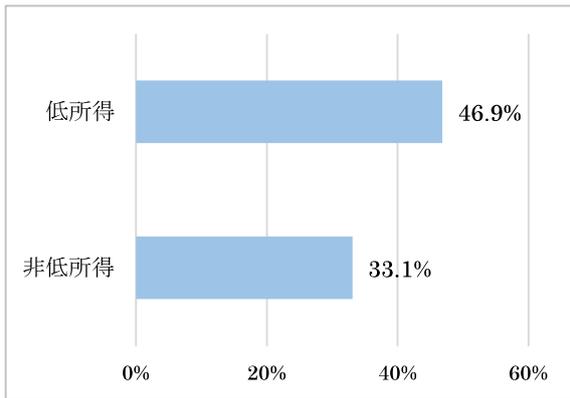
図表 5-1 学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合



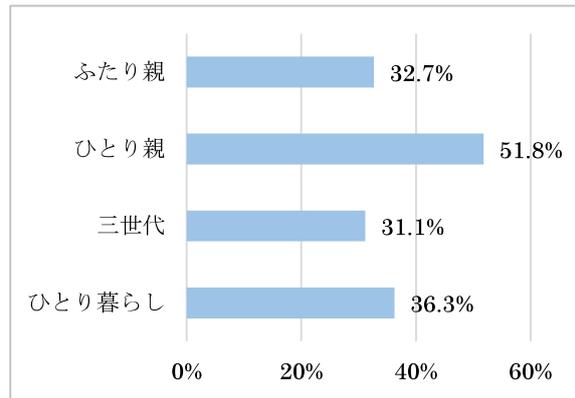
図表 5-2 学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合：年齢層別・性別(**)



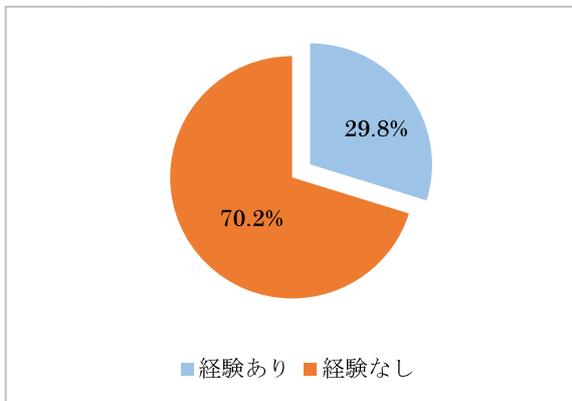
図表 5-3
学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合：
所得階層別(***)



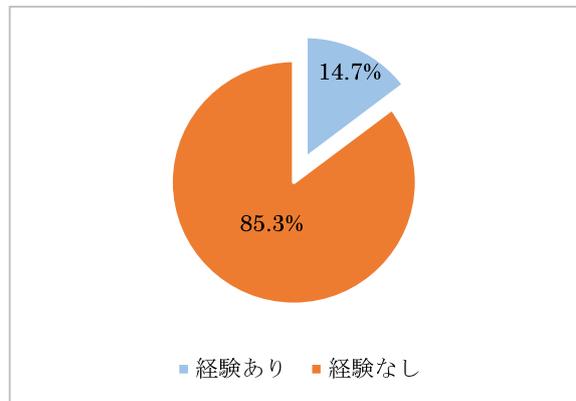
図表 5-4
学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合：
世帯タイプ別(***)



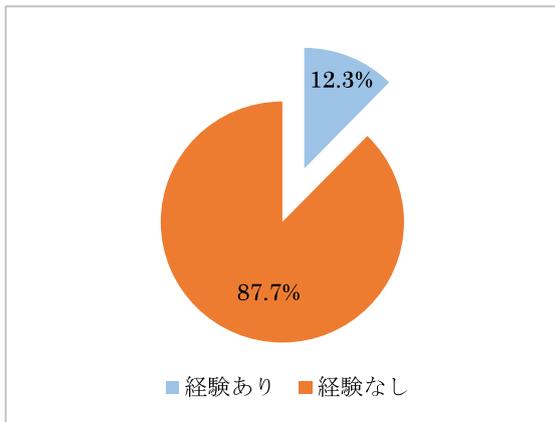
図表 5-5
学業の理由で、学校をやめたいくなるほど悩んだこと
がある割合(15-18 歳)



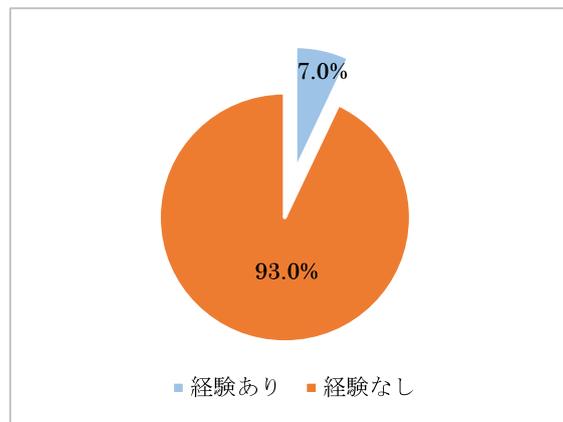
図表 5-6
人間関係の理由で、学校をやめたいくなるほど悩んだ
ことがある割合(15-18 歳)



図表 5-7
心身の健康の理由で、学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合(15-18 歳)

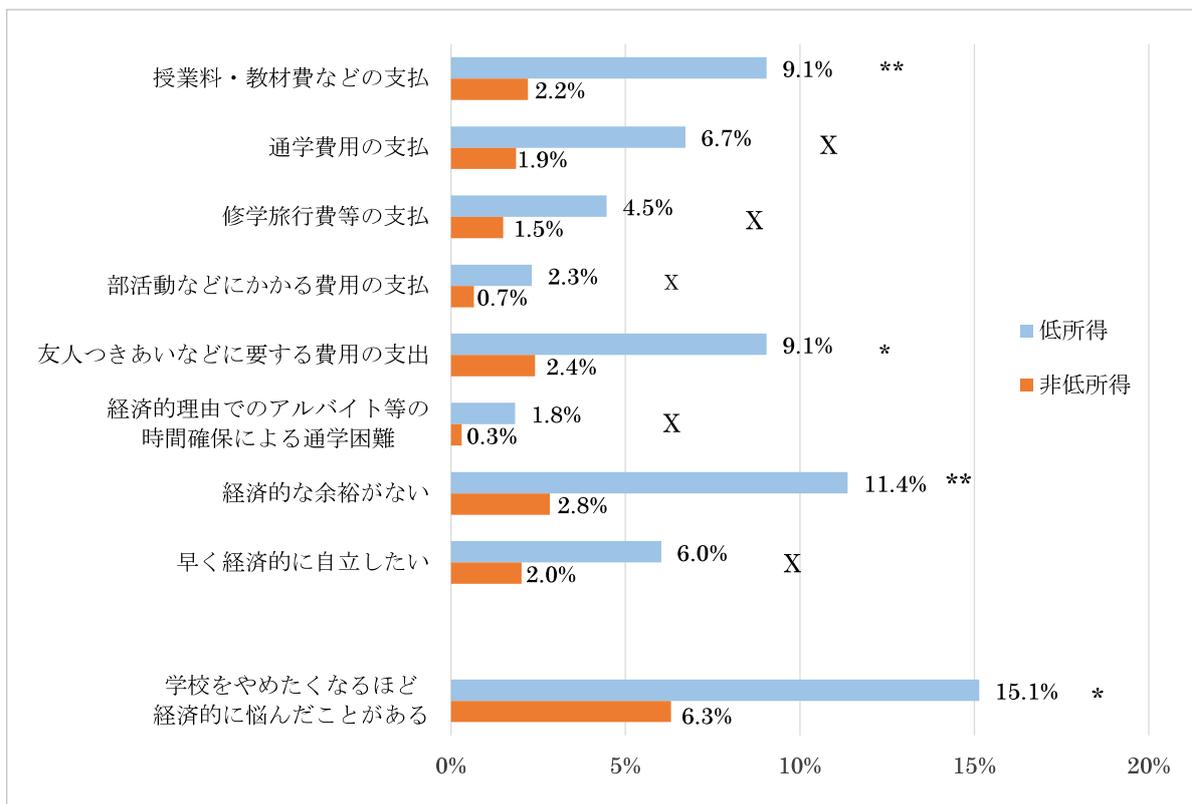


図表 5-8
経済的な理由で、学校をやめたいくなるほど悩んだことがある割合(15-18 歳)



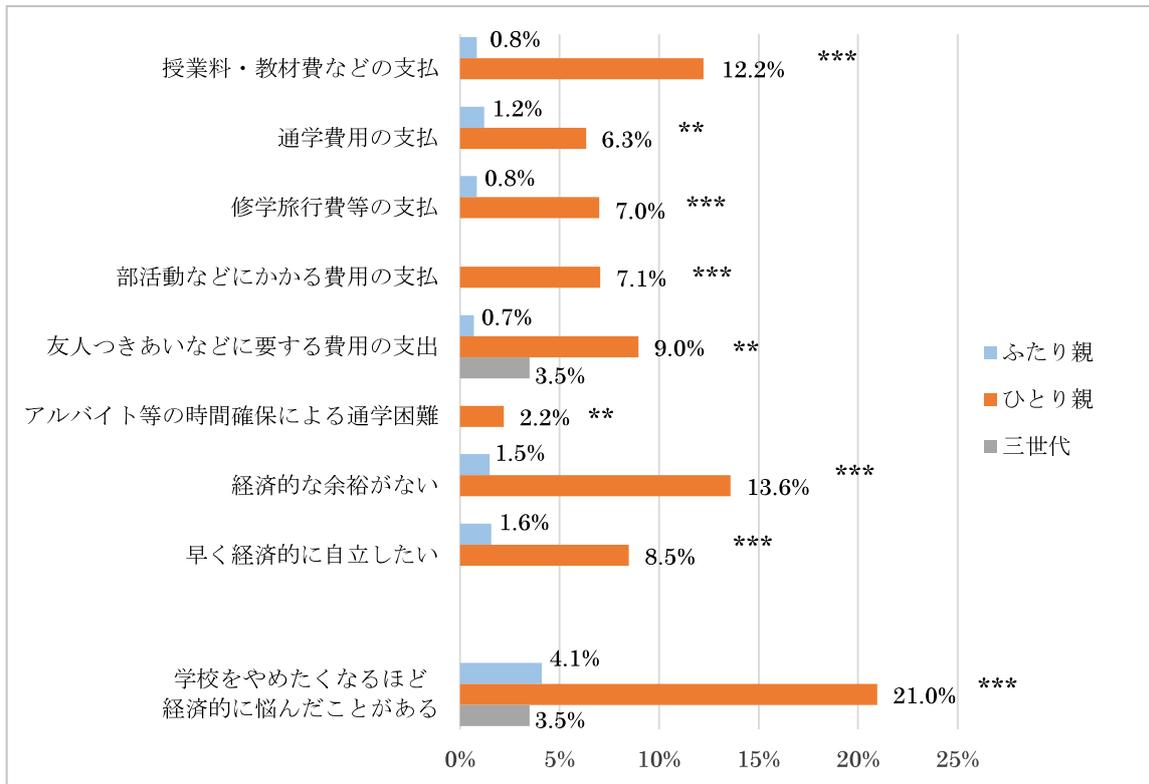
※19 歳以上および「ひとり暮らし」、「無回答」を除いた集計(図表 5-5~8)

図表 5-9 経済的な悩みがあった割合(15-18 歳):所得階層別



※19 歳以上および「ひとり暮らし」、「無回答」を除いた集計

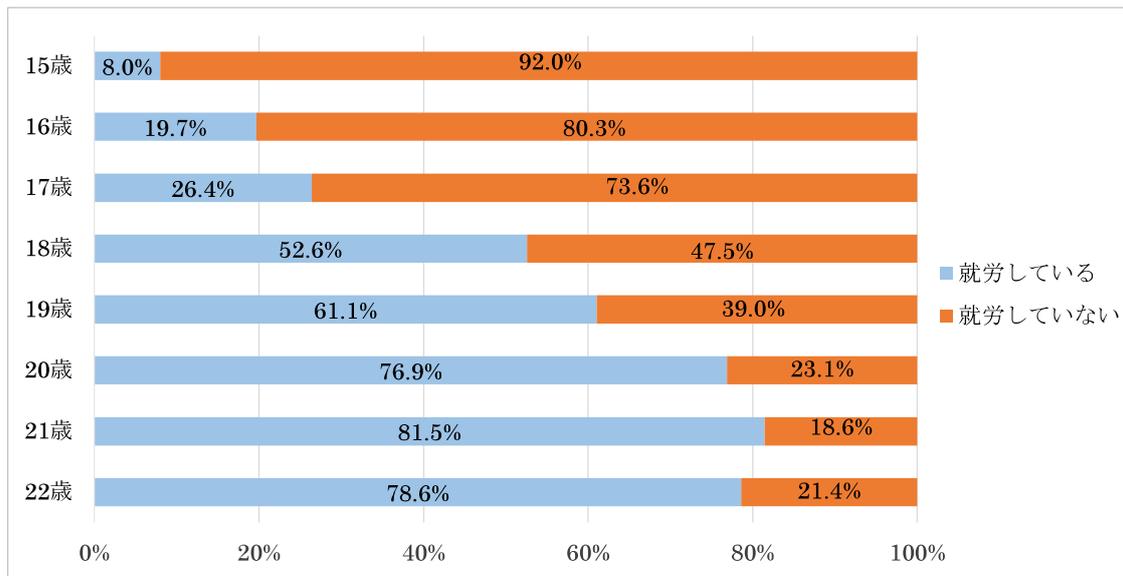
図表 5-10 経済的な悩みがあった割合(15-18 歳):世帯タイプ別



※19 歳以上および「一人暮らし」、および「無回答」を除いた集計

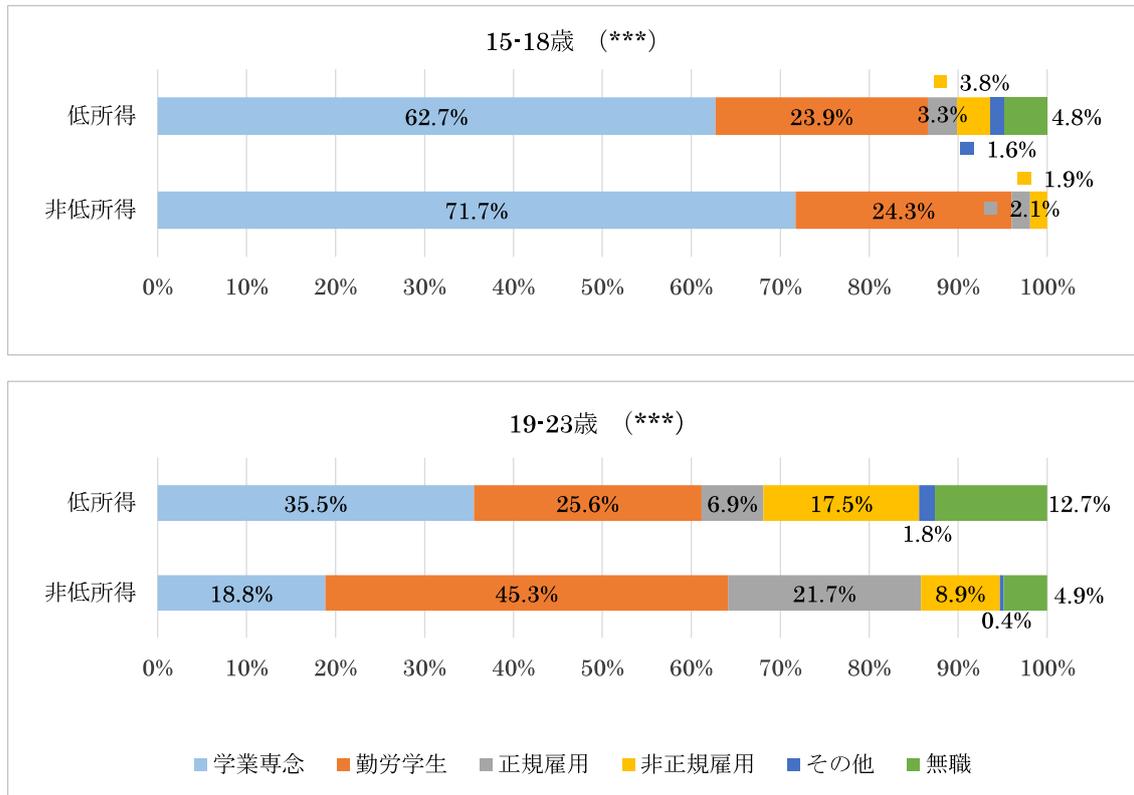
6 就労状況と就労にかかわる困難

図表 6-1 就労状況:年齢別 (***)



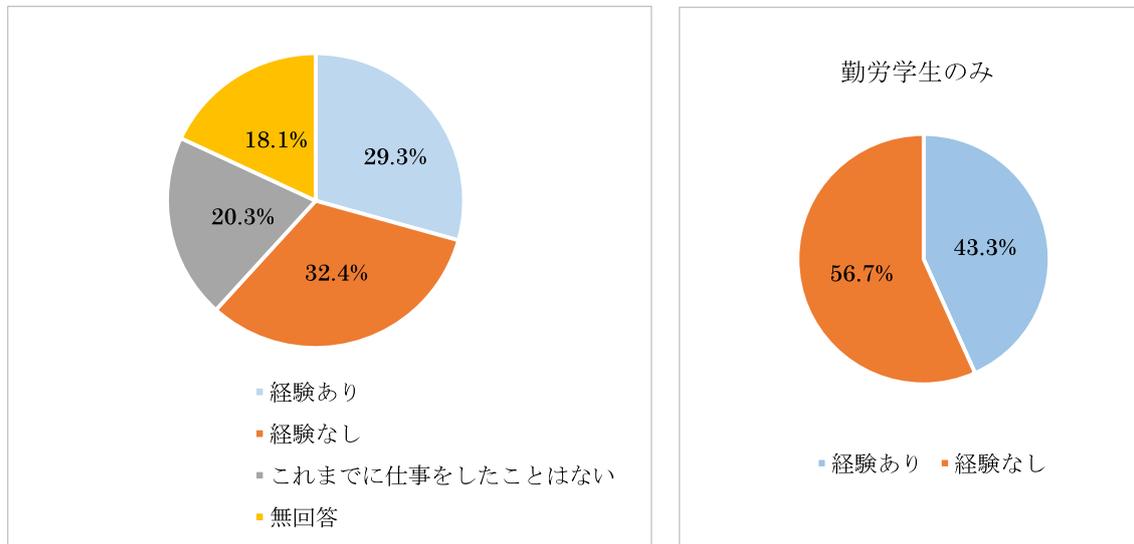
※23 歳はサンプル数が少ないため集計外。

図表 6-2 就労形態:所得階層別、年齢層別

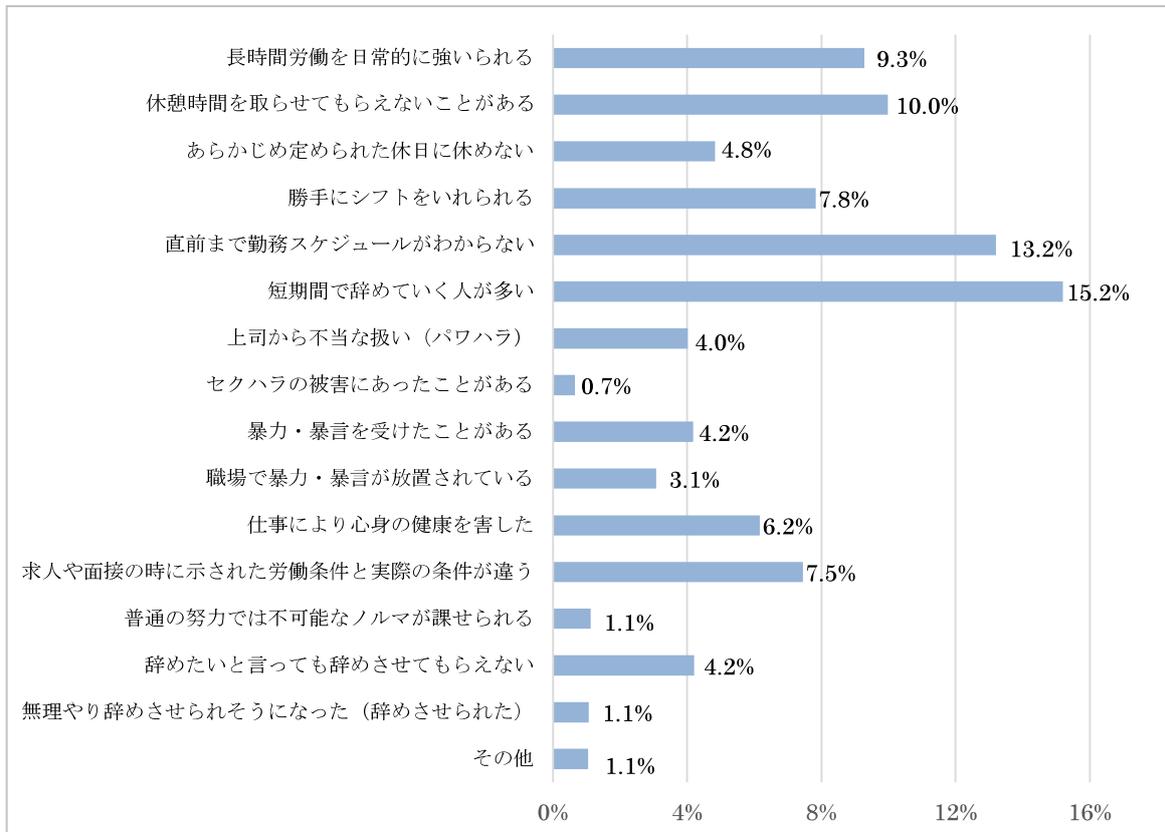


※「学業専念」は、アルバイト等就労をしていない学生。「勤労学生」は、アルバイト等就労をしている学生

図表 6-3 職場でのトラブル経験

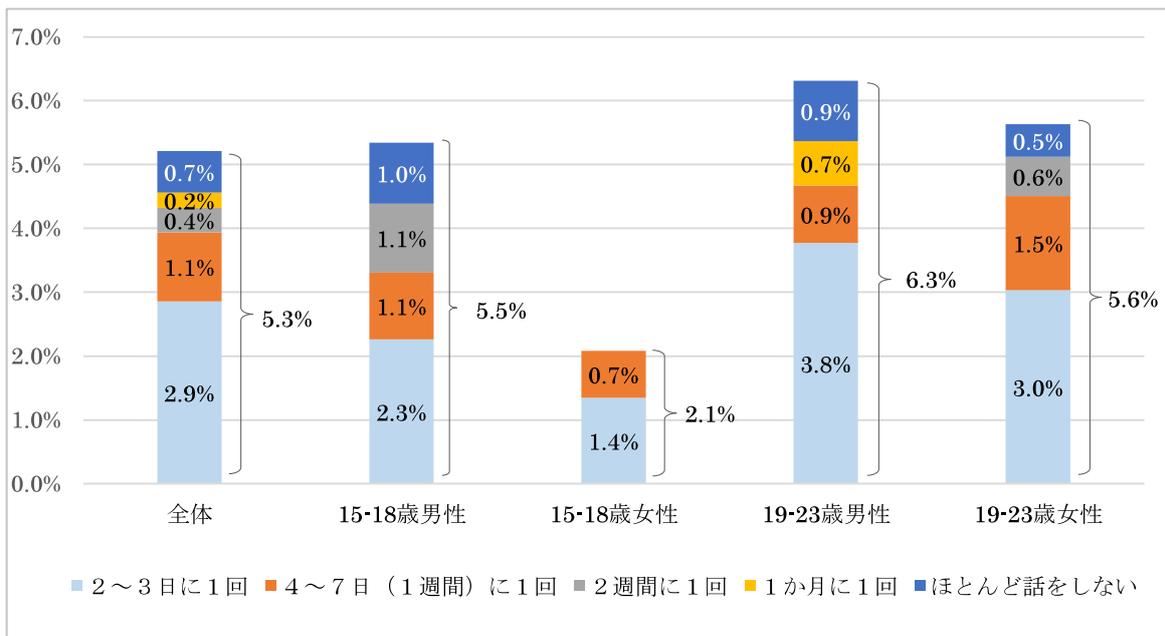


図表 6-4 職場でのトラブル経験の内容と経験割合

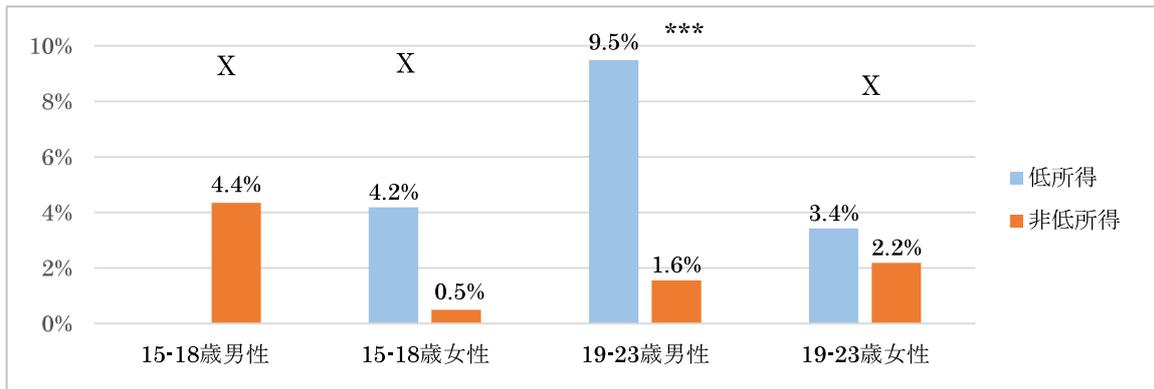


7 社会的孤立

図表 7-1 他の人と毎日、会話をしない若者の割合(X)

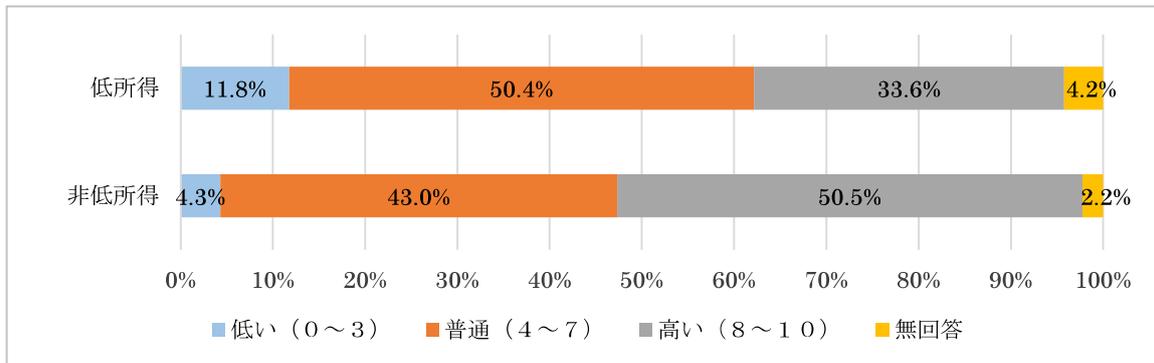


図表 7-2 会話が4～7日に1回以下の若者の割合:所得階層、年齢層別

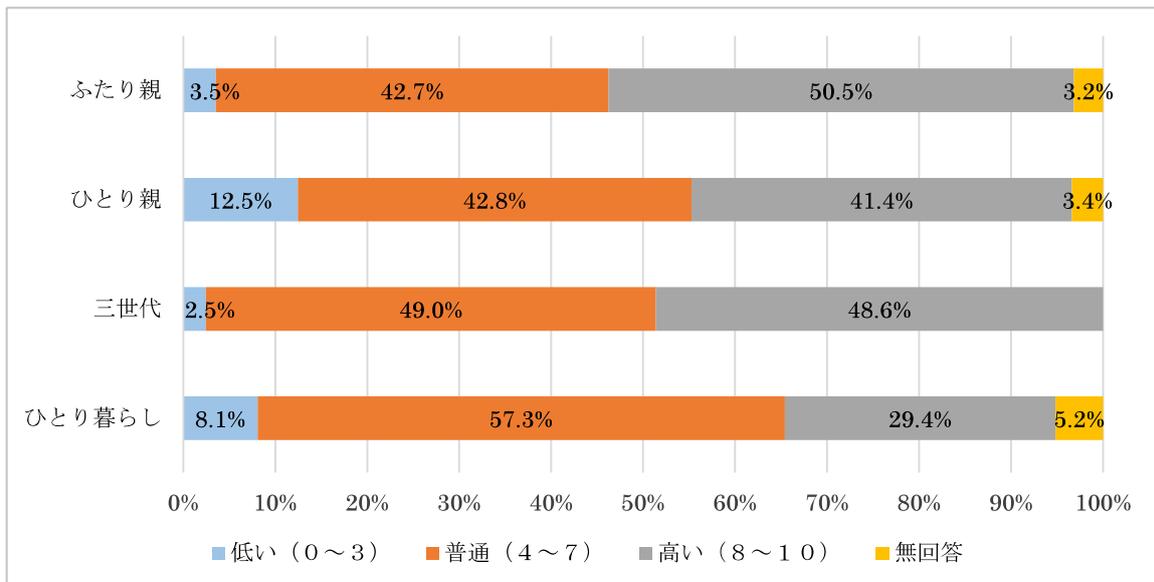


8 精神状況

図表 8-1 若者の幸福度:所得階層別 (***)

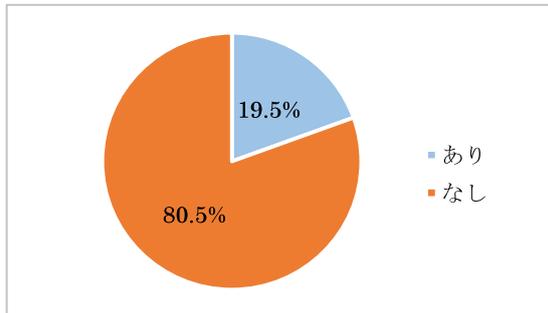


図表 8-2 若者の幸福度:世帯タイプ別 (***)



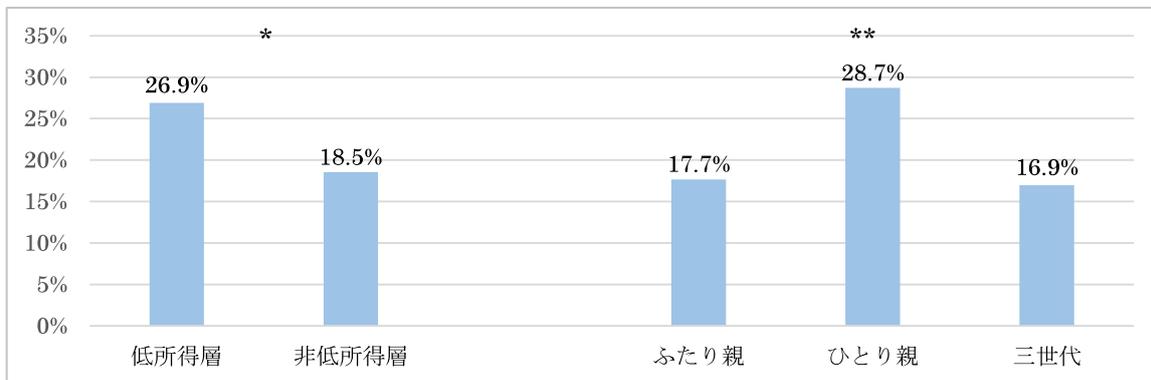
9 親の状況

図表 9-1 抑うつ傾向がある保護者の割合(CES-D*)

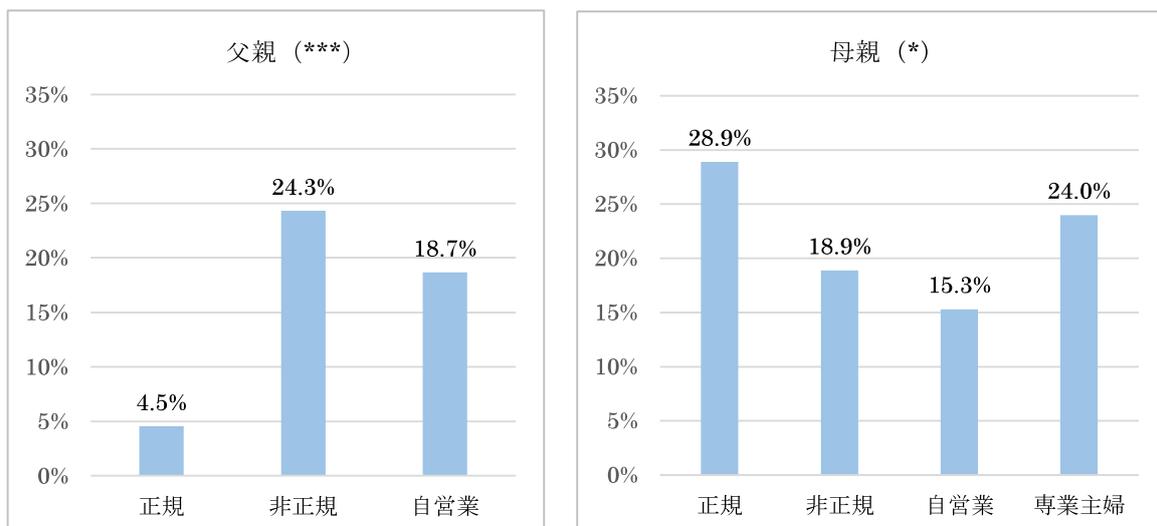


※ 保護者の抑うつ傾向を測る指標として、簡易版のCES-D尺度を用いている。CES-D尺度は、最近1週間の心の状態(「物事に集中できない」「落ち込んでいる」など10項目)についての経験頻度(「ほとんどない」「1~2日」「3~4日」「5日以上」)を聞き、それを点数化するものである。10項目を選択肢に応じてそれぞれ0~3点で点数化し、その合計点数が11点以上の場合、抑うつ傾向があると判断される。

図表 9-2 抑うつ傾向がある保護者の割合:所得階層別、世帯タイプ別



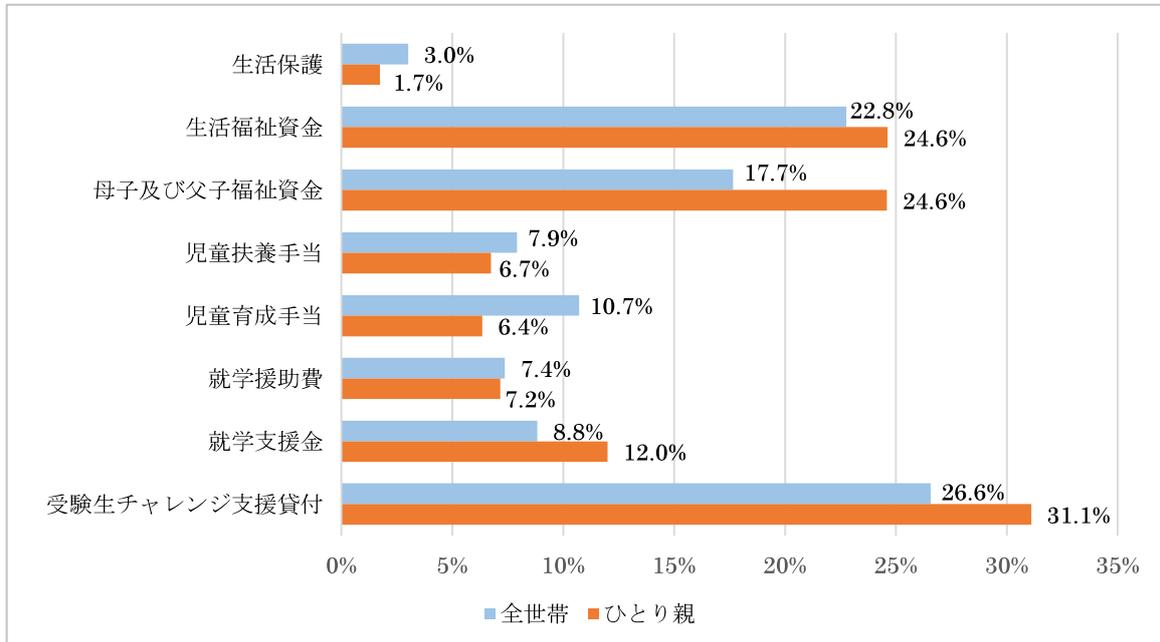
図表 9-3 抑うつ傾向がある保護者の割合:就労形態別



10 支援制度の利用と周知

(1) 支援制度の認知度

図表 10-1 以下の制度を「知らない」割合：保護者



(2) 支援制度を認知していない保護者の相談先

図表 10-2 制度を一つも「知らない」とした保護者が困ったときの相談相手

区・市役所（福祉部門、福祉事務所）	3.9%
区・市役所（子育て部門、子ども家庭支援センター）	1.8%
区・市役所（教育部門）	1.4%
区・市役所（雇用就労部門）	0.8%
学校、保育所、幼稚園の先生、スクールカウンセラー等	1.8%
民生委員・児童委員	0.2%
社会福祉協議会	0.0%
保健所・保健センター	0.6%
ハローワーク	1.9%
家族・親族	49.7%
友人・知人	12.4%
インターネットの相談サイト	1.2%
その他	2.0%
相談する相手や場所がない	10.5%
相談の必要はない	27.9%

集計方法

- すべての集計は、自治体、年齢層、性別の回収率にてウェイトを付けて集計している。
- 本報告において、クロス表の掲載の際には、 χ 二乗検定によって分布が統計的に有意であるかを検定している。その結果、1%水準で有意である場合は表頭に「***」、5%水準で有意の場合は「**」、10%水準で有意の場合は「*」、有意でない場合は「X」を付している。
- 世帯タイプは、保護者票の子供と父親、母親それぞれの同居状況から判別している。そのため、各制度や公的統計の定義とは必ずしも一致しない。
- 端数処理の関係上、合計と一致しない場合がある。
- 本報告の数値は速報値のため、今後公表される数値とは異なる場合がある。